

新しい家庭科

あそび

ウ

イ

11月号

家事労働を問う



巻頭言

家事今昔

矢島せい子

東京上野公園不忍池のほとりに、台東区立下町風俗資料館がある。そこの一階に復元された下町の長屋（大正期）の台所を見て、私は感慨が深かった。

明治大正を浅草で育って、下町女の家事のあけくれをつぶさに体験したからであろう。狭くてひくい流しの前にしゃがみ、うずくまりながらの米ときや鍋釜みがきに、つめたい冬はアカギレに水がしみた。それでも、水道がひけて水汲みが楽になった時の女たちの喜びは大きく、燃料が薪から木炭になり、やがてガスが台所へ引けたころ、立って出来る台所仕事のための立流し台は、現代のシステムキッチン以上に女たちの関心をさそった。

女の専業だった家事労働を、昔は安い金で買っていた家もあった。それがのちにお手伝いさんと名が変わった女中さんたちだったが実質的に職種は細分化されていて、下女、仲働き、小間使いなどでつまり家事の下請である。

私は大正末期に結婚したが、家族と夫へのサービスだけが専門の女だけがする家事からの脱出を願い、人間の生命を守るために、夫と妻が家事をともに営む家庭を作ることを時間をかけて実行してきた。家庭電化時代を迎え、さらに家事商品化の現代に至って、生命を守る家事を大切にすれば、時に手間ひまかけての労働強化になることがあっても、やむを得ないなどと話し合いながら老後も二人でやっている。その家事のお蔭なのか、いまだに健康で、社会参加の戦列につらなっているのである。

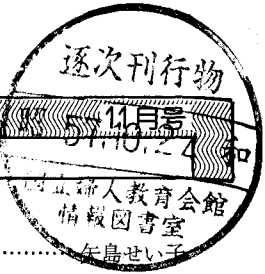
(家事評論家)



1982年

We

第571号
1982.10.24



家事労働を問う

巻頭言 〈家事今昔〉

* 家事労働を問う

| | | |
|------------------|-------------|----|
| 家事労働とは何か | 伊藤 セツ、大森 和子 | 2 |
| もう、誰かに奉仕するのはやめよう | 深尾 勝子 | 6 |
| 家事は文化を生むか | 天野 寛子 | 10 |
| 家事は“合理化”しうるか | 萩生田佳寿子 | 14 |
| 女もすなる家事を | 荒木 敦 | 18 |
| 女もすなる育児を | 丹原 恒則 | 20 |

* 新しい家庭科を創るために

| | | | |
|--------|----------------------|-------|----|
| 小学校では | 教科書、教師、ゴミ問題 | 名取 弘文 | 23 |
| 中学校では | 男女共学の被服整理Ⅱ | 佐川加寿子 | 29 |
| 高等学校では | 自らの文化をうみ出す家庭クラブ | 寺島 紘子 | 34 |
| 大学では | 教師教育として「家庭科教材研究」を考える | 朴木佳緒留 | 40 |

* 発言

| | | | |
|------------|----------------|-------|----|
| 学習の主人公たち | 鹿児島県立穎娃高校生徒 | 52 | |
| 明日の家庭科教師たち | 私が学んだ小・中・高の家庭科 | 中尾 尚子 | 54 |
| 市民として | 寺島紘子さんへ | 新井 純子 | 56 |
| | 父 | 脇 美智子 | 58 |
| 親も言いたい | 子供に伝えたいくらしの営み | 小林カツ代 | 59 |
| 教師のつぶやき | 生活していない子どもたち | 駒野 陽子 | 61 |

* 連載

| | | | |
|----------------------|------------------|--------|----|
| 視点 | 一つの闘い—担任はずし訴訟 | 長谷川 孝 | 46 |
| counselling 入門(現場から) | カウンセリング研修について(1) | 児玉すみ子 | 48 |
| We の読書室 | 暮らしの中で かかわる力を | 横山 雅子 | 66 |
| テレビ残像 | 『終りにみた街』 | 野村 康子 | 67 |
| 銀輪のうた | 秋に想う | 栗原 実抄 | 68 |
| K子さんチのね子たち | 貝柱とコーンスープ | さとうけいこ | 69 |
| 丙十舞雅里バラード | (?) | 門野 晴子 | 51 |
| 波 | 家事労働とは何か | 半田たつ子 | 70 |

Weの会だより 64 / わたしの家庭科通信 72 / 報告 73 / わたくしからあなたに 74 / 情報 53 / 資料 76 / あんてな 77 / 十字路 78 / “We” EDITOR'S NOTE 80

表紙 馬場洋子

We

家事労働を問う

家事労働とは何か



伊藤 セツ

大森 和子

家事労働をどう規定するか

わたくしたちは、昨年九月、光生館から『家事労働』という本を出しましたが、その時、共同研究者の間で、「家事労働とは何か、家事労働をどう規定するか」をめぐって、長い問討論を重ねました。

家事労働をめぐっては、次のような諸課題があります。すなわち、生活の科学化・合理化、家庭内の両性関係の新しい創造、男女平等、婦人解放の達成（男女を問わず、人間の全面的開花をめざす）、生活文化の伝承や新しい生活文化・生活様式の創造、家庭科教育の課題などです。

わたくしたちは、家政学・生活科学という研究領域に足場をおいて、家庭生活の向上という視点をあくまで中心にすえつつ、それらの家事労働をめぐる諸課題が、お互いに対立し、矛盾するものとしてではなく、統一的にこれらのすべてを包括した家事労働論を構築したいと考えました。

従来の家政学的事業労働研究の成果をくみ入れ、婦人解放論や経

済学の議論ともかみ合う家事労働の規定を問いつめた結果、わたくしたちは、次のように書くことになりました。

「家事労働は、労働という側面からみれば、個別的家庭生活の場で、家族員の広い生命活動をも含めた労働力の再生産のために行われる、家事、育児、家庭管理の労働であり、今日では、それは社会的労働過程での労働に対して私的労働であり、かつ個人的消費の過程での労働であるという性格をもっている。

さらに家事労働は、家庭生活の場で日々繰り返されることにより、家庭生活の歴史を築き、家庭生活文化を伝承し、創造するという文化的、技術的、教育的側面もあわせ持っている。」（『家事労働』3頁）

折しも、久場嬉子氏、竹中恵美子氏、水田珠枝氏らによって、欧米のマルキスト・フェミニストやラディカル・エコノミストたちの家事労働の理論的位置づけが紹介されました。これらは、新しいものあるいは注目すべきものとして我が国にも受入れられました。

わたくしたちは、家事労働をめぐるさまざまな議論ともかみあうような、しかも一面的でない規定をと考えて、前述のようなことになったわけです。

「労働」「労働力の再生産」の概念をめぐってここで「労働」「労働力の再生産」という概念についてふれなければなりません。

労働とは、自然を人間生活に役立つかたちに変化させる人間の活動であり、人間は労働によって自然をかえて、人間の生存を可能にしました。それと同時に、労働によって人間の肉体的・精神的能力を發展させてきたのです。

その意味での労働であり、労働力とは、人間が必要とするときに使用できる、その人の肉体的・精神的能力であり、他の動物とはちがう、人間の基本的な存立条件だと考えます。わたくしたちが労働、労働力といったときは右の意味のものなのです。

ところが「労働」とか「労働力の再生産」とかいう概念は、経済学固有のものだと考えている人が家政学の中には多く、「家政学に経済学の概念をもちこんでも、家政学の発展に役立たない」と公言する人もあります。また、「労働」とか「労働力の再生産」という概念を自己流に解釈する人もいて、労働力ということをも、単に商品として通用する賃労働における労働力と解して、「家庭は労働力の再生産というような、企業に奉仕するものではない」と抗議する人も多く、家庭科教育や家政学関係者の間で、しばしば問題とされることなのです。しかし、家政学は学問ですから、科学でない常識的な対応を卒業したいと思いません。正しい意味で用いれば、哲学であれ、経済学であれ、家政学であれ、「労働力」とは、共通の科学

的概念として有用であると考えます。

わたくしたちは前に述べたように「労働力の再生産」ということを家事労働の規定の中に用いているのですが、なかなか正しく理解されないのが現状のようです。

わたくしたちが議論し、考え続けて発表したテーマと同じ題を『We』の編集部からいただきましたので、以上のことにふれざるを得ませんでした。

家事労働とは何か

ここで再び「家事労働とは何か」を表現をかえて考えてみましょう。

家事労働とは、家庭生活を維持していく上で、家族員の家庭生活にとまらう労働であり、その労働は、時代によって変化してきています。

人間が自給自足の生活をしてきた時代や、企業生産でも家庭単位で生産活動をしてきた時代には、生産労働と家事労働とは未分化です。資本主義社会に進み、物の生産は主として企業で行われるようになって、家事労働と生産労働は分かれます。

家事労働は、家族員の労働力（活動力）：家政学の中では、労働力という概念があまりにも誤解を受けやすいので、活動力というとも（思います）の再生産のために、家族によって行われる労働であるということになります。今日でもなお、農家や商家などでは、主婦の生産労働と家事労働は区分しにくく重なりあったものになっています。ですからこの定義は、生産労働あるいは社会的労働の場と家事労働の場が離れている勤労生活者世帯の場合になります。

家族がする家事労働でなく、たとえば家政婦に家事を頼む場合

| 家事労働の分類 | |
|-----------|--|
| A 家事 | I 購入労働 II 消費労働 (1) 自家生産的 (家庭菜園) (2) 保管 (3) 追加的加工 料理, 裁縫, 家庭大工 (4) 繕繕, つくろい 洗濯, つくろい (5) 環境整備 整理・整頓, 掃除, ゴミ処理, 食器洗い |
| | B サービス |
| C 家庭管理 | 計画 (献立, 予算) 記録 家計簿 学習 {家事・育児について 商品知識について} |

は、家政婦の労働には報酬がともない、いいかえれば商品としての労働ですから、家事という仕事をして、それは職業労働です。資本主義社会における生産は、商品の生産であります。商品として購入された生活手段 (生活に必要な物資や用具・施設など) が、純消費にうつされるまでの間には、一連のプロセスが入ります。その労働が家事労働です。

家事労働は消費労働であり、これらの仕事のうち家族員に担われる部分を家事労働といえます。

家事労働は商品としての労働ではないので、経済的には価値を生産するものではありません。ここでいう価値とは経済的価値であって、人間にとって価値があるとかないとかいうことではありません。家事・育児のための人間労働力の支出は、自然と人間との間の物資代謝の一環であり、労働の一つの形態であることはいまでもありません。そして家事労働は、人間のために必要不可欠のもので

あります。

以上のように、家事労働は、私的・個別的な消費労働であり、労働生理学的には軽い労働で、職業労働における事務的な仕事や管理的な仕事と同様に、エネルギー消費は多い方ではありません。

家事労働の経済的価値への換算等についてはくりかえしてありますが、ここでいう価値とは、経済的価値のことであって、人間にとって価値があるか否かとは別問題です。

家事労働は、本来資本主義社会にあって、市場で売買されるものではありませんから、経済的な価値を生じるものではないのですが、家事労働の経済的な意味として、竹中恵美子氏は次のように論じています。

〈竹中恵美子氏による家事労働の経済的評価〉

「家事労働の経済的評価は、具体的には家族手当の中の主婦手当や、育児休暇制度における休暇期間中の給付、あるいは年金制度における家事育児期間中の保険料の公的在庫からの支出などの形として実現をみている。しかし、これらの経済的評価は、家事労働が経済的価値を生産するというのではなく、労働力の再生産のための労働が、社会的労働として行われず、私的労働によって代行されていることに基く社会的権利の要求ということができよう」という見解です。

〈近代経済学における家事労働の経済的評価〉

近代経済学では次のように家事労働の経済的評価の問題がとりあげられ、家庭内での消費そのものを多面的に研究の対象としています。アメリカでは、現代シカゴ学派と称される経済学者によって、主に研究が推進されています。国民所得とは、財貨・サービスを生

産するとき、労働と資本とが生み出した所得の総計をいいますが、家事サービスを無視しては、経済体系に欠陥ができる。主婦の経済的役割を考えないことは、国民経済をめぐる体系をくずすものであり、片手落ちがあるとして、家事労働の経済的評価を問題としていいます。家族構成と家事労働時間から、家事労働の作業量を測定し、金銭的価値を出します。この考えの根底には、性別役割分業を前提とした考えがあるといえましょう。

日本では、余暇開発センターの研究があります。昭和五十一年度の国民所得は一四四・一兆円で、そのうち雇用者所得は約九一・六兆円、法人所得は一三・六兆円であるが、これに対し推計結果から出した家事サービスの価値は男女合計で約四四・七兆円で国民所得の約三割、法人所得の三倍以上であるとし、女性の家事サービスの価値は、約三五・四兆円となると発表されました。

〈判例にみる家事労働の経済的評価〉

交通事故などによる婦人被害者の損害賠償請求にかかわる主婦の家事労働の評価の問題をみましょう。主婦が専ら家事労働にしながらいる場合は、収入がないから逸失利益を算定できないとする判決と逸失利益を認める判決の両方があります。認める判決の理由は、大別してつぎのようになります。

- ①男子無職者の場合と同じく、将来の稼働能力喪失の見地から算定するもの。
- ②妻の家事労働の価値を、妻が生存すればまぬがれたはずの出費から評価しようとするもの。

③妻の家事労働の価値は、夫などの所得中に含まれることが、民法の財産分与の趣旨からうかがえるから、そこから算定基準を見い

だそうとする。

以上の三つに分けられます。

家事労働改善の方向

1 家事労働は、私企業における商品の生産やサービスによって、次第にそれに代えられています。このような家事労働の商品化・社会化に対して、消費者は、主体性をもって商品やサービスの質はよいか、価格は適正かをチェックすることがたいせつです。

2 従来、家事労働は主婦が大部分をなってきました。家事労働は本質的には家族員が分担すべきものです。

3 家事労働は、近隣の者が助けあったり、共同化することによって合理化をはかることができます。

4 夫や妻の職場において、労働条件の改善、福利厚生を要求すること。

5 公共的な施設、サービス、生活環境改善、地域福祉の要求などを押しすすめるべきでしょう。

以上のように、わたくしたちは家庭生活の向上と個々の家族員の間開発をめざし、家族がそれぞれ人格的向上をはかり得るよう、家事労働は、それと矛盾しない方向で改善すべきであります。

(伊藤・東京都立立川短期大学)

(大森・東京家政大学)

家事労働を問う

もう、誰かに

奉仕するのはやめよう

—Iさん、Yさんの「家事・育児」—



深尾 勝子

七月下旬のある夜、「We」の読者という若い女の人——Iさんと呼ぼう、から長距離電話がかかってきた。私が、母子心中をしようとして三歳と一歳の子供を締め殺し、自分だけが生き残ってしまったYさんにかかわる会「Yさんの問題を自分自身の問題として考え、行動する会」の会員であることを伝え聞き、ワラにもすがる気持でダイヤルを回した、ということだった。

柔らかな澄んだ声で、どうやって私の自宅の電話番号を知ったか、を要領よく説明したあと、Iさんはたまたみかけるように「まもなく三か月になる娘の発育が遅れているんです」「たまらない気持で、このままガスのセンをひねって死ねたらなんて、考えてしまうのです」と言い、「『Yさんの会』のことを知って、とても他人事と思えなくて」「もっとも、私はいくじがないので死ねないでしょうけど」と言った。

娘の発育が遅れている、と思い始めてから、Iさんは子供を抱いて戸外に出ることもしなくなった、と言う。近所の人のちょっとし

た言葉が発育の遅れを指摘しているようで、耐えられないから。自分の母にだけは打ち明けたが、夫の親や親せきには言っていない。「とても言えない。なんと言われるか。血の濃い人たちなんです」。友人にも相談していない。「そんなことまで言い合える人はいない」から。

そして、Iさん自身が、子供の発育が遅れている——ひょっとしたら障害児かもしれない、ということに対して「世の中に障害を持った人がいる、ということは知っていた。でも、私の子が障害児になるなんて考えてもみなかった」「平凡に、幸せに生きたかった。幸せだった昔のことばかり考える」と言った。

保健所の職員は、発達の遅れについて「まだ小さ過ぎるので、はつきり言えない。お母さんが働きかけをするように」と言ったそうだ。だからIさんは、家の中に閉じ込め、祈るような気持で「笑ってちょうだい、起きてちょうだい」と念じながら、子供に笑いか

けたり、子供をうつぶせにして起きあがらせる運動をさせているという。

話を聞きながら、ああ、ここにも、一見、うるわしく立派そう
で、その実、残酷で非人間的な価値観にがんじがらめになり苦しんでいる女の人がいる。このままでは、どうどう巡りをしながら、落ち込んでゆくばかりだ、と、胸がしめつけられるような痛みを感じる
と同時に、Iさんをそのように追い込んでいる社会に、強い怒りがわき起こってきた。

「Yさんの会」の会報を送る約束をしてから、私は「近所の人や夫の親、親せきの人と同じように、あなた自身も、子供は発育が遅れた、障害児であってはならない、と思っている。それでは、あなたも子供も救われない。考え方を変えること。そのために必要なら、札幌にいらっしゃい」と言つて、電話を切った。

子供を殺してしまったYさんの場合も、三歳になったAちゃんが自分の年齢や名前が言えず、保健所の三歳児健診で「発育が遅れている」と言われ、再健診で「自閉的傾向がある。集団の中で遊ばせるように」と指示されている。

Aちゃんを集団の中で遊ばせるため、Yさんは一歳の長女をおぶ
い、Aちゃんの手を引いて、雪道を「仲よし子供館（札幌市が母と子の教育の場と称し、週二回各二時間、公園や広場などを利用して催す集団遊びの場）」や楽器メーカーが主催する音楽教室に通い、
家庭内でも、話しかけや遊びをし、膚と膚のふれ合いにつとめるなど自閉症の治療によい、と言われていることはすべてやった。

Yさんは、Aちゃんの遅れを取りもどそうと孤立無縁でがんばる

一方、スナックを経営する夫に対しても、よき妻であろうと、午前
三時、四時に帰宅する夫を夜食を用意して待ち、午後二時には食事
をさせて送り出す、という睡眠時間もろくに取れない生活をしてい
た。心労、疲労が積み重なるなかで、Yさんは「世間の人が、私を
笑っている」「死神が、おまえたちの結婚はまちがっていた。死ね、
と言った」などの妄想にとらわれるようになり、錯乱状態の中で、
子供の首を締めてしまった。

Yさんは殺人罪で起訴され、私たちの主張——「Yさんは現代社
会の男女の役割分担、貧しい社会福祉、障害児・者対策などのひず
みの中で抑うつ神経症になり、心身そう失の状態で母子心中しよう
とした」は、認められず、札幌地裁で懲役三年の実判決が言い渡
され、札幌高裁で控訴棄却、最高裁でも上告棄却となり、いま刑務
所で服役している。

控訴棄却の判決が出たあとで、Yさんは、かつての生活をこんな
ふうに振り返っている。「私の場合、自分を朝顔のツルで、夫は
竹だと思っていた。でも、実際はなにもなくて、支えのない針金み
たいなものだった。家事や育児をするうえで、なんでもかでも、き
ちんとしたくて、シャカリキになってクソまじめでいたのは、そう
することが愛情だ、と、エサにしていたのかもしれない……。ずつ
と片思いの気持でいたから、夫につくしまくったのよね。三六五日
働いて、会話ししい会話もなかった。そういうのは本当にダメよ
ね。自分をもたなきや……」

私に長距離電話をかけてきたIさんも、そしてYさんも、もし、

子供が「普通の子」だったら、周囲の人も、本人自身も、家事・育児を立派にやっているよき妻、よき母だと疑いなく思っていたらう。それが、障害児らしい子供を持った、ということだけで、肩身狭く、人目を避け、人の言葉を気にして生きていかなければならなくなる。生き難い、死にたいと思いつめてしまう。

これは、もう、「子供は健康な子であってほしい」などと言うきれいごとの話ではない。子供は障害のない「普通の子」でなくてはならない、ということだ。それが、産み育てる者、家事・育児をする者とされている女たちに対する非人間的で残酷な「要請」なのだ。

これまで、家事・育児については、大きく分けて二つの面から論じられてきた。ひとつは「私は（私の家庭では）こんなふうに家事・育児を分担している」と、具体例をあげて、そのあり方を論ずるもの。もうひとつは「社会にとって家事・育児とは」と社会科学的に家事・育児を分析するもの。そして、このどちらもが、家事・育児を家庭という単位内で完結する、または家庭という単位責任の下で行われる、ということを前提に展開されてきた。

ある家庭がどのように性による役割分担を越えて家事・育児をやっているか、あるいはやったか、という話は、その構成員ひとりひとりにとっては大変重要だし、その意味での示唆は読み手に与える。だが、家事・育児を分け持った構成員が、何を願って、構成員以外の人とどうかかわって生きるのか、が語られない限り、つまり分担することの意味が家庭内とその構成員個人にとどまる限りは、結局のところ「そういうやり方もありますネ」「うまくいきまじたか。よかったですネ」というところに落ち着いてしまう。

社会科学にとらえた家事・育児については、一九五五年から始まった主婦論争や、その後書かれた家事労働の経済的評価をめぐるたくさんの論文によって、論理的には整理されたかのように見える。その要旨を簡単に言えば、家事・育児は二つに分けることが出来る。ひとつは自立していない、あるいは自立出来ない幼児や老人、障害者などの構成員に対するもの、もうひとつは自立している構成員に対するもの。前者は公的サービス、あるいは、それに携わる者への公的経済保障が必要とされるもの。後者は、自立したものが、それぞれ自らのために私的に行う、経済保障などを考える対象にはならないもの、となる。

自立という基準で、家事・育児を公的と私的に分けるこの考え方は、性別役割分担にとられずに家事・育児を分け持つというやり方のひとつの論理的な裏付けにもなり、これまで、連綿と女の手で行われてきた家事・育児と言われるものを、大きく交通整理するものとしては、評価出来る。だが、ここで求められるのは、家事・育児そのものの問い直しである。

自立という言葉も、もっと厳密に定着する必要があるだろう。障害者は自立出来ない存在なのか。あるいは、「自立出来ない」とされる障害者には、どのような家事・育児サービスが考えられるのか。これまで、女が、子供や老人、障害者に対してしてきたことを、そのままの形で、——サービスするもの、されるものという関係の中で、社会的責任として行うことで十分なのか、など。

いまま、多くの女たちは、自ら望んで結婚をし、子供を産み育て、家庭を営んでいる、と思っている。Iさんの言う「平凡な幸せ」

を求めて、必死に家事・育児をしている。だが、自ら望んでいた、
と思ひ込んでいたことが、実は、昔ながらの家族制度そのままの人
間観、家庭観、社会通念にしばられ、その要請に答えていたに過ぎ
なかったことが、障害児や障害児らしい子供を産んだ時に、はっき
りと見えてくる。

あいまいにされ、意識化されていないが、いま、一般に家事・育
児と言われて行われている行為の枝葉を切り落としてみれば、つま
るところ障害のない「普通の子」——出来れば「よい子、強い子、
元気な子」を産み育てるためのものであり、また、そうした子を育
てる費用を稼ぎ出し、稼ぎ続けるために働く夫に休養と栄養を与え
る営みにほかならない。

いま一度、何のための家事・育児なのか、を問わなくてはならな
い。そのところをあいまいにしたまま、従来の価値観を疑わず、
受け入れて家事・育児を行えば、家事・育児をすることが目的化さ
れ、どうしても、「役割」の「アリ地獄」におち込んでしまう。Iさん
やYさんのような悲劇も避けられない。

家事・育児の問い直しをするためには、まず何より、手あかがつ
き、古い価値観がこびりついてしまっている家事・育児という言葉
そのものを捨て去らなくてはならない。そうすることで、家族とか
家庭責任といった枠が取り払われ、ひとりひとりの人間が見えてく
る。そのうえで、子供、障害児、老人など、すべての人間の生存を
保障し、自己実現をはかるために何が必要なのか、何を、どう出来
るのかを考えなくてはならない。その結果、家事・育児という名の
下で、切り捨て、無視し、排除してきた人間から人間へのたくさん

の働きかけも浮かびあがってくるはずだ。

「Yさんの——会」の会員のひとりだが、Yさんに対する札幌高裁の
懲役三年実刑判決を聞いたあと、こんな詩を作った。

もう、誰かに奉仕するのはやめよう。

精魂こめて、やさしさ込めて生きてきたはずなのに、

その精いっぱい生きざまに対する答えがこれだった。

もう「あなたたち」の言葉は信じない。

この混乱、このみじめさ、この腹立しさ、このイラ立しさ。

すべてをひっくりかえり、じっと耐え、さめた頭で、冷静に、

これからの道を歩いて行こう。

(北海道新聞記者)



家事労働を問う

家事は文化を生むか



天野 寛子

1 生活の文化が「女の文化」のようにいわれている

生活文化や生活様式を問うことが、一種の流行のようになっていく昨今である。生活を「文化」という形で考えることのできなかつた戦後の日本人が、ようやく生活の内容を問うことができる段階になったという意味で、単なる流行に終わらせてしまっただけはならないと思う。

しかし一方、「生活文化」≡「女の文化」ととらえ、戦前女性の家事労働と現在の女性の家事労働のやり方を比較し、戦前の生活を大切にしていない、つまり生活の文化に寄与しないかのような言いかたがなされたりすることに危惧の念を抱いている。

このような考え方がどのような状況のなかで生じているのか簡単に整理してみよう。

生活文化が多方面でとりあげられるにいたった背景は、疑いもなく高度経済成長により進んだ大量生産・大量消費のなかで、「生活

が豊かになってきている」と漠然と思っているうちに、思わぬ程に変えられた変わってしまった自分たちの生活に対する反省、危機感、より積極的には「生活の質・生活の豊かさとは何か」を問う、生活を意識化していく過程といえる。たとえば、生活から自分の手ごたえが感じられなくなった不安感、自分の原体験としての生活と子供の現在の生活とのギャップ、生活体験の生きない不安、子供の身体が正常でなくなっているような生活環境や生活様式に対する反省、どうしていいかわからないやり場のない気持、現代生活のなかでの「らく」さへの志向が間違っているのではないかとという反省、地球的視野からみた資源問題と生活の様式への問題の提起、地域文化・共同体の崩れと再生の問題等々。

なかでも、「らく」さへの志向が間違っていたのではないかという問題は、社会全体の問題であるにもかかわらず、身近な家庭生活における「手抜き」という形で、女性に対して厳しい眼が向けられている。

便利さ、簡単、手軽さ、即効性などは生活革新のなかで唱い文句であったし、多くの人に目標にすべき価値として受け入れられ、私たちは企業の生産するその商品を購入し、生活のなかにとり入れてきた。その結果私たちは、生活のなかでの不便さや困難さ、ゆっくりにしたテンポ自体を排除すべきものと考え、不便さ、困難を克服することで育てられる諸能力を軽視するようになった。その面で「人間の価値ある」ものを棄ててきたのではないかという問いである。

この問題は社会生活・家庭生活を問わず、広く深く浸透している問題であって、何か一寸した手直しによって解決がはかられるわけではない。現に、社会においては、資本の論理の下に大量生産・大量消費に向けての効率主義は止められる気配はない。それゆえ、呼びかけの対象を、個々の家庭または女性に限定し、生活のなかの見える部分としての手づくりであった家事労働からの解放をめざした女性と、家事の合理化、家事労働の社会化に非難めいた厳しい眼をそそぐのである。

2 「女の文化」といわれるものは何か

戦前の家政学においては、家庭の機能のなかで例外なく子どもの人格形成、文化の伝承がとり扱われた。が、生活訓練や生活技術(狭義には家事労働)の訓練を、子どもを生活主体として育成するという見地からは扱わず、女性の修得すべき知識技術としてのみ扱い、女性を家事労働をする者としてだけ役割設定した。戦後の家政学・家庭教育の課題は、生活を破壊することなく戦前のこの性別役割分業の常識を、どう打ち破るかにあったといえる。

他方、性別役割分担思想のなかではぐくまれた生活技術を「文化」として評価する声も政治的な圧力もからんで、高い。

藤原房子氏は、女性が限られた世界、不便さのなかでそだてた能力について、その歴史的制約を認めた上で、「女が手塩にかけて育てた文化」とよび、「近ごろしきりと気になるのは、家庭的な仕事の軽視は、女性が長い間手塩にかけて育て、伝えてきた文化への軽視、つまりは形をかえた女性蔑視につながりかねない」(『手の知恵』)と言う。それらの能力、とは何だったのか。

生活のなかの細やかな心づかい、敵しき、技術を体得し応用できる自信、努力、習熟、根気、忍耐力、器用さ、生活の知恵、生活の機微の伝達、仕事の安定観、技術の質、水準の維持、形・しぐさの美しさ、コツ、かんどころ、打てばひびく気働き、周囲との調和、複雑な生活をうまくまとめるコツ、物を見る確かな眼、生活をよく知っていること、生活に対する自信、暮らしを創造的に作りあげる力、等々。

それらはたしかに一定の評価を受けるべきものをもっている。だが問題は、それを「文化」であると言った場合、その評価の高さと裏はらに、なぜ大量消費の波のなかで急激に崩壊したかということである。

3 なぜ「女の文化」が崩壊したのか

生産様式の変化に伴って起こった生活様式の変化、生活革新、生活水準の向上など、さまざまにいわれるなかで、伝統的な生活文化が押し流される契機があったとしても、女性が「手塩にかけて伝えてきた文化」が、真に女性に「創造され、愛着をもたれ、主体的に

守られ受け継がれ」たものであったならば、これほど急激に崩れることはなかったのではあるまいか。すべての母親が、「手塩にかけて伝えてきた文化」という位置付けをし、真に「これこそは娘に伝えるべきだ」と思っていたものであるなら、膨大な量の無駄なほどに便利な商品の洪水に、全面的に対抗することはできなかったにしても、もう少し伝統的な良さを伝える努力がなされたのではなからうか。

女性が不便や困難や寒さや眠さとの闘いのなかで、「細やかな心づかいや、器用さや、生活の機微」を否認なしに育てているとき、男性はそれをらくに「尽くしてもらおう」形で享受した。尽くす側とそれを受ける側という風に、男性と女性の生活に差がついていたとき、大量生産・大量消費の波にのって、男性の水準までいかぬまでも、女性が家事労働をらくにしようとしたのはむしろ当然であつただろう。

飛躍を許してもらうならば、「女が長い間手塩にかけて育て、伝えてきた文化」は同時に、「女性だけが仕方なく不便な生活に耐えていた、主体性をもたない文化」でもあつたといえるのである。

この意味で現代、家庭生活の危機だから、それを救うために「母親は家庭へ」「家庭の味を」「手づくりを」といくら女性だけに向けていわれようとも、一時的には周囲の状況に押されて、一定の役割を果たし、あるいはその役割を演じて、周囲からの規制や圧力が緩むと、すぐもとの状態へともどるだろう。

女性も男性も、「どうしてもこのことは生活上子どもに伝えねばならない」と思う内容をもつ文化、女性も男性もが支持し得る、平等で、科学的根拠をもっている生活文化でなくては、基本的には主

体性をもち得ないし、また、次の世代に継承すべき必然性を持ち得ない。このことは、今後、新しい生活文化を創造する際、女の文化・男の文化という単純な男女の役割分担を前提とした生活文化ではなくて、男女がともに平等な人間らしい関係を築けるものとしての生活文化でなくては、実り少ないであろうことを示唆している。

4 家事を「女の文化」とすることの問題点

家事を女の文化と結びつける観点は次のような問題を含んでいると私は思う。

第一には、生活が女性に限定され人間の基礎教育としての「生活教育」や人間にとつての生活文化の視点が欠落していくこと。

第二に、現代の資本主義社会の問題を女性の生き方の問題にすりかえ、女性が「深く家事に生き」さえすれば『手の知恵』藤原審爾氏の序文)、社会で起こっている非人間化を「救うことができる」かのように短絡してしまうことである。

「わたしらは、今日のあわただしい生活に押し流されながら、なにか不本意である。ありあわせの生き方ではなく、心や魂にびつたりした深い生き方をなんとなくあこがれている」という指摘は、感傷的な表現ではあるが、多くの人の共感を呼ぶ内容である。しかしこのことはいいかえれば、「落着いた生活とは何か、人間にとつて落着ける生活条件・個人の内的条件とは何か」という問題なのであって、「妻が家に居て、心をこめて家事をし、生活文化をつくってくれる生活は、夫・子にとつて最高のものだ」という形で、夫や子どもへの愛情を逆手にとつて、女性の人生を閉じ込めることで解決する問題ではないことを直視しなければならない。

第三に、生活や生活文化は、家族全員が参加して「主体的に」つくっていくものだという考え方が欠落していくことである。

第四に、女性の人生、またその可能な生活条件を考えることが欠落していくことだろう。家事Ⅱ文化Ⅱ人生目的、という関連のなかには生活の自立力はない。常に他人に依存し、基本的には屈辱や恥ずかしめにも立ち向かえない弱さを前提とする。生活の権利を保障する水準での賃金の保障、就職の機会の保障、物価上昇の抑制、住宅の保障、教育費や教育条件の保障、老後の生活・医療などを含めた生活条件のわずかの向上自体が、「生活の課題」であり、それらと取り組みつつ日々の子育てがあり、家事労働があるのであって、こうしたこととときはなして、「生活を大切にすること」も「深く生きる」こともあり得ない。

最後に、生活を大切にすること、生活に深く生きる、あるいは文化とすることが、人間の人間たるゆえんである社会的な関係をもつ「労働」ときはなしてあり得るのかのような錯覚に導く点にある。

人間が「深く生きる」ことの理解は、労働も地域社会をも含めた生活全体について「人生と生活を大切にすることとして把握されるべきであり、労働から疎外され、社会から逃避する場（逃避しきれないが）としての「家庭」で、「人間の教育」ができ、「人間らしく生きる」とができるかのように考えることは幻想にすぎない。

5 新しい生活様式の創造と家事

もともと家事とは、人生を生きる生き方に伴ってその様態を変えていくものであって、家事自体が価値で、「それを守るために」人生や生活を変えるものではない。男女の性別役割分担が当然とされ

た時代に、その人たちによって「その生活にふさわしい、家事」が行われ、たまたまその「きめ細かさや、しぐさの美しさ」が気に入られたのであったとしても、現在、それを守るために生き方を規制することになったとすれば本末転倒である。

「手塩にかけた文化」を人間の平等や労働の権利や、人生を生きる選択の自由が否定されていた時代の「文化」であったことを明確にした上で、現代もなおそれは、どのように私たちの生活に必要なものかを、選別する眼は大切だと思ふ（それをするならば、現代にも生き得る多くのものがあると思ふ）。

家事が文化とのかかわりで問題となるのは、現在の生活条件を一応所与のものとした上で、生活の主体性をとりもどす生活をつくっていくこと、その過程で家事の方法も内容も変わり、この家事をも含めた生活の様式が、生活文化と呼ぶに価するものとなるかどうかということにおいてである。

最後に、「家事は文化を生むか」というテーマに立ちかえるならば、家事は生活内容を実現していく大きな手段の一つであり、次の時代をになう世代に生活を伝える具体的な方法であるという点で、「生活様式」の大切な一部分をなすものである。この生活様式を生活文化と呼ぶならば、たしかに家事は文化と深くかかわりをもって

(昭和女子大学短期大学部)

家事労働を問う

家事は「合理化」しうるか



萩生田佳寿子

家庭電化は家事の合理化か？

家事の合理化は、かつての日本の女たちの夢だった。炊事、洗濯、拭き掃除といったひびあかぎれに悩まされる水仕事、季節ごとの衣類や寝具の洗い張りや仕立直し、一家の生計をすこしでもらくにするための爪に火を灯もすような始末やら傷んだ品物の修理と、一日中の立ち働きに息つくひまもなかったのがつい二十年ほど前までの主婦の暮らしだった。

電気洗濯機、電気冷蔵庫、電気炊飯器の三品が三種の神器ともてはやされたのは昭和三十年代の半ばごろのこと、それらを手に入れて文化的な生活をしたいと、誰もが必死に働いたのはさして遠い昔ではない。今ではそれに加えて第二次三種の神器といわれた三C、カー、クーラー、カラーテレビはもろろのこと、電気掃除機、電子レンジその他もろろの電気製品が家の内外に溢れている。豆腐一丁を買うにも郊外の家から家用車を走らせ、冷暖房に守られた快適な室内では、リモコン付きカラーテレビで舞台中継を楽しみ、料理作りは電子レンジに任せる——そんな夢のような生活が、まさに今の日常である。家事の合理化とは、人手を省くための機械化で

あるとすれば、家庭電化の完了した現在では、もはや家事は十分に合理化されたといえよう。

しかしながら、何もかも電気製品に頼るのみが家事の合理化であるとはいえない。洗濯を例にとってみれば、シーツも肌着もブラウスもひっくり返して洗濯機に投げこむのがはたして合理的といえるだろうか。洗濯機でブラウスやワンピースを洗えば、縫代の内側にゴミが入りこみ、衿先などはゴミが黒く詰まって除けなくなってしまう。セーターも洗濯機で洗うと、どんなに注意しても必ずといっていいくらい縮む。洗濯機で洗うのは布団カバーやシーツやカーテンなどの大きいもの、せいぜいで寝間着くらいまでの面積の品物にかぎるのがよい。肌着、ワンピース、ブラウス、セーター、靴下などは、たらいにぬるま湯を入れて固型せっけんか粉せっけんを使って手洗いするのがよく、ゴミが縫代に詰まったり、縮んで着られなくなったりする心配はない。第一、傷み方が洗濯機で洗うよりもずっとすくなく、品物の寿命が三倍以上も違う。

電気洗濯機で洗うものと、手洗いするものとを分けて考える。つまり頭を働かせて両方を使い分けるのが、真の家事の合理化である。

る。それは洗濯一つにかぎったことではなく、衣食住すべての面にわたって、便利な電気製品と、従来の手仕事を組み合わせ、使い分けてこそ、家事の合理化の完成に近づくことができる。

自分のことは自分でせよ

家庭電化は、既婚未婚を問わず、働く女性にとつてはまことにありがたい改革であった。電気製品のおかげでどれほど家事が合理化され、手間ひまの面で助かったか計り知れないものがある。さらにその上で、家事合理化とはなにか。それは家族の労働の合理化である。家庭電化もさることながら、根本的な家事の合理化は、家族の人手をいかに有効に活用するかにある。家族の一人一人が、いかに家事にかかわるか、これこそが家事の合理化の最大の問題点である。

日本人は男女とも甘ったれだといわれるが、事実、ごく少数を除いては確かにそうだといえる。『甘えの構造』の難しい理論は別として、大和民族という単一民族から成り立つ日本人社会は、家族肉身の甘えから、国民全体が狭い国土での親類付き合いのような全体的な甘えになる。「水に流す」「見て見ないふりをする」「清濁あわせ呑む」など、いずれも日本人特有の甘えから出た表現で、互いになすき合うようなところがあり、外国人には通用しない甘えで、しかも相手に自分の甘えを認めさせようとするところがある。

戦前から戦争中へかけての小学生や中学生は、何かにつけて「自分のことは自分でせよ」としつけられた。それを口にするのは、たいていが明治生まれの教師や父親だった。ふしぎなことに、その明治生まれの男たちは、洗濯や靴磨きなどの自分の身のまわりのことはけっしてしなかった。まして料理作りなど、男の沽券にかかわる

こととして「男子厨房に入らばならず」とばかり、死んでも台所へ入ったりはしなかった。子供たちに「自分のことは自分でせよ」としつけながら、この男たちは「自分のことは自分で絶対にしなさい」人種だったのである。

なぜか。金を稼ぐのは男だけであり、妻はその金を消費するだけの存在、すなわち家事労働の代償として養ってもらう（食わせてもらう）わけである。そのために妻の地位は低く、下女同然で、夫はその「ご主人様」である。雇われ人と雇う人との間柄である。そうした間柄の男女が一家を構え、夫婦として世間に認められていたのである。

金を稼ぐという仕事は、実は非常につらい。そのつらい部分をすべて男に担わせるのは女の甘えである。夫から家事をすべて取り上げ、生活技術不能者に仕立て上げることによって、女は確固たる妻の座を築き上げ、でんと居座ることができたのである。そして、男には、どうしてもできないこと——子供を生むことによって親子夫婦の絆で夫をがんにがらめに縛りつける。こうして「家政婦+娼婦」主婦の図式が成立する。

この点からすれば本誌七月号「波」の、売春女子高校生が母に投げつける「アンタと同じことやっただけじゃんか!」「アンタも愛してもいない男(夫)に体をまかせ、生活費を得ているではないか」などの暴言を、屁理屈とのみ退けることはできなくなる。

経済力の無い女を「食わせてやる」ことよつて男は妻を得、亭主関白として小さな家の中に君臨する。「食わせてもらう」ことの代償が家事万般の遂行と子供を生み育てることである。米を飯に炊くこともできず、妻の手を借りなければ着替えのありかさえわから

ないのが立派な夫だと信じこむ——これは男の甘えである。

夫は金を稼ぐのみ、妻は家事をこなすのみの、互いに半人前ずつの男女が二人集まってやっと一人前の人間として暮らしているのが家庭というわけである。サラリーマンの夫と専業主婦の組合せの家庭は、どれも似たりよったりである。もちろん農家や商店のように、夫婦が共に働いて立派に家業を守り立ててゆくのは一緒にない。サラリーマンの家庭でも、妻も働いている場合はこれまた専業主婦とは一緒にならない。金を稼ぐ家事もこなす立派な社会人主婦なのだから——。

不安定な今の世の中では、いつ夫が職を失って一家が路頭に迷うかも知れないのである。妻に収入があれば、夫が失業しても一家心中に追いつめられたりはしない。また夫が洗濯、炊事、ボタン付け程度の生活技術を身につけていれば、妻の病氣や単身赴任や海外長期出張も平気、栄養失調になる心配もなければ男世帯に蛆が湧く不潔さも無い。

戦前のように五人も十人も子供を生んで育てることもなく、家庭電化のおかげでひまのありあまる専業主婦は、しかしその安易さを捨てようとはしない。怠け者で、あまり能の無い女なら、こんな気楽な稼業は無いし、ひまにまかせてのデパートめぐりや、セミナーでのお遊び勉強も気ままにできる。それがこうじて、マージャン、アルコール中毒、麻薬中毒、売春までひそやかにやっている人妻さえいる。これから世の中はきびしくなるばかりなのに、こんなことでいいのだろうか。

それぞれ金を稼ぐ能力を持ち、衣食住の身のまわりのことも各自でこなせる男と女が、夫婦として愛し合い励まし合って一つ屋根の

下に住む——これが、これからの本当の家庭のあり方である。そしてこれこそが真の意味での家事の合理化である。

女の甘えは男の甘えを生む

毎週金曜日、朝日新聞は「みんなの老後」と題したページを作っているが、その読者投稿で構成する「談話室」の欄に昨年十月、三週続いて一貫したテーマが掲載された。

①「見られぬ紅葉にうづく私の心(10・16)」

短い山の秋は、山すそから紅を染めあげてはやばやと終わってしまします。その紅葉にこれから何回会えるでしょうか。私もせめて一シーズン一回くらいは山に入りたいと思うのですが、現役主婦であり、外出ぎらいの未成熟亭主を置いてはそうも出られません。自然の中に身を置きたい。それがこの喧騒と刺激の毎日を生きてゆく私の安定剤であり、活力剤でもあるのですが。

穂高酒沢のかれんな草紅葉、南アルプス野呂川溪谷を埋めるすごみのある紅葉の色。その色を思うと、年がいもなく心がうずきます。しかし、現実には複雑な日常の雑事の中で飛ぶように月日が流れ、心の高揚とは別に、足腰の乱れは恐ろしいほどの早さです。

それにしても平凡な老女が山へ行くのは、そんなに大変なことなのでしょう。女はいくつになっても男の顔色をうかがって生きなくてはならないのでしょうか。匿名希望 62歳

②「夫への家事教育こそ真の愛情(10・23)」

十六日付「見られぬ紅葉にうづく私の心」を訴える六十二歳の主婦の方へ——。そうなのは、若き日のあなた自身のあ

り方の結果であり、いわば因果応報、自業自得です。新婚早々のあなたは、夫を愛しすぎ、身の回りを何もかもしてあげたくて、至れり尽くせりに面倒を見すぎたのではないでしょうか。男子厨房に入るべからず、などとおかしな教育を受けた男どもは、幼にしては母に甘え、長じては妻に甘え、老いては嫁に甘えて、自分の肌着ひとつ洗うこともなく、食べる物も作れず、ついにほけて寝たきり老人となる。

長年連れ添った古女房の顔など見るのもいやに違いないのに、家事ができないばかりに、妻がそばにいないと不安どうにもならないのです。あなたが、新婚当時から夫に衣食住全般の家事を教え、何でもできる良きゴキブリ亭主に仕上げておいたら、紅葉すら見られないというような今の憂き目を見ないで済んだでしょうに。田中千禾夫さんの「夫のぼけ予防する家事」をよく夫に読ませてください。

若い女性たちに告ぐ——結婚式の翌日から夫に家事を教える
ことこそ、妻の眞の愛情です。
会社員 43歳

③「夫婦の年輪は多彩」(10・30)

山へ登りたいささやかな願ひも夫の顔色を気にして果たせぬ六十二歳の妻の嘆きを、夫教育の失敗が原因だと決めつける二十三日付「眞の愛情」論の残酷さに心が痛みました。

妻が教育というおごり高い所業で、結婚と同時に亭主に家事分担をさせるべきだという発想は、どういう基本理念から起こるのか不思議でなりません。

男性ながら家事もする田中千禾夫先生も書いておられるように、その人の持ち味がそうさせて行く夫婦の流れであって教育

されて成り立つ作業ではないはずです。(中略)

六十二歳の主婦の方は、足腰の衰えに山への情熱も薄れる身を案じて、未成熟亭主にちよびり害虫をかんだのだと思いますが、歳月をかけて、どうか実現するように努力してほしいと念じます。
主婦 44歳

三回にわたる以上のやりとりを読んで、正直なところ、夫にすべてを頼って暮らす専業主婦の脆弱さと、女の甘えを改めて再確認して残念に思わずにはいられなかった。①の投稿の主婦は六十二歳という年齢からして仕方のない面もある。それに対して、②の会社員(女子)の論は明快で、実に痛快で溜飲が下がる。が、③の主婦は昭和二ケタ生まれの四十四歳の若さなのに、こんな甘い量見では困るではないかと非難したくなる。夫への家事教育を「おごり高い所業」などと言っているようでは、女の自立どころか男女同権すら程遠い。これが専業主婦の心情を代表するものであるとするなら、実に残念である。

稼ぐつらさにくらべたら、家事専業など遊んでいるようなもの。パートも含め、主婦の六割以上が働いている時代である。家事が男の沽券にかかわるほどいやしい仕事なら、なぜそれを愛する妻のみに押しつけるのか。それでは夫の老後は粗大ゴミになるしか無い。女のほうが長生きするのは家事で手(掌)を使う刺激で脳がぼけないからである。

結婚後どころか、小学生のうちから両親は男児にも女兒にも家事を教えるべきである。もちろん家庭科も男女必修にする。家事の合理化とは、男女すべてが経済力も家事能力も身につけ自立した一人前の人間になることにある。
(全国大学国文学会会員)

家事労働を問う

女もすなる家事を……



荒木 敦

現代は「男もすなる××」を片端から女性が挑戦してゆく時代――正に女性の時代だ。男性が挑戦できる「女もすなるもの」は家事と育児ぐらいだ。私は六〇の手習いで家事に挑戦した。それから三年半たった。女房が病気で寝込んだのでやむを得ずというようなわけがあったからではない。女性が挑戦するのと同じ理由でということと思う。女性の挑戦がニュースになるように、私の家事体験も一部のマスコミにとりあげられたが、女性の華々しさにくらべるとみじめさはかくせない。これは人間疎外責任の加害者と被害者の立場のちがいがらくるものだから仕方ない。

女がオートバイにのるなんて、はしたないという声があるように、私の家事挑戦にも冷笑がなかったとはいえない。第一、女房が反対した。今でも家事をしてくれるのは楽でいいが、世間体が悪いといつて、必ずしもいい顔ばかりはしてくれない。それはともかく、従来、整然と確立していた男と女の世界がグラグラくずれ始めている。世直しが進行しているのだ。それに伴って、あらゆる権威

が失墜してきている。これは単なる流行とはちがう。流行は人間が勝手につくり出すが、世直しは天の働きで、人間はそれを促進するか、邪魔するかのどちらかである。

私は一市民として、この世直しの促進に役立ちたいと願っている。そんなつもりで家事に挑戦したわけではなく、家事をしている中にそんな気になってきた。よく六〇歳すぎてから家事に挑戦しても、それはお遊びにすぎず、現職の若い時になぜやらなかったと詰問されるが、そんなこといわれても困る。気がつかなかったのだから仕方ない。まあ、いくらおそくても気がつかないよりましだろう。朝に道をきかば夕に死すとも可なりといったところ。

中学校教師をしていて経歴の最後の十年間は思えば暗かった。人間疎外から異常へと濃くひろがってゆくのをひしひしと感じた。退職時はまだ校内暴力こそなかったが、登校拒否、ノイローゼ、自殺、家出などが全国的に統出していた。これは単に指導技術の改善で根本的に解決できる質のものではなさそうだ、人間社会の異常か

らくるものらしい。大学紛争、高校紛争の延長と考えた方がよさそうだ。人間の異常さは大自然の節理に反することに由来する。人間は正に天に唾する道を歩んでいるからこんなことになるのだと考えていた。どうしてそうなったのか、教育はどうあるべきかを考えても心は暗くなるばかりだった。退職の時期は迫ってきた。退職を祝う気分は全くなく、退職後の就職も気のりしなかった。

こんな時に、ふとこんなことに気がついた。人間が自ら窮地に追いこんで、異常になってきているといっても、そうもってきたのは男性ではないか。そう思うとこれまで単なる好奇心でみていたウーマンリブの意味が切実に理解できるようになった。男女平等を単に権利上の損得の問題レベルで考えていたが、人間の正常さを保つ鍵がひそんでいるのではないかと思つた。さらに、男女平等のもろもろの問題点が家事にかかわりがあるのではないかという気がした。そこで、とにかく家事に体当たりしながら、人間—男女平等の問題をじっくり考えてみたいと決心したわけだ。

三年半前のこの直観はまちがってなかったと今思っている。家事は単なる雑事どころではなく、私の女性観を一変させ、さらに私自身を人間として再生させる力をもっていた。そういう意味で、私は家事体験をほんとうによかったと感謝している。これを私は性の第二の目覚めだと思つている。第一はもちろん、若い時の性(セックス)の目覚めだが、第二は男性像、女性像の変貌につながる人間としての性(ジェンダー)の目覚めだ。

男は仕事、女は家庭という性別役割分担の由来やその当否について論ずるのは、紙数の関係で省くことにしよう。だが、このままでは、人間疎外から人間自滅への道をたどらざるを得ないと思う。男

性と女性性はWeとは反対に敵対関係になってしまふ。これまで女性の敵は痴漢や結婚詐欺師だったが、男性全体がそうなりかねない勢いだ。男性独善の社会も文明もこれ以上は発展の余地がないように見える。平和の危機にしても、行革問題にしてもそのあらわれではないか。例えば、男性文明は空中や海中居住を構想しているが、こんな文字通り根無草のようなことを女性は本気で考えるだろうか。正に今や男性はドンキョーテ丸出しの状態になりながら、自分の狂った姿に気がつかないでいる。

過去はともかく、少なくともこれから、女性を家事・育児に専念させて、その豊富な能力を埋れさせたまま、男性の能力だけで人間世界の未来を切開くことができるとは思えないのだ。男性自身、家事・育児から遊離したまま、いかにその能力を発揮しようとも、人間を回復し、人間を守る仕事ができるとはとても思えない現在の状況なのだ。

しかも、一番悪いことはそのことに本気に気づかないことだが、気づかせないわながある。それは人間の愚は人間の業であるというひらき直りである。それはその通りかもしれないが、ここでも人間即男性というあやまちを犯している。男の傲慢、暗愚をそのまま人間のそれにすりかえてしまうのだ。もちろん、人間の愚は本質的には男女の共同責任だろう。しかし、従来、男女不平等を促進し、固守してきたのは男性である。だから一度ここで男性が悔い改めて、男女平等の線に立つ、ほんとうのベター・ハーフとして、男女が夫々の能力を協力して、人類の危機を克服できるか試してみる価値があるだろう。それで駄目なら以て冥すべしだ。

そのため、今、女性の能力が発揮される動きが少しずつ、徐々に

あらわれているのも事実だが、未だ目覚めない人々が多勢いるのも事実だ。

おとなが多勢目覚めないのは仕方ないが、こどもの眼までくらすようとするのは見逃がせない。そういう点から家庭科の女子必修という教育課程は男女共修に改訂するように要求すべきだと思う。歴史教科書が国際的にクローズアップされてきたように、家庭科共修の問題も国際条約の面から前進するかもしれない。といっても他力本願のつもりではない。天の働きを忘れてはいけないと思うのだ。

家事労働を問う

女もすなる育児を……



丹原 恒則

人間は大自然の節理に則つてのみ生きられることを忘れ、今窮地に陥っている。それと同じように、人間回復のための動きも大すじとして天の働きによるのではないか。その天の働きは天体の運行のようにゆったりとしている。それにくらべ人間の努力はともすれば大変せっかちになり、つい天の働きを無視してしまうという同じあやまちを犯してしまふ。このためにも、あせらず、地道に、日々努力をつみ重ねてゆきたいものだ。

〈はじめに〉

「男は仕事、女は家庭」という固定化された性別役割分担の中で育ってきた男が、性別分業を考え直す生き方に変わっていくのは、容易ではありません。だからこそ、性格形成される教育課程での『新しい家庭科→生活科学』の男女共修が、必要であり重要だったので。私のように、既にできあがってしまった「欠陥商品」は、共働

きの共同生活・職場・地域社会といった社会教育の場で、「高い代償」を払い、しんどい思いをしながら、創り直していくしかないようです。

〈共働きでスタート〉

造られ造ってきた男の私の意識と存在そのものが、女につけを回し、病むほどに苦しめ、可能性や輝きまでも奪っているのに気づい

たのは、かけがえのないつれあいとの関係の中からでした。

親たちを親て、養い養われる関係より、独り立ちし合い自由で対等な関係を創りたいと私は主張し、一方、つれあいは勤め人と一緒になつたら家にいられるものと思つていたそうですが、就職していた事もあつて、共同生活は共働きではじまりました。そして、「結婚」してから、残業の多い部署に人事異動になつたつれあいは、半年近くにわたつて、連日連夜、帰宅が10時過ぎという生活を送り、日ごとに痩せ、顔や掌も黄ばみ、右腕から背中・腰にかけ、こるようになり、休日も外に出たがらず寝てばかりで、半年目には、とうとう倒れてしまったのです。つれあいと私だけで生活していましたが、その時の料理は、私がするしかなかったのですが、うまく作れず、結局、一口しか食べてもらえませんでした。

このころの私は、つれあいと私の組合の上部団体が、同じ政府関係特殊法人労働組合協議会(略して政労協)という事もあり、青「婦」部で、女の働き続けにくさを何とかできないものかと、「女の代理戦争」をやっていました。頭では、半分は家事をやらうと思うようになりましたが、不慣れで、その上、女の人がやってくれて楽をする習慣がしみこんでいますから、実際には、手伝い程度にしかやらうとしませんでした。

〈男自身の問題と育時連〉

悦びを分かちあいたいと思つていた人が、疲れきつて倒れた要因の一つに、家事をしない男の私の問題があつたという発見をしてからは、男の私自身が何をやるかが問題になり、ちょうどそのころ、政労協で知りあつた友人から、男も女も育児時間を！ 連絡会(略

して育時連)を知らされました。

育時連の中には、身体が思うようにならないケイワンという職業病に罹つてしまつている保育労働者と、そのつれあいというふうな、私たちと似ている人たちがいて、親近感もてました。性別分業を見直し、長時間労働でなく労働時間の短縮を求め、男も生命の成長にかかわり、男も女もゆたかに暮らしていこうという趣旨を聞き、漠然とした不安もつていた子どもとの関係も、この会の主張のようにやつていけば、共働きをしながら、うまくいくのではないかと、勇気づけられたものです。

〈食養料理〉

三十路に近づき、対を中心にした楽しみに、心残りがなくなり、そろそろ子どもをつくろうか、つくろうよと話し合ひだした81年の秋ごろから、胎児のためにも安心でき、母親もおいしく食べられる料理を作ることが、私の課題になってきました。

生命力が強いのか、つれあいはすぐに妊娠し、つわりはないものの、よく眠り、身体を休めるようになり、「女は子づくり、男は家事」へと役割分担が、変わらざるを得なくもなりました。

本やTVを見て自己流で作つた料理を、つれあいは食べようとせず、何度も腐らされると私もくさつてしまいました。そこで、実際に作りながら基礎からやってみる気になり、どうせやるなら、化学調味料を使わず、食品公害や環境問題にも関心を向け、どこか哲学的な日本C Iの食養料理教室に通うことになりました。

材料を手に入れるのに走り回るのが、ご馳走の語源だそうですが、裏庭の野菜、ワンパック、自然食品店で材料を集め、食養料

理をつくると、時間と労力がかかり、氣力が萎えてしまうほど疲れます。

ある日前ぶれもなく、つれあいが料理教室をのぞきにきた時、前の席で聞きもらさないようにノートをとり、作り方を教わっている私の姿を見て、ホロリときたそうです。早くごくあたり前のなんでもないことのようにやれるといいのですが……。

食養では、胎教を重視しており、未明に端座して古典を読みなさいとか、食べることだけでなく、人間形成に関心を寄せており、奥が深そうで、これからも興味もてそうです。

〈ラマーズ法〉

お産って何だろう、どんなお産をしようかとつれあいと話し合いい、とにかく、飯田橋の母子保健センターでやっているお産の学校へ行くことにしました。

学校で上映されたお産の記録映画の中で、お父さんが進行情からお母さんの手を握り腰をさすって「ヒーフ、ヒーフ」呼吸法と一緒にやりながら額に汗し、極期を乗り越え、お母さんの必死だった表情に笑顔がもどり、娩出期を経て、子どもと親が初顔合わせする時、お母さんは満足そうにニコニコ、お父さんの目元にはうれし涙が一杯、お母さん以上に感極まっている場面が、印象的でした。

医療機関まかせでなく、産む人が主体になり、子どもにとってかけがえのない人もかわり、励ましや喜びの通い合うお産にしているという思いが、主催者の企画の端々に感じられ、講師も自分の半生に自戒をこめ、ラマーズ法こそお産のあるべき姿ではないかと情熱を傾けているのが、私にもよく伝わってきました。

親子水いらずの初めの一時間が、親子の関係性、ことに男の育児にかかわる姿勢を左右するといっても過言ではないと強調する先生もいました。

食養料理にしろ、自然出産にしろ、科学技術の進歩の名の下に、奪われた人間性を回復し、更に、自らが身近な暮らしの営みの中から、ゆたかな人間性を創っていくとする、切実な思いのこもった試みなのではないでしょうか。

〈男の育児時間〉

職場では、未就学児童まで一日二時間の男女共にとれる育児時間を、81春闘から要求しています。82春闘でも同様の要求をし、アンケート調査もしました。組合員の26%が男も育児時間を使う・使うべきだと回答しています。しかし、当局の回答は、特別の措置は当面考えていないという消極的なもの。この状況では、当分制度保障させるのはむづかしそう。仕方がないので、後に続く人がやすいように配慮しながら、事実上、年休や欠勤で男も育児時間をとり、子どもたちと育ち合っていくつもりです。

どうしたらいいのか困ってしまう出来事であれば、苦しみ悩みますが、何とかしようと、解決策を考え、人にも相談することで、新しい視野や人間関係が広がってきました。子は親の、親は子の鏡ともいいます。どんな親子の成長が映し出されるのか、楽しみです。丹原さんには、三六〇〇グラムの女の赤ちゃんが生まれました。母子共にたいへん元氣とのこと。おめでとうございます。

新しい家庭科を創るために

*** 小学校では *** 名取 弘文

教科書、教師、ゴミ問題

「石けんと合成洗剤をくらべる」の授業の結びに教科書（東京書籍版）の執筆者に手紙を書くことになった（八・九月号参照）。

ほくと教科書問題

手紙は教科書の奥付に名前の出ている人あてで書き、東京書籍「新しい家庭」編集部気付で出した。返事がくるかどうか、子どもたちも気にしていたが、ほくも関心を持っていた。教科書に対する政府・自民党からの攻撃が強引に露骨にされていること、その意向をくんで検定を強化する文部省のひどさについては広く指摘されている。政治権力の都合で勝手に教科書を書き換えるなどというひどいことを許してはいけなさとほくも思う。「侵略」「弾圧・虐殺」「強制連行」という事実を「進出」「鎮めた」「日本に来た人もいる」などと変えてしまうことはとんでもないことである。文部省に対し、政府に対し抗議行動をさらに続けなくてははいけなさと思う。

同じように、ほくは、ほくたち教師が現場で教科書をどのように

使っているかも大きな問題であると思っている。教科書がこれほど歪められていることを知りながら、平気で教科書をそのまま使い、赤刷り本のままに指導をし、教科書準拠の資料や教材を使い、市販テストを使っていいのかと思う。「進出」とあるからと、そのまま「進出」と教えていいのかと思う。もちろん、教科書を使わなければいろいろトラブルが起きる。ひどい場合には、伝習館高校の三教師のように教科書不使用を理由の一つにクビになることもあるし、春日井市の館崎教諭のように担任を外されるといふこともある。教科書どおりにやってくれなければ「学力」がつかないという子どももいれば、親もいる。教科書どおりにやればそういうトラブルもないだろうし、問題が出たとしても「教科書がそうなっていた」と弁明すれば教師自身は問われないだろう。しかし、それではどうしようもないではないか。教科書ベッタリでやっていると、「教科書を守れ」と署名をしても免罪符はもらえないのである。ほくたち教師は、教科書を検討し、相対化し、問題があればそれを克服していかなければいけないと思う。「進出」という記述になっただけで、子どもたちに資料を見せて、討論して「侵略」に正していかなくてははいけなさと思う。『最後の授業』でドイツ軍がフランス語を禁止したことを扱うなら、日本が朝鮮語を禁止したことを教えるべきである。やろうと思えばそのくらいはできるはずである。こう考えて、ほくは、教科書の合成洗剤についての記述を問題にし

たのである。

また、教科書の執筆者も編集者も、それぞれの立場でできる最大の努力ははらうべきだと思う。検定の強化、広域採択などの営業的側面からのしめつけもあると思う。検定に逆らえば不合格になってしまう、元も子もなくなるといふ危険もあるだろうが、貫くべきことは貫くのが当然なのである。上原専祿氏、久野収氏らの不合格本刊行の闘い、家永三郎氏の教科書訴訟は、教科書検定制の問題を提出してくれたし、その抵抗はぼくたちを励ましてくれるのではないか。

ところが、どうも小学校の家庭科の教科書（東書版）にはやれるところまではやっているという感じがあまりしないのである。たとえば、「家庭の仕事とわたしたち」に出てくる家庭は相変わらず父母と子どもと祖母という構成で、家事分担の表から推測すると母は専業主婦のようである。つまり、単親家族、出稼ぎ単身赴任、父母共働きなどの家族を正当に扱おうとはしていないのである。いろいろな家族の形態があり、その中に両親と子どもというのもあるとは考えないのであるか。二社独占だし、家事・裁縫の方法はそんなに変わらないからと、手を抜いているのではあるまいかと思ってしまうのである。そういう疑問の一つに合成洗剤のこともあった。合成洗剤の有毒性・有害性がこれほど問題になっているのに、教科書では、合成洗剤の表示を載せ、合成洗剤と類推できる「洗剤液の作り方」、「(合成)洗剤の量とよこれのおちるわりあい」を載せている。そして「合成洗剤は、よこれがよくおちる、ねだんが安いなどの理由で、せっけんよりたくさん使われている。しかし、中にふくまれている成分が、からだに害をあたえたり、川の水をよごしたり

するのではないかと心配されているので、品質表示をよく読んで、使用量や使い方などに注意する」とある。この記述の方は検定とのやりとりでこうなったのかもしれないが、全体的に合成洗剤を使うことを是認しているようである。これもぼくには納得できないことである。いったい、この教科書の編集、執筆者はどう考えているのだろうか。そこを知りたい——これがぼくの関心であった。

夏休みの直前に、編集者からぼくに電話がかかってきた。「返事は監修者の林さんがまとめて書くというのでいいだろうか」という内容であった。ぼくは「個々の執筆者あてに子どもは手紙を書いたのだから、個々の執筆者から返事が欲しい」と答えた。編集者は「林さんと相談してみる」という。ぼくは重ねて個々人に手紙を出していることを説明し、ついで、監修者の一人の鹿内瑞子さんは亡くなったと聞いたが、その場合は故人であることを記さないのだろうかとたずねてみた。すると、監修作業はしたのだから故人扱いはいしてはいけないという。監修作業はしている、教科書が子どもに届く時点で亡くなっているのなら、故人であると記したほうがいいのではないだろうか。

九月になってすぐ返事が来た。回答者は「新しい家庭」編集委員会一同となっていた。返事をもらえたのはうれしかった。が、念を押したのに「一同」となっているのは少しがっかりした。個々人がどう執筆にかかわり、検定とどう立ち向かっているか、合成洗剤についてどのような姿勢を持っているのかを、ぼくはやはり知りたいたいと思うのである。

手紙はいいいな字でレポート用紙六枚もあり、三種類の洗浄力実験の結果の布を貼ったものも同封してあった。きちんと手紙を読

んでくれ、実験もしてくれたことはうれしい。二学期の最初の授業で手紙を紹介すると、子どもは大喜びで「ホントノ、やったね」と笑いだす。が、手紙を読んでいくと、子どもが「あれ？」という顔をしだした。手紙にはこう書いてあった。

——昭和五三年頃は、水温がかなり高い場合以外は、合成洗剤のほうがよく落るといふ説が一般的でした。住民運動に答えるかたちで昭和五四年頃から洗浄力比較実験が行われるようになりました。これらの実験では洗浄力は変わらない、あるいは条件さえよければ石けんのほうが洗浄力が高いという結果になりました。この次に出る教科書では「合成洗剤のほうがよく落ちる」という書き方はやめました。「石けんのほうがよく落ちる」という書き方もしませんでした。

洗浄力実験は、相当難しく、専門機関でないとなかなかできません。教科書を作るにあたって、編集委員会として独自に実験をせずに、他の機関のデータをできるだけたくさん集め、検討したりえて利用しているのは、そのためです。参考までに、みなさんのした実験方法をもとにして、著者と編集部で実験してみました。その結果はみなさんと全く同じにはなりませんでした。どちらかの実験がまちがいだったというわけではありません。どちらもその実験のかぎりにおいて正しいのです。みなさんがやった実験は、自分の手と目で確かめてみるという意味でたいへん貴重なものですが、その結果をただちに一般的な結論とするには無理があることも理解できると思います。

ねだんは、昭和五三〜五五年には石けんのほうが高めでした。が、ねだんの高低よりも消費者は合成洗剤しか買えない状態にお

かれていることにあると考えると次の教科書では「合成洗剤のほうがねだんが安い」という書き方をやめました。みなさんからお手紙をいただいたから、各メーカーに現在の定価を問い合わせてみました。結果は石けんのほうが安く、みなさんの調べたとおりでした。

私たちはみなさんの学習への取り組み方についてとても感心しました。自分たちの足で調べてまわり、実験して確かめ、そして疑問に思ったことを手紙に書いて追及していこうとする態度は素晴らしいと思います。

子どもたちは「どうして、教科書の人は、自分たちで実験しなかったんだ？」「教科書を書くまえに調べなかつたのはおかしい」「なんだか合成洗剤の味方をしているようだ」と言いあっている。

合成洗剤のほうが洗浄力が高いと一般に言われていたからそう書いたというのでは、やはり無責任だとほくは思う。その「一般」が洗剤会社の言い分であったり、業界の代弁をしがちな専門機関のものであり、批判的な意見を無視していたのではないかとこの疑問もある。合成洗剤の有毒・有害性についての指摘は昭和五三年にはかなり公認されていたし、琵琶湖の汚染もひどくなっていたのである。そのことを編集者・執筆者は知らなかったのだから。洗浄力について、石けんのほうが秀れているという実験の報告も、昭和五三年には出されていたはずである。合成洗剤で洗えば真っ白というテレビのCMがおかしいことに気付いたのは、自分の手で洗濯をしている親たちである。正確な実験でなくては、必ずしも一般化できないというまでもなく、生活者は自分たちの方法で本当のことと問

違ったことを見分けているのである。教科書の執筆者と編集者も生
活者であるだろうに、どうして合成洗剤使用に疑問を持たなかった
のであろうか。

教師にでも、教科書執筆者にでも、編集者にでもできることはあ
る。実際そうしてがん張っている人もたくさんいるのである。論評
するだけ、署名するだけの「教科書介入反対」から、具体的行動に
進みたいと思うのである。

「みえない、みようとしない教師」

ぼくが書いているのはちっとも「教材研究」らしくないという批
判があるようだ。ぼくは、森正孝という静岡市の教師が『侵略』と
いう日本軍の中国への侵略を描いた映画を作ったように、教育実践
は教室の中だけでやるものではない、教材研究は机に向かってやる
だけのものではないと思う。「We」十月号の「私たちにあって日本
で生きること」をどう受けとめるかが、ぼくにとっては大きな教材
研究である。中国人が自分の娘に中国人であることの誇りを持たせ
るためにつけた名前を珍しくへんに思っしつこく質問してくる子
どもたち、中国人だからといじめめる子どもたち。それはいじめる大
人の問題であり、いじめさせている教師の問題である。上福岡市で
起きた林賢一君の自殺にふれて、S美さんは、「差別に苦しみ、も
がいている子どもが目の前にいながら、それがみえない、みようと
しない教師」と告発している。差別があっても「みえない、みようと
しない教師」とは子どもにとっては差別を容認していると思える
のだろう。だから、林君への「いじめ」はエスカレートしたのであ
らう。「苦しみ、もがいている子ども」を「みえない、みようとし
ない教師」になりたくはない。そのためにはどうしたらいいのだら

うか。自分では見ようとしているつもりでも、見えていないのでは
ないか。そんな不安がぼくを襲ってくる。

ゴミ問題の調査と発表

五年生の教科書に「気持ちのよいすまい」がでてくる。教科書で
はすまいの整理・整とんが中心になっているが、ゴミのしまつのこ
ともでている。そこで、ゴミのしまつをぼくは中心にして、調査と
発表という展開にした。「自分の家から出るゴミはどうしているか」
をノートに書くところから始める。

ゴミの処理

- ① 台所のゴミ（ナマゴミ）―畑にうめてひ料にする
 - ② もえる物（かみくず）―時間がある時もやす。時間がない時
などは、かみぶくろに入れて出す。処理する車がきてゴミし
ようきやく場にもっていく
 - ③ もえる物（新聞紙）―ひもでゆわいて出す所へ出す
 - ④ ビン―流ながって店へかえず。店でびんの工場へもっていく
- 不要品（中古品）
きる物・よう地園あつちの時のふく・小さいくつ―いとこなどにあげ
る
(河合優子)

藤沢市ではゴミ問題の広報をこの数年、繰り返している。また
普通ゴミ（週二回収）、資源ゴミ（月一回程度）、粗大ゴミ（二ヶ
月に一回程度）と分けているので、だいたいの家庭でもそれに従っ
ているようである。そこで調べることは「町の中のゴミ」と題して、

① 自分の家のまわり

② 学校に来るまで

③ 駅のまわり

④ 海岸

⑤ 川や海

⑥ ゴミのゆくえ

⑦ 藤沢市のゴミたいさく

⑧ ゴミをへらす工夫

の八つにする。グループの組み方は自由にして、どのグループがどのテーマにするかは話し合いで決めさせた。人気があったのは③④⑤である。藤沢駅周辺に調査に行くのは、いかにも調査をするようでカッコイイという。川や海は遊び半分にできそうだからである。人気のなかったのは①②である。あまり調査らしくないからだろうか。一時間ほど話し合ったがうまくまとまらず「駅のまわり」は二グループ、「海岸」「川や海」をあわせて二グループが受け持つことになる。調査に行く計画は事前に出すこと、使う器具は大事に扱うこと、インタビュなどはていねいにすることを注意する。「駅のまわり」を調べるグループの計画はこんなふうであった。

1 ゴミの種類

2 インタビュ

3 どの場所がゴミの出る量が多いか

4 藤沢駅のゴミのしまつをしている人は年々ふえていくか？

(男と女どちらが多いか)

5 月に何回しまつをしているか
使うもの

カセット・マイク・カメラ

「ゴミのしまつをする人(男と女どちらが多いか)」というのは、駅員がほうきを持ってそうじをしている駅もあれば、東京駅のように女の人がそうじをしている所もあるからだそうだ。

「川や海・海岸」のグループは、川ぞいの道を歩いて海まで行き、写真を撮ってくるという計画である。

どのグループも大変なのは日程の調整である。月曜日は塾だ、火曜日はピアノというので、六、七人みんながあいている日がなかなかないのである。調節がつかずに二回に分かれて調査というグループもある。

調査したことを新聞紙の大ききほどの段ボール(近くの段ボール会社からもらっておいた。模造紙のように貼らないで、そのまま立てかけられるので便利である)に書き、発表のリハーサルをする。仮想質問をして、調査の不十分なところは再調査をする。「川や海・海岸」グループは普通のフィルムで撮影してきたのもう一度出かけて、スライドフィルムに撮り直して行くという。「熱心だね」とほめると「ほめなくてもいいから、フィルム代くれよ」といっている。段ボールを四枚も使って、「ふえてきたゴミ」をまとめているグループもある。そのなかで、一人で「海岸のゴミ」をまとめている子どもがいる。どうしたのかときくと、グループのみんなから追い出されたという。グループのみんなにきくと、一人でわがままをいって出ていったという。担任にきいてみると、いつもそういう傾向があるという。ぼくもやはりS美さんのいう「みえない、みようとしない教師」なかと気になって、両者の言い分を聞いてみると、よくわからない。両者の言い分の一致しているところは、「いいの、いいの、ナトちゃんには関係ないの」ということであった。

発表は、六年生を聞き手にしてやったクラスと、自分たちだけでやったクラスがある。六年生を相手にしたクラスは、発表にマイクを使ったこともあり緊張したようである。六年生からは「あれは誰々の妹だ」と声がかかったり、「もっとはっきり説明しろ」と注文が出たりする。そのかわり、質問のほうは「川や海のゴミの発表はあったけど、水のごれは調べなかったんですか。合成洗剤のことは勉強しなかったんですか」「汚れた水は下水処理場できれいにするって言ったけど、雨の日は量が多くなるから処理できないんじゃないですか」「江の島は海水浴場なのにどうしてきたないのか」と核心にせまるものがあった、発表した五年生のほうもいろいろ勉強になったようである。

自分たちだけで発表しあったクラスのほうは気楽にやれたようである。が、質問はややもするといじわるクイズのようになってしまいがちであった。

ゴミ問題のまとめ 友達を発表を聞いて

- 1 自分の家のまわりのゴミ——ハップボースチロール、たばこのすいがらが多い。公園のまわりには、ビニール袋、たばこのすいがら、空かんなどが多い。
- 2 学校に来るまで——空かんが目立つ。たばこのすいがら、マッチのもえかすが多い。
- 3 駅のまわり——空かん、たばこのすいがら、ビニール袋が多い。朝では、食べ物のかすがいっぱいある。ホームだけではなく、線路の下にもゴミがある。駅でインタビューをした。

4 海岸・川・海——空かん、空びん、ビニール袋が落ちている。かれ草、ヘドロがたくさんある。海開きの前に市民がそうじをする。スライドを使った。(略)
発表を聞いて

- とても、じょうずな人とじょうずじゃない人がいた。
- みにくいのとみにいいのがあった。
- インタビューやスライドをやった所の発表は楽しく聞け、見た。

自分達で調べて感想

- 市役所に行つて、聞いた。その時すぐきんちょうした。
- いっしょうけんめい書いたけれど、みにくかった。
- 発表がうまいかなかった。
- 私はゴミを減らす努力をしようと思う。

駅のまわりでインタビューをしていて、ちょうどタバコを捨てた人がいたので、「どうして投げ捨てるんですか」とマイクを出したら怖い顔をされたという子ども、川にそつてスライドを撮つて海岸でガツポーズで記念撮影をしたグループ、プラスチックを燃やしてみたら、ものすごい煙でススだらけになったという子ども。それぞれに、楽しみながら、調査をして発表をして、いろいろ考えたようである。教師が教科書を使って一方的に知識を注入しようとする授業より、自分たちでプログラムして、調べるほうがよいのである。ぼくのほうはまとめとして「いらぬものは買わない。自然を汚せば自分のところにもどつてくる」といって、「ゴミ問題」のまとめとした。

(藤沢市立村岡小学校)

新しい家庭科を創るために * * 中学校では * *

熊本県家庭科サークル

佐川加寿子

男女共学の被服整理 Ⅱ

一、はじめに

前号で、洗濯の必要性、繊維の種類と性質、布の組成表示と取り扱い表示、洗たく用洗剤、汚れの落ちる原理、洗剤の成分について報告した。今回は、特に合成洗剤の害を、体への毒性、環境汚染などについてプリントや写真で説明し、スライド、映画を視聴させたあとの子どもを中心に報告したい。

今回の実践は、内容的には前号で書いた十年前の地域学習会の内容と重なりあっている。十年前使ったプリントは、今回の授業の折も一部手を加えて用いた。合成洗剤追放運動が県の消費者レベルで行われている現在と違い、あのころは合成洗剤の問題性を説く人も少なく、誹謗中傷されたり、石けんの入手先が限定され苦勞したことが、授業する毎に脳裏に浮かぶ。そして、少しずつではあるが、確実に世の中が変わっていることを実感する。と同時に、その世の中の変化は、私たちが地域の父母たちと学習会をやったこと、私自

身の生活から合成洗剤を追放し、石けん製品を使い続けたことと無関係ではないと考えている。結局世の中が変わるのは、一人一人の日常の生活行動によると思う。自分の生活を変革することによって、よりよい社会がつくられると思う。こんなことに気づき、よりよい日常を実践してゆける子どもに育てたいと願う。

二、授業の流れ——前回にひきつづいて

(a) 合成洗剤の害について

人体への影響と環境汚染について、プリント(次頁資料)を用いて説明する。このプリントは、岡山合成洗剤を追放する会の岡山隆夫(和子夫妻より購入した写真集や資料集から、サークルで作製したものがベースとなっている。プリント中の絵は、その当時サークルに加わっていた母親によって描かれたものである。

さらに、皮膚障害について、十年前の学習会などで出会った地域の母ちゃんたちの手の様子を話し、写真も見せる。写真を見て、目をそむける子どももいた。

次に、実験で合成洗剤の浸透力の強さをわからせる。二つのビーカーに同量の赤インクの入った水を入れ、一方には合成洗剤を、他方には石けん液を入れる。その中に皮をむいたきゅうりを放りこみ、二、三日放置した状態で子どもたちに見せるのである。ビーカーからきゅうりを取り出して、子どもたちの目の前で切ってみせ

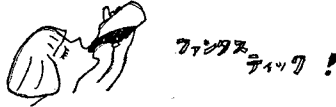
る。合成洗剤の方が、表面がとけたようになり、中まで赤インクがしみこんでいる。子どもたちは、うえーとかヒャーと言いながら、合成洗剤の浸透力の強さに驚きの表情を示す。

「私はいのちが惜しかし、健康でいたかけん、シャンプー、はみがき、粉石けん、クレンザー、みんな安全な石けん製品は使いよりも。もちろん、台所用の合成洗剤もいっちょん使いよらんよ。なら、こっで今日の授業はおわり、さようなら」で授業をおえら。子どもたちの反応は上々である。「先生、石けん製品の名前はお



いて、肝臓障害をおこします。

- (6) 蛍光増白剤もABSと同じような溶けかたがあるといわれています。蛍光増白剤は白く洗淨するだけでなく、白くみせる染料です。地下200メートルから検出されます。



- (7) 魚の味覚がまひしてきます。えさ玉選別能力がまひして、PCB、水銀などの重金属を食べるようになります。ニホン魚を食べると、人間の体内にもPCBや水銀などが蓄積します。
- (8) コレステロールやPCB、カドミウム、キノホルムの吸収を助長します。ABS洗剤は動脈硬化の原因になるコレステロールの体内吸収を助長します。(東京医科大学大柳沢教授)
ABS洗剤は水道水の中にも含まれてます。食器や洗剤を通じ体内にはいる皮膚からも吸収します。



- (9) ネズミの胎児へも影響、低奇性(三重大、三上教授)
- ① 内臓、腹腔、皮下などの全身出血
 - ② 背柱とおおっている骨の欠損(背柱破損)
 - ③ 口蓋裂
 - ④ 脱脳症
 - ⑤ 浮腫



【5のⅣ】 漁業資源の破壊 くさい水

リン酸塩は水中植物(藻マプランクトン)の栄養となり、異常繁殖させ、水中の酸素を又えさせたり、有毒ガスを発生させたりして、水玉腐らせ、魚を死滅させます。瀬戸内海、東京湾、びわ湖などのくさい水や赤潮の原因です。

【5のⅤ】 蛍光剤も食品に移行 溶けん性

台所用洗剤には蛍光剤は入っていませんが、衣料用には入っています。ひびきを衣料用で洗うと、移行します。地下200m.からでも蛍光剤が検出されます。



しえてはいよ」「どこに売ってあつと？」と廊下まで追いかけてくる。次に、実物を売ってある場所を話すことを約束する。

(9) スライド映画を見る

「合成洗剤を追放する」(東映映画社)、「合成洗剤は安全か」(日本婦人会議総合教宣センター)

生徒たちは、洗剤が石油コンビナートで石油精製の副産物としてできているということに驚く、そして、自分の家庭で毎日たくさん、無造作に使っている商品について改めて見直す。石けん洗剤の

A、私は、毎日シャンプーをぶくぶく泡立てながら髪を洗い、毎日二回すつ歯をみがいています。しかしこの学習が進むにつれてなんだかゾットすることが多くなったのです。姉に話したら、「髪は洗わんわけにはいかんでしょうが」と言いました。無関心なのです。先生、大人にもこんな学習教えて下さい。もし奇形児でも産んだらどうしよう。なぜ、危険とわかっていているものが店にあるのですか。

B、ぼくは家庭科の学習をしてみたい。なにしろびっくりした。

自分が着ている布にもいろいろの種類や性質があって、それに応じた手入れをしなければならぬということだ。今まで母と買物に行っても、ぼくは色とか絵とかかっこいいのを選ぶと、母が横でうるさく、「汗ば吸わんたい」とか、「綿がどうのこうの」というので「うるさかね、だけん母ちゃんを買物はきらいだな」と思っていたが、今になってみるとなぜそうだったのかよくわかる。

これから母の意見もよくきき、品質表示などもみて買いたい。

C、合成洗剤がいかにかわいかよくわかった。母は先生です。母はなにもしらない。なぜなら、家にはすべて学習の中で調べた合成洗剤が並んであるから。私は、母が帰ってくるのが待ちどおしくてたまらなかつた。「お母さん、合成洗剤って使ったらいかんよ。今日映画も見たし、この資料をみてごらん」。母は目を丸くして驚くと思つた。「そうよ、Cちゃん、とってもこわかつよ。いろいろ体に障害のおきるとよ」。あーなんということ、母はちゃんと知っていたのです——私にできること、毎日これから本当のこわさを話し続けます。

D、「母さん、日曜日に有機農産センターに行こう」とぼくがいました。母は、「日曜日はダメ、忙しいから」といいました。

なぜこんなに危険な物を国が許可してあるのか腹が立つが、腹を立ててばかりいてもしょうがない。こんな物を少しでもへらすようにせねばならない。中学生のぼくにできることは何か考えてみた。やはり、母をつれていくしかない。いやがる母をつれていった。いろいろいつていたけれど、母は歯みがきもシャンプーも台所用品も洗たく用も、たくさんかかえて帰ってきました。

（出まとも）

最後の時間に、私が目標としたねらいを達成したと思う作文と、指導を要する作文を読んで、最後のまとめをする。この折、十年前の地区学習会にふれ、あのころきわめて少数意見であった合成洗剤追放運動が、十年間という時の流れの中で、市民運動の一つとして定着していったこと、定着したのは、誰かオエライさんが気づいたからではなく、私も含めた一人一人の人々が学習し、自分の生活を変えたからであることなどを話す。社会も悪いし、政府も悪いが、その社会を構成している人間の一人として、政府を変えきれない人間の一人としての自分の存在に気づくよう、自分の体験を語った。

三、おわりに

この実践を始めてから、一九八二年度で七年目になる。もちろん毎年、前年の実践の反省に基づいて、多少変化する部分はあるが、子どもたちに作文を書かせてから私がまとめるという授業の流れ方は、五年目のこの実践の折に気づいて修正したものである。私は元来、そっかしくせつかちなので、食品添加物にしる、合成洗剤にしる、私たちの命やくらしを阻害する問題事象が教材のとき、どう考えたらよいか、どうしたらよいかまで教えこんでいた事に気づ

いたのである。だから、子どもたちは私の喜びそうな答がわかり、それを作文に書いていたと思ったのである。私はその感想文を読んで満足し、喜んでいた。子どもたちの生活は変わらないことを、知識どまりの学習におわっていることを、私は見抜けなかったと言える。評論家や物知りさんを育てていたのである。

この実践以降、私は子どもたちには事実を提供して、考えさせるように努めている。そして、その問題を解決するために、今、自分ができることは何かを問うようになっているつもりである。

合成洗剤の教材化によって、ただ合成洗剤を石けんに切りかえる子どもや親を増やすだけではないと考える。合成洗剤を学ぶことによつて、私たちのくらし全般を見直し、よりよいくらしを営む上で、何が問題なのかに気づき、その問題状況を解決するために自分は今なにをするか、と身近な生活を変えていくことが大切であることを学んでほしいと思うのである。個人の日常生活行動の変容が積み重なると、社会の変革が可能であるから石けんを使うのだ、とそこまでわからせたい。私たちのまわりにはなんと評論家や学者様が多いことか。だから、ちっとも世の中が変わらないのだろう。

私は毎日の生活をじっくり目で見、頭と心で考え、そして人が人として大切にされ幸せに生きていける社会にするために、自分は今、何を、どうすればよいかを考え、行動する人間でありたいと思う。そして、子どもたちもそういう人間になってほしいと思う。

先日、町内のどこかのおばちゃんに「今、家庭科で何ば習いよるとね」と尋ねられた。なぜかなと思っていたら、その人は「娘がせからしく言うけん」と粉石けんを買って帰られたと、後日お店やさんから聞いた。

子どもたちに本物の学力を定着させるためには、心を同じくする仲間が必要なことを痛感する。例えば、私は前述のように書くことを重視しているので、領域の途中や終了時に感想文を書かせる。この時、国語の作文指導に力を入れている教師や、班ノートなどで書くことに力を入れている教師がいるのといないのでは、大違いである。また、クラスの集団作りの状況によつても、授業は変わってくる。子どもを変えるのは一人ではできない。心を同じくする仲間と、それぞれの実践の中で連帯しながら、教育活動が営まれなければと痛感する。私自身が、教師や父母らとどう集団を形成していくか、結局、どう毎日を生きるかにかかっていると思う。

(甲佐町立甲佐中学校)

原稿募集 (薄謝をお送りします)

① 研究論文・実践報告 (図表を含めて五千字まで)

② 発言

▼ 学習の主人公たち——小・中・高生徒の率直な声を
▼ 明日の家庭科教師たち (二千八百字まで)——家庭
科教師を志す大学生の希望、疑問、提言など

▼ 市民として (二千八百字まで)

▼ 親も言いたい (千三百字または二千八百字まで)

▼ 教師のつぶやき (千三百字まで)

③ We に、なんでも言おう

・ 体裁などについての建設的な意見

④ わたくしからあなたに

③ ④ は、はがきでお気軽に

(本誌の内容)

新しい家庭科を創るために * * * 高等学校では * * * * * 寺島 紘子

自らの文化をうみ出す

家庭クラブ

家庭クラブへの疑問

私の中には家庭クラブが非常に不可解なものとしてずっと存在している。私が現行の家庭クラブでない家庭クラブを結果的にやるようになったのは、「家庭クラブって何？」という生徒からの問いかけに明快に答えることができなかったことからであった。

私が前任校で、まだ既成の家庭クラブをやっていたころ、家庭クラブ生徒会長が全クラブ員（家庭一般履修者全員）に対して、「家庭クラブについてどう思うか」というアンケートをとった。肯定的な意見として、「講習会（料理や手工芸）や施設訪問に参加できてよかった」「他クラスや他学年とのつながりがあった」「委員として勉強になった」などだったが、否定的な意見が多かった。「強制加入なのになぜ会費をとるか」「活動が強制的である」「なぜ自由参加にしないか」「目的がわからない」「遠い存在だ。とても自覚が持てな

い」「一部の人たちだけの活動である」「F H J（未来の家庭建設者の集いの意味）なのに女子だけなのはなぜか」など、当然ともいえる不満がつきつけられ、このことが家庭クラブ改革への契機となった。

必修クラブや部活動の顧問も兼ねている家庭科教師の負担は相当なものだ。生徒会なみの組織で全校を動かさねばならないので、必然的に生徒会活動や校内の教師集団との軋轢が生じる。教師の怠慢が家庭クラブ活動を停滞させているのでは決してない。

現場での活動が形骸化しているにもかかわらず、制度化することによって強い規制が加えられている。五十七年度改訂の指導要領では、本来一つの教育方法であるはずのものが、指導内容の一つとして位置づけられた。教科クラブとして家庭科を学ぶ高校生がすべてクラブ員であることが求められている。全国連盟加入の会員数は三八万人余を擁するが、圧倒的に公立学校の生徒であるということは行政指導がかなり徹底していることのあらわれであろう。

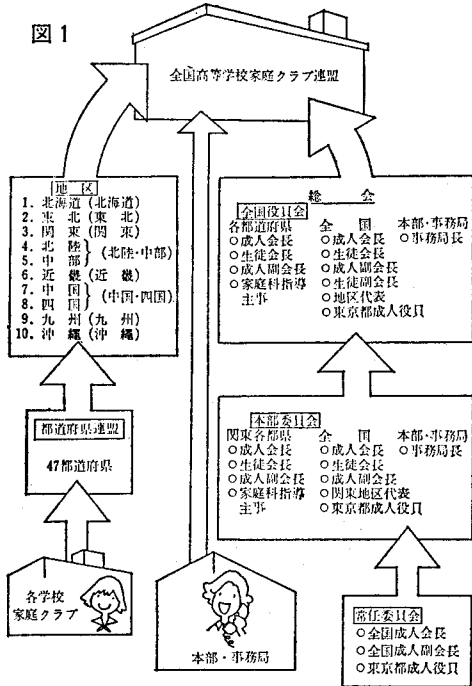
ホームプロジェクトと家庭クラブは戦後の新しい家庭科の指導法として、C I Eにより導入、普及。その後連盟が結成された。

家庭クラブの基本方針として創造、勤労、愛情、奉仕を掲げ、活動内容として研究的な活動、奉仕的な活動、社交的な活動を行う。しかし、現行家庭科の上でなされたものは、現状肯定認識の上に立った生活の改善や、善意による奉仕活動であって、現実の生活の矛

盾や生活課題に目を向けるといったような、社会的視野の広がりを持つたものではない。

連盟は図1のような組織となっているが、連盟は任意団体であり、家庭クラブ活動と連盟への加入は切り離して考えられるべきである。全国研究発表大会の開催にあたった県は、その準備のために、一千数百万円の予算を計上し、県下の家庭一般履修生徒が県連盟に強制加入させられ、負担金がクラブ員や家庭科教師から一律に徴収されると聞く。

その後、私は活動を研究活動のみに絞り、今年こそは、連盟加入



文化的活動としての家庭クラブ

をとりやめようと思っていた矢先の四月当初、二年生になったある生徒が、一年生の時授業で行った課題研究のテーマをもって私のところへやってきた。テーマは障害者問題であった。以来、私が現任校に転動するまでの三年間は、生徒が自主的に私のところへ持ち込んできたテーマを中心に活動することになった。

私は、この活動は生徒が自分たちの問題意識から出発し、自らが主体的におし進める総合学習だと思っている。必修クラブや部活動に属していないので、金銭的な裏づけがないかわりに、全く出入り自由で、拘束性は弱いが、かえって強い仲間意識や責任感が生まれる。そんな、いわばサークルを公的組織を利用して作ったともいえる。しかも決して閉鎖的な集団ではなく、活動をしているうちに、生徒会活動の母体となり全校集団の中に広がっていったり、学校外の地域の人たちとの交流を通して、現実の社会の反応を知り、それらが結果として、彼らの自立を促していったりした。そんなクラブである。

次は、三年間のテーマと人数、主な活動である。

一年目(78)「障害者問題」女三人(二年生) 調査、聞きがき、文化祭展示

二年目(79)「老人から学ぶ私たちの生き方」女二人、男八人、(二年生、他に映画出演者数名)

調査、聞きがき、映画制作上映

三年目(80)「筋ジムの高校生たちとの交流」女十一人、男九人、(一、二、三年生)

演劇の創作、上演、文化祭での交流

老人から学ぶ私たちの生き方

二年目、部長となった松田は、一年生時、私の担任したクラスの生徒である。クラス解散のあと、私のところへ来て、クラブを組織し直してきちんとした形でやっていきたい旨を語った。

仲間作りは、旧クラスの彼女の親友、土田と二人ですすめられた。女子だけで問題を考えていては一方的になると、名簿を頼りに男性を物色し、勧誘にあたった。五名の男子を混じえてスタートだったが、後に男子は八名となる。

男子は「家庭クラブ」という名称に抵抗を持ち続けていたが、次第にこだわらなくなった。それは、女子たちが日ごろ女性解放を口にしてきたことと、仕事を男女でやる中で、男女の固定観念を次第に変えてきたことによる。家庭Ⅱ女の偏見を打ち破る意味にも「家庭クラブ」は残さねばならないと考えるようになった。

松田が部長、五十嵐（男）が副部長、土田が書記になった。この三役が原案提出者である。活動日は毎週木曜日が定例であったが、ほとんど毎日残っていた。

クラブの目標と活動内容が話し合われた。そんな中で彼らは自身自身の生きる目標を見つけ出したいという願望が最も強かった。テーマは老人問題と決まったが、むしろ人生の先輩である老人を見ることを通して、自分の生き方を考えたいということで、「老人から学ぶ私たちの生き方」となった。

活動は、可能な限り当事者との接触を持った方がよいと考えて、フィールドワークという形態をとる。老人ホーム、市役所、老人性痴呆の老人をかかえた家庭の訪問、ボランティアをやっている人や

民生委員から話を聞いたり、社会科教師を招いての勉強会など、精力的に動いた。事前に訪問の目的や質問事項を打ち合わせ、事後総括するのである。

一方、その間老人たちからのライフヒストリーの聞き取りが行われた。明治、大正、昭和と激動の時代を生き抜いて来た老人の一生は、重みをもって彼らに迫ってきた。過去を歩いてきた老人たちは、その時代、時代の状況に翻弄され、流された生き方しかできなかった。彼らは老人たちの生き方に、強い反発を覚えた。しかし、それは、また一方では自分たちの人生に対する甘い考え方を打ち碎いた。老人たちの一生を生き抜いてきた逞しさは、自分たちにはない。老人を否定する資格はないのではないかと。

また、彼らは社会の現実と矛盾を知り、福祉行政の貧困を膚で感じた。

彼らが、老人たちの生き方を見の中で、最も強く考えさせられたのは、「生きがいとは何か」ということであった。「老後は趣味に生きがい」というのが一般論のようだが、趣味だけでは生きがいはなり得ない。とくに老人ホームという老人だけの閉鎖的な社会で受身の生き方を強いられる老人たちの姿に心が痛んだ。総括の中で彼らは語っている。「生きがいとは趣味を楽しむことではない。何かしてもらうことでもない。自らが他者に働きかける中で、自分の状況を切り開いていくことであり、それは社会につながったものである」と。

彼らは文化祭での発表の方法については、全く不安であった。老人問題として調べたことをべたべた壁に貼りつけて展示しても誰も見てくれないだろう。それに自分たちは、何よりも、このテーマを

通して自分たちの生き方を考えてきたのではないかと。

映画製作に決定したのは、七月の期末テスト後であった。それから二ヵ月半というものが彼らにとってはおそらく初めての、彼らにいわせれば「筆舌に尽くし難い苦勞」を体験するのである。

まず、シナリオを作らねばならない。テーマは何にするか、ドラマにするか、ルポルタージュ形式にするか。一人一人が模造紙に、自分にとって三ヵ月見てきたことが何であったかということ、構造的に図式化し、みんなの前で発表する。今まで問題点を抽象的にしかとらえることのできなかつた彼らも、初めて自分の問題として各自にもどしていった。

女子主導のクラブも「映画をつくる」という魅力そのものに男子はとりつかれ、イキイキとした。

議論の末、高柳(男)のものが採用され、それをもとに松田がシナリオを書いてくる。その原案を読みあい、みんなで修正をしていく。内容は高校生を主人公にしたドラマで、中に老人の回想シーンがあり、老人ホームや街頭で聞いてきた生きがいの問題をルポ風におり込むという大変欲ばつた内容となった。結局テーマは「生きがいとは何か、女の幸せは結婚か、いかに生きべきか」である。

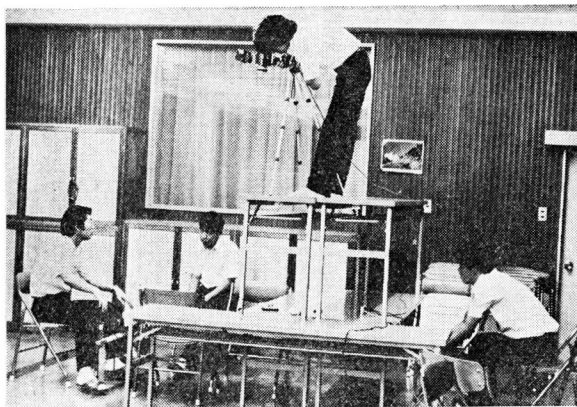
シナリオ作り、撮影、美術、編集、アフレコどれをとっても気の遠くなるような大変な共同作業だった。彼らの中に別のドラマを生み出した。

失敗と自己主張のぶつけあいからくるケンカの連続。あからさまに短所や弱点を指摘しあう中で自分を知った。彼らは人と真底、腹を割って話し合う体験をあまり持たなかつた。自分の意見を他人に押しつけるのではなく、わかつてもらい、相手の意見も尊重しなけ

ればならない。さらに協調して作業をやっていくむずかしさを知つた。

夏休みの連日の登校、帰宅時間の遅さ、部活動や勉強との両立の苦しみ、親との対立をうみ出し、彼らはその壁をのり越えることに疲れた。映画完成を待たずに、クラブは何度か空中分解しそうになつた。部長の松田は部員間の調整をはかつた。私のいう「自分から逃げるな」「仲間から逃げるな」「自分なりに何かをつかみとろう」といった意味を彼らは感じとつてくれた。「最後までやり抜く」という自ら掲げたスローガンの大きさに、活動がついてこないというこゝでいら立ち、彼らは苦しんだ。

しかし心理的葛藤ばかりではなかつた。老人の回想シーンをとつ



タイトルの撮影

た浅丘村のロケの時など、実にうまく仕事はこんだ日もある。舞台となつた浅丘村は松田の住む村である。女子たちは前日から松田の家に泊まり込み夜遅くまで綿密に仕事の段取りを決め、当日はスケジュール通

りに動いた。衣装や古い道具、昔のアルバムなどが、クラブ員の手で集められた。キャプキの家、昔のイロリがある家を借りる交渉や車での移動など、親たちの協力もあった。彼らは仕事のやり方を体得していった。

編集アフレコに手こずり、十月の文化祭の一日前によく完成した。完成後の感動は大きかった。文化祭での上映を通して、彼らは文化祭のあり方を学ぶ。お祭りさわぎの文化祭に一石を投じる役目も果たした。

県連家庭クラブ発表大会では、今までの活動をまとめて報告した。四百名中たった八名の男子の参加も男子自身勇氣のいることであった。報告の内容は、評価の基準にあてはまらないものであった。男子の初参加の感想は「家庭の中だけの技術をもって云々していたが、正直いって僕たちの入る余地はなかった」「家庭をよくしようと思ったら、社会の方からよくしていかなければならない。中ばかり目を向けないで、外からもよくしていく視点が必要ではないか」「家庭クラブの歌」は女子の高い声にあわせて、到底僕たちに歌えるものではない」である。

高柳はツッパリと形式だけの生徒会執行部に絶望し、次年度の生徒会長に立候補する。しかし、施政方針すら出すことのできなかった対抗馬に破れ、クラブ員は憤慨した。「まじめな人間が小さくなっていく学校でいいのか」と。このことがきっかけとなり、その後、何期かのクラブ員が学校の自治的活動の中心へ入っていく。

筋ジスの高校生たちとの交流

80年度の活動は、小林という生徒が街で車イスの青年から受けと

った一枚のビラが発端となった。一、二年生を中心として動き出す。小林は一年の時から家庭クラブに参加していたが、先輩たちの激しいぶつかりあいについていけなくなり退部した。二年生になり、先輩たちの前向きな行動、燃える姿を思い出して再び参加し出す。

学校から歩いて五〇分ほどのところに筋ジストロフィーの病院のあるI病院があった。小林はそこを初めて訪れた時の印象を次のように述べている。「今まで考えてみたこともない情景に私の頭の中はメチャメチャにかき回されてしまった……。夜ふとんの中で目をつぶり、私はああでなくて良かったと思ったのは事実だ。だがそうして彼らを同情と哀れみの対象としてしか見ていない自分に気づいた時はたまらなくいやだった。」

やがて何回か筋ジス病棟へ通ううちに、高等部の人たちから劇づくりの協力を依頼され、本格的な交流が始まる。毎週土曜日の放課後、彼らは病棟に通った。十二月の公演が近づく毎日通った。

九月に入って私は久しぶりに病院へ出かけた。学校では見られないクラブ員のイキイキした姿があった。学校ではなにか閉ざされているのに、ここでは別人と思われる程明るい。

彼らは口々に「今がとても楽しい。充実しています。かわいそうな人たちのためにボランティアがしたいんです。障害者問題の本質なんて考えられません」と言った。それに対して三年生や、卒業生は「感傷的にならずに、現実をふまえることが大切だ。このままでは、きっと大きな壁にぶつかるだろう」と彼らに言ったのだが、「なぜ私が悩まなくてはいけないの。なぜ私が変わらなくてはいけないの」と繰り返した。「心がきれいでありたい。だから差別した

くないんです」。

私は交流だけで終わろうとしている彼らにたまらないはがゆさを覚えた。自分で状況を作り変えることができる人間になって欲しい。自ら闘わない人間が何で重い問題をつづけるだろうか。彼らは学校では自分を出して傷つくの恐れ、他人に同調し、人がスカート文をばせば自分ものばしたがる。

ボランティアの奉仕的關係（してあげる人、してもらう人）は、両者の人間關係が対等にならない。彼らはこの枠をはずす意味がつかめなかった。

親しくなりかけたI病院の人が突然亡くなった。彼らはその後何人かの死に出会った。こちらの高校生はみんな泣いたが、むこうの人たちの表情はいつもと全く変わらなかった。その姿に彼らは大きく動揺させられた。徐々に機能が働かなくなるからだと言ひ、心に友の死の悲しみをたたみ込んで、一生懸命「生」にとりくんでいる姿に打たれた。

劇作りという共通の体験を持つ中で、彼らの關係は変わってきた。からだでつかみとることが出来たのだ。相手が障害者だということとさら意識する必要もなくなった。彼らは「同じ青春を生きている一人として一緒に走っていこう」と交換日記に書いた。小林は「初めは相手が障害者ということに傷つけないという気持ち、うまくやらなくてはとか、障害者だと見てはいけないと思っていた。自分自身を美化し、自己犠牲を自らに強いていたようだが、今はそんな気持ちがふしぎと消えた。前は行ってあげるといふ気持ちだったが、今は自分のために行く。学校でも自分を出さねばと思う。流された生き方はしたくない。最近、自分が認められるように

なった」という。その後「スカートをのばす必要はなくなった」彼らは自分を出して傷つくの恐れなくなった。

I病院の人たちはどうか。「壁をなくすことが出来た。ケンカしてもつきあえるようなそんな付き合い方をこれからもしたい」。自分をなかなか表に出さないI病院の人たちだったが、その後二年間通算三回目の公演で、すばらしく成長した姿に出会うことができ。閉鎖的な施設の中だけにいるのではなく、同年代の外部の人間と接触することが、彼らの何かを脱皮させる。

演劇の内容も濃くなった。生と死の問題、学歴社会への批判、今をどう生きるか、といった自分たちの問題がテーマだ。

彼らは映画制作や演劇公演を通していろんな人と出会い、自分たちの生き方をゆきぶってきた。このことは自己表現の技術と方法を具体的に学ぶことにつながる。自分自身の不満を意識化し、それをテコに、学校や社会の既存の文化の価値を問い直し、独自の文化を形成していく力にもなる。

私自身は、暗中模索、生徒とともにひとつひとつ確認しながらすすんできた。彼らと行動し、彼らと語り込むことによって、彼らと問題意識を共有できたことはうれしい。

現任校には家庭クラブはない。家庭科学習を發展させるものとして、生徒からの自発的要求があればやりたいと思う。しかし、連盟への加入は別だと考えている。（石川県立金沢桜丘高等学校）

〈参考資料〉

和田典子論文「家庭づくり政策と家庭教育」『国民教育44』労働旬報社

新しい家庭科を創るために *** 大学では **** 朴木佳緒留

教師教育として「家庭科教材研究」
を考える

一

家庭科教材研究は小学校教諭免許（一級）取得のための必修科目である。それにもかかわらず、実際には男性教師は家庭科の授業は受持たない。あるいはできないという信仰がゆきわたっているようである。先日、教育実習に行った女子学生が憤慨してやってきた。実習校の五年生担任の男性教師に、家庭科の授業を担当されているのかという旨の質問をしたところ「常識でものを言え」と一喝されたそうである。怠慢なことに石川県の状況の正確な把握はしていないが、私の聞くところでは、低学年担任の女教師による出張授業の例がほとんどである。これを反映して男子学生も家庭科教材研究は仕方なく受講し、自らが家庭科の授業をする人になるのだという意識や意欲はまことにうすい。家庭科は授業をする方も学ぶ方も女が主導する教科であるというのは常識となつていらい。

このような状況を拡大再生産しないようにするのは私たちに課さ

れた仕事の一つである。しかし、現実には以下述べるような困難な壁がある。それをどう切り崩すか、私はまだ明解な答を用意できないでいる。以下は金沢大学での三年間の失敗記である。毎年、教材研究の授業では苦い思いをかみしめるのだが、その思いを通して教師教育として何を核心に据えればよいのかを考えてみたい。

二

教材研究は学生にとっても苦痛を伴うようである。一種の期待をもって学部進学した途端一三〇〜一四〇名の大人数の授業と、免許取得のための必修教科が時間割をうめつくす。金沢大学では77年十月より、通称「カリキュラムの一本化」が実施されている。これは従来、初等教育課程専攻生と中等教育課程専攻生との開講科目が別個に開かれていたものをなくし、同じ授業を受講するようにしたものである。

簡単に言えば、初等用の教科専門科目が理科の一部を除いて全てなくなった。この「一本化」への直接の契機は学生の就職問題にあったと聞く。つまり、小・中学校の二つの免許を持っていた方が有利であること、また中・高校への就職が難しく、中等課程の学生はいやおうなく他地方へ就職するか、何年間かの臨時講師を余儀なくさせられ、その間に通信教育で小学校免許を取得したり、さらには小免取得のため留年する学生もあったという。

例えば家庭科教員の採用試験は76年から80年まで実施されず、その間ごく少数で退職者の後任には、小学校教員として採用決定された者のうちの中学・高校の家庭科免許状を持っている人を充てていたようである。このような事情を背景に、中等課程の学生も四年間の在学中で小学校の免許取得を可能にするカリキュラム改訂が行われた(初等課程の学生は従来も中等免許を取得できていた)。見方によれば就職対策のために大学が節を曲げたとも考えられるかもしれないが、私はそれほど簡単に評価できない。ともあれ「一本化」が実施された結果を述べたい。

まず学部進学する二年後期にはいきなり教材研究一〇単位が開講される(国語、算数、音楽、図画工作、家庭科の各二単位。半期開講。社会科、理科、体育は三年前期開講)。初等専攻生にはこの一〇単位は必修であるが、中等専攻生も小学校免許(二級)取得に必要な六教科分の単位を早くそろえるため、ほとんどの学生が二年後期の開講科目を受講している。また先にふれたように教科専門科目は初等用には用意されていないため、開講されている専門科目のどれでも自由に一教科につき二単位分だけ選択して受講すればよいが、それは教材研究と同時に平行でなされればよい方といえ、多くは教材研究の終わった後に学ぶことになる。家庭科の例では、食品学、被服学、住居学等々三十二科目のうちのどれかを選べばよく、多くは単位数の少ない実験・実習はとらず、講義を一つだけとるということになる。また二年後期までに学ぶ教育学部関係の授業は教育原理・心理の計四単位だけである。つまり教材研究の授業に臨む学生は、教科専門の学習をしておらず、少なからぬ学生が教育にかかわる専門書を読んだのは前記授業のテキストだけといった状況で

教室にあらわれる。そして教材研究の授業後は一教科につきなにか一つの科目二単位分の授業をもって、小学校教師になるための教科教育にかかわる学習は全て終了ということになる。したがって教材研究で何を学ぶかは重大である。この事情は当分変えられそうもない。かなりの議論を経て80年度からは教科教育の選択教科が開講され、家庭科教育では演習が三年後期に、特論が四年前期開講が認められた。しかし他教科と並列開講のため、家庭科教室所属の学生以外はとりにくい。そこで教材研究一〇分授業の一五回分をどう機能させるのか悩むことになる。

三

一方、学生たちはどう考えているだろう。教材研究は概してたいしておもしろくもないが、教師になるためには仕方ないというのが本音のようだ。ある学生は教育学部は教員養成所ですなえと言う。次から次へと異なる学問系列の授業をこま切りに並べられれば、そう思うのもなるほどと思う。また卒業時が近づくとこれで教師になるかと思うとそろそろしいと言う学生が増えてくる。

また彼らの家庭科観は多くの人により指摘されているとおりである。授業はじめに小・中・高校での経験をもとにして家庭科は何を学ぶ教科だと思ふか、また家庭科に対する感想を書くように求めると、家庭科は家のなかのあれこれを学ぶ教科、だから女のための教科である。しかし男でも少しは知っておかないと困るから小学校では男女共学でよいだろう。その裏返しで、女は料理やその他家事が上手でなければならぬ。しかし自分は下手でありこれから勉強したいと殊勝な感想も混じる。そして小・中・高校の家庭科は作り方

を決められた実習があり、何かを考える余地もなく、実体をつかめもしない繊維の名前を覚えさせられ；等々と不満は紙面にあふれ、用紙の裏まで利用して延々と続く。それを讀む私はその不満の類似に目をみはり、五〇枚をすぎるところにはうんざりしてくる。

ただ小学校の家庭科に対しては、はじめて縫えたとか、包丁が使えたとかの新しい経験に対する新鮮な感動を覚えたと述べ、比較的高い評価がされているのが目につく。またおもしろいのは、家庭科は男女ともに生活技能を習得するための教科であり、全ての教科、教育の基盤となる重要な教科であると説明し、なぜ大学で講義があるのか、教材研究では技能の向上をはかる内容（実習）をして欲しいという要望も出される。概して、家庭科を家事遂行に必要な知識・技能を習得する教科と位置づけるが、女子は嫌悪しつつも必要と考え、男子は結構楽しかったし、下宿生活をしている今、それなりに役に立っていると評価しつつも、でも自分にはあまり関係ないと考えている。そこには根強い性別役割分業観と家事遂行のための教科という固定観念が同居している。

毎年ごくわずかの学生が、老人問題などを学んだので家庭科はとても大切な教科であると思った。生活していくのにはいろんな問題があることを知り、自分なりに生活を見つめるようになった。でも何を学ぶ教科かと尋ねられるとますますわからなくなっている。だから大学ではそこを考えた、と期待を述べる。しかし彼らもまた一方では、「受験勉強に追われ、いい加減にしてみました」と告白する。問題は根深い。この彼らの作られた固定観念をどうゆさぶるか、が私に課された第一の課題となる。

ところで彼らは教材研究の授業に何を求めているのか。この質問

は二年目にだけしてみたが、「自分が授業をする時に役に立つこと」とのあたりまえの返事であった。私は、この「役に立つこと」を小手先のやり方ではなく、その本来の意味するところでうけとめたいが、学生にはその内実は「実際的」というイメージでとらえられており、教材研究の授業の全てを修了後もなお「実際に役立つことを教えて欲しかった」と述懐する者もある。逆に言えば、教材研究はそれだけのことしか期待されていないのかもしれない。わずかに一回の講義でこの「役に立つこと」のすべてを獲得させる自信は私にはない。毎年どうすべきか苦慮するところである。これが私の教材研究に課せられた第二の課題である。

さらに学生の一般的傾向として非定形ざらいとでもいうのか、割り切った結論を好む傾向があり、大いに気になる。例えば、現行家庭科の問題点を示し、それに対する私の考えを述べ、結論を断定しないうままでおくと、とにかく何かこうであると決めて欲しい。落ちつかない。という感想がでてくる。家庭科教育にかかわる理論は算数の計算のように明確に断定できないことが多い。これからの教育実践の積み重ねと理論的検討にゆだねられている問題が多いが、彼らは自分たちもそのなかに身を置き、家庭科をつくっていく一人になるのだという理解はしておらず、誰かが指針を示してくれることを期待する。もっと言えば、現場の教師は教科の目標を云々することは仕事ではなく、それは学者といわれる人たちの仕事であるという発想があり、だから大学の教官である私が家庭科ではかくかくしかじかの教育をすべきだと彼らに断言し、学生である彼らはそれをもとに教壇に立つ用意をしようと考えてるのである。

それは一年目の最終講義の日の感想に書かれたものを読んで気が

ついた。しまったと思った。二年目からは心してかかることになるが、この問題は容易な性格ではない。教育権が誰にあるのかという問題である。講義中に教育権論を語る余裕はなく、そこをどうするか、どのようにして彼らに自分が教育を作る主体になるという考えを持たせればよいのか考えねばならない。これを私の第三の課題としている。

四

以上の状況を背景に教材研究の講義が始まる。一年目はまるで教科書の目次のような授業をした。教科の歴史から教科論諸説、教授・学習過程へと連なる講義はそれなりのまとまりはあっても、学生の思想と生活には結びつきにくい。彼らは真面目にノートをとるが、それは単位とりのための受験勉強であったと思う。私の方は客観的に資料を提供するから自分で考えよと言ってきたし、大学生はそうするものだと思っていたが、彼らの多くはそうはしなかった。原因は学生ではなく私にあったと思う。教材研究の一回の講義で家庭科の授業ができるようにしたいとまでは思わなかったが、多くの学生にとっては、この教材研究の時間しか家庭科教育に関する学習はないという気が先行し、少なくとも概略ぐらい話さねばならぬという思いがつきまといいたためである。それは彼らが考え込むような余裕も与えず、学生の弁を借りれば「そんなもんかなー」と思うことでおわり、ましてや感動を覚えることなどなかったと思う。ただ、歴史の部分はかなり丁寧にしたが、戦前の家事、裁縫科とそれを実質的にうけつぐ類の家庭科が果たしたマイナス面は認識されたのではないかと思った。

二年目以降はさらに力を入れ、特に戦後教育を重視した。私が自らの教育実践の課題としている家庭科Ⅱ女子用・家事遂行のための教科という固定観念をゆさぶるには、歴史的考察は有効だと思う。女性解放とか婦人問題を前面に出すとその言葉を聞いたとたん拒否反応を示す学生がかなりの数いるためである。特に男子学生についてはそのように感じている。もっとも、地域性やら（なにしろ「男は女よりえらいと思うか」との質問にそう従うと答えた率の多い順に富山・福井・石川とならぶ）78年NHK全国県民意識調査―私は北陸三県ワーストスリーと言っているが、学生はそれを聞きやっぱりとうなずき爆笑する）、さらに重要なのは授業次第であり、誰が講義してもそうであると断ずる気はないが、私の力量では彼らの拒否権発動に対処することはできない（念のため申し添えるが、私は現行家庭科のあり方が女性解放を阻害する要因となっていると考えてはいるが、それを家庭科教育の直接の目的とするとは思っていない）。家事科、裁縫科の成立経緯と47年版指導要領がその性格を変質していく過程を、教育政策とそれへの抵抗という視点からみることにし、女子用教科の果たす役割は鮮明になる。いろいろ不満はあっても、やっぱり女だからと家事・裁縫的家庭科を容認していた学生もその問題性に初めて気がつく。

教室の前の方には熱心な学生が陣どるようになり、少数ではあるが研究室に本を借りに来たり、話をしに来るようにもなる。自主ゼミを開く要求も出て、水田珠枝著『女性解放思想史』をテキストに一名の男子学生も混じえて週一回のゼミも開けた。この年は特に58年前後の事情を山場においたが、先に述べたように学部進学後のしよっぱなであり、そこでどのような教育実践が展開され、どのよう

な議論が交わされていたのか聞いたこともないという学生が多い。したがって、一口に家庭科教育史といっても、九〇〇回の講義時問を要する。

期末試験には毎年「戦後家庭科教育の問題点について論述せよ」（戦後をどの時期とするかは自ら選び限定させる）という問を出しているが、熱心な答案に接する。参考図書としてあげる『戦後日本教育史』（太田堯、岩波書店）『教育のあしおと』（中野光ら、平凡社）『戦後日本教育論争史』（船山謙次、東洋館出版）などを読んだ形跡のあるものも少なくない。また全員とはいえないがかなりの学生が自らの考えとつきあわせつつ述べている。ある男子学生は次のように書いた。その一部を紹介したい。

「自分は結婚したら妻は家にいる方がよいと思っていた。世の中にはいろいろな女の人があるので女の人が一生仕事を持つことも否定はしなかった。でも自分はそういう人とは結婚しないのだから関係ないと思っていた。しかし（中略）先述のように公教育で考え方が決定されることがあることに気づいた。（中略）自分の（小中高の）学んできた過程をふりかえると、どこでも女は家庭、男は仕事という形態について考える機会がなかった。これはおかしいことだと思う。教材研究ではじめて自分の問題として考えた」。

戦後教育史は彼らの通ってきた過程と重なりあう部分が多いだけ、彼らの常識を対象化する役割をも果たす。しかし、同じく自分の問題として考えながらも初志貫徹型の者もある。「やっぱり家庭は女が中心にならなければならない。この状態が変わらない限り僕は家庭科を女子必修にすべきだと思う」と書いている。この学生は論拠を生物学的特性に置いていたため、後に『性差』（マッコヒイ、

家政教育社）を読むことになるが、すでに教材研究の単位を取った後にもかかわらず真剣に読み、次には『自立のための子育て』（須長茂夫、労働旬報社）に取り組んだ。大半の学生は真面目である。

性差への疑問から家事労働への疑問へと読みすすんだ学生は、もう一度生活的自立について考えてみたいと言って帰った。もっとも全ての学生がこのようなわけではなく、私の印象に特に残っていない大半は要領よくこなしたのではないかと思っている。

二年目はこの他に飯野こう著『家庭科でなにをどう教えるか』（家政教育社）をテキストに実践記録を読んだ。残り回数少なさを思い衣・食・住から各々一題ずつ選び、レポートし発表するという形式をふんだ。学生は自分の受けてきた授業と対比しつつ検討するが、こんな授業を受けたかった（したい）、子どもをこんなによくみなければならぬとは驚いた、と言う。レポートの段階では彼らは感動だおれといっただけ程感動してくる。私は教科書と比較しながら、飯野実践の問題提起はどこにあるかを中心に話し、家庭科の目標にまでたどる。また学生が感動したその実践は、誰かに教えてもらって出来上がったのではなく、教師（たち）が子どもや生活やを凝視した苦闘の末の成果であることも話す。先述の第三の課題を念頭においているためである。しかしなにぶん時間不足。学生ともども不満のまま終わった。最後の講義では半年間の感想を書くよう求めた。私への要求で目についたのは、教育実習に行っただけに立つ講義にせよというものであった。私の第二の課題は達成されなかったといえよう。戦後教育史を学び自らの主観とかかわらせて問題をとらえたと、一時喜びを得ていたが悄然となる。苦い思いで実践記録をどう読むか考えこんだ。三年目は、まず実践記録を読むことが

ら始めた。テキストは前年同様としたが、講義冒頭は名取弘文氏の「野草を食べる」(家庭教育、81年四月号)「家庭とは何か、家族とは何か」(同・六月号)をプリントし、何の説明もせず読ませ感想を書かせた。私の意図は単純で、男の先生でも家庭科の授業ができるということ、家庭科でこんなおもしろい授業もできること、家事処理にかかわる学習だけが家庭科ではないこと、の三点を伝えたい。飯野氏の本は前年好評であったが、男の先生だってということも強調したかった。

学生はやはりそこに驚き、また前年同様に感動だおれとなった。あまりにも自分たちのイメージと違うのである。この導入は我ながら成功したと思ったがそれだけ実践の持つ重みがあったせいである。例年、家庭科への感想や、問題などを下手の長舌で話すが、この年はいきなり実践検討から入れた。学生の要望が強かった家族から取りあげ、食品と栄養、せんたく、洗剤、被服製作、すまいを讀んだ。検討視点は教科書と比較し、問題提起をしている点を見出すことを中心に、子どもが学ぶみちすじを問題としたが、そのなかで教材と教育内容のちがいが、実習の教育的意義、家庭科の系統性の問題、子どもの技能の発達と家庭科の役割などをとりあげた。それこそ系統性はないのだが、前年の不足を思い、授業実施までに考えねばならないことをひとつひとつの実践例に即して述べた結果である。その後二回附属小学校の専科教師にVTRを用いた授業の解説をしてもらった。残りの四回を歴史の学習に充て、家庭科の目標を最後の一回でまとめた。

実践記録の読みは学生たちの授業へのイメージをはっきりさせる。また家庭科の抱える問題が抽象論としてではなく具体的にとら

えられ、これから何を考え、何を学ぶべきなのか示してくれる。しかし一方では基本的な教科専門の教養がうすい(女子学生も含めて)ため、その検討にはかなり骨が折れ、前提となる事項の多くを説明しなければならぬ。最大の利点は、私の第三の課題としている教育を作る主体として自らを位置づけられるということが、時間をかけて実践記録を読むなかで感じとられることだと思う。レポートの回を重ねるにつれそれは強くなっていく。

三年目の反省は実践記録を数多く読みすぎたことにある。私には表面をなで回した後味の悪さが残っている。一つの領域、教材に絞って深く学びあった方がよいのではないかと考えている。様々な事情で今年は私の持ち時間は一二回分に減るが、教材づくりを経験させたいと思っている。

以上反省の話であるが、学生たちは自らを教育の主体者としてとらえたであろうか。三年目にはさすがに私に断定的結論を示せという要求はなかったが、不安は残っている。それは実践記録を私が解説したところであり、彼らは一応レポートはしても、その検討に主体的に参加していないためである。家庭科教育にかかわる知識を累積するのではなく、自分の生き方や思想をつきあわせてそれらを検討していくことを望んでいる。教師は教材づくりを通して家庭科をつくっていく立場にあること、そのためには、教師自身の生活観、人生観までさかのぼって問われねばならないことを理解させたい。それは学生たちの責任ではなく教官の側の問題であると考えている。

(金沢大学)



視 点

〈一つの闘い〉——担任はずし訴訟〉

長谷川 孝

「担任はずし」ということはをさいきん、よく聞かされる。正直にいうと教員でないものにとっては、教諭からはずされて事務職にされるわけではないし、授業を持って子どもたちと付きあえるのだからいいじゃないか、という気がしないでもない。学級担任への教師の気持というのは、教員でなければわからないものかもしれないが、「学級担任でない教師なんて……」という感じもあって、ちょっと気にかかってしまうのである。

外国の教員が学級担任をどう思っているのかは知らないが、日本のはあいは学級王国主義の伝統と関係が深いのかもしれぬ。学級を担任することで初めて一人前の教師だ、という気にもなるのだろうか。学級という「領土」のあるじになったような感じも、ないとはいえないだろう。

「学級を担任する」ということの教師にとっての意味は、あらためて見直すべき側面をもっているように思う。専科や養護や非常勤講師など、担任をもたない教師の子どもたちのかかわりとは、どういうものなのだろうか。そこには、学級担任とはなにか異なった質のかかわりがあり、逆にあたりまえに担任を続けることで見えなくなるものがありそうな気がする。

学級担任にこだわることへの疑問をなんとなく述べてきたが、も

ちろん「担任はずし、いいじゃないか」というのではない。担任はずしと闘うときに、「担任になるのがふつう」という発想をはずして考えてみる柔軟さがあったいいと思うのだ。たとえば異論を述べ行ったりする教師への「処罰」として担任はずしがなされると、はずす側にもはずされる側にも、意識してであれ無意識であれ、「学級担任でない教師なんて……」（いわば半人前か窓際族）という気持（価値観）があるなら、それこそが「処罰」としての担任はずしを可能にしている、と私は思うのだ。そういう気持を脇においてみると、担任をはずされた位置で居直って闘う拠点が見えてくるのではないか、とも思える。

近ごろの担任はずしは、学校のなかでの「異端者」への報復、みんなに足並みをそろえない教師への村八分（もはや「村十分」だとさえいわれるようだ）、いい方を変えれば教師集団の仲間はずしとして、かなり陰険に行われている、と聞く。さいきん話を聞く機会があった、担任はずしをされた二人の教師のばあいも、この例にもれない。そして二人とも職員会議で、他の多数の教師たちによって袋だたきにされつるしあげられており、その雰囲気はファシズムそのものと感じられる。まさに学校のなかに、戦前の「一億一心」と

か「国民精神総動員」の体制が支配的となり、担任はずしは「非国民への制裁」という色調を強く帯びているとしかいえない。

愛知県春日井市の小学校教師、館崎正二さんになりたい担任はずしも、まさに教員集団の「異端者狩り」である。館崎さんは、算数の時間に水道方式のプリント教材を使い、すべての子がわかるまで指導をしてきた。そして、教科の到達度評価欄でも、ほとんどの子にプラス（十分到達）をつけた。

「この学校の教師なら、マイナスをつけるべきです」「いやなら、この学校をやめて塾でも開いたらどうですか」など、この実践に対するのしりというべきことばが、職員会議で館崎さんにあびせかけられたという。なにしろ「テストのときにまちがっていたら、あとでやりなおしてできて、できたという評価は通知表にはならない」というのだそうだから、子どもにとって学校とは、いったいなんのためになにをすることなのだろうか？ 本末転倒もはなはだしいが、それが圧倒的な多数意見なのだ。

ことしの四月以来、館崎さんは、図工と書写の専科担当を押しつけられ、学級担任から追われている。不当な担任はずしは許せない、と館崎さんは訴訟にふみきり（六月三十日に訴状提出）、愛知の教師や父母、市民たちは「担任はずし訴訟を支援する会」（事務局、春日井市篠木町五の二四五六、井上満気付）をつくり、バックアップの態勢を固めた。愛知の管理教育体制への、反撃の戦線がまたひとつ新たにつくられたのである。担任はずしの裁判は、初めてのケースだろう。

ところで、この担任はずしにはどう見ても、教師を子どもと父母

から根こそぎにしよう、という企みがある。教育の管理統制に都合な教師を、親たちから切り離すために、学級通信への弾圧なども行われるが、より徹底して親と子どもたちから引き離すために担任はずしをするのだといえよう。そこには、はずされた教師を親や子どもたちから切り離しつつ、他の教師たちが「教師意識の特殊集団」に隔離される、という構図がある。かつて、「非国民」を排除しつつ、多くの善良な人たちが「臣民」に狩りこまれ、朝鮮人を虐殺したりして平然としたのと、相似の構図ではなからうか。

だから、館崎さんの闘いには、この根こそぎを拒絶する闘いがだいじだと思う。押しつけられた専科で居直って、担任と同様の、または異なった質の、子どもたち（そして親たち）との結びつきを拓き、養うということだ。授業のやり方も、学級担任のとき以上に、思いきったことをしてやったほうがいいと思う。「図工の時間に、松本キミ子さん（キミ子方式とよぶ優れた絵画指導の実践者だ）をよんだらどうだろう」「書写だって、学校書道じゃない、新しい感覚の書家を教室に招けば、おもしろいのでは」と、私はいつてみた。学校の変革は専科から」といって「ハシチャイデ」みる手もあるのではなからうか。

教師の仕事とは、自分で授業しとおすことであるより、たとえば、すぐれた書家の話や実技や指導を子どもたちの前に仕組んでやることだ、と私は考えている。こうした視点からの支援も考えてみたいものである。裁判闘争（教師の教育権とか教育の自由とかの、理念的実践の見直しも担う重要な闘いだ）とともに、車の両輪となるのだろうと思う。

（教育評論家）

児玉 すみ子

前回までに述べてきたことを要約すれば、カウンセリングとは、人と人とのかわり、主として言葉を通してのコミュニケーションにより、十分に機能していなかった、閉ざされた心を開放して、その人らしく生きていく力を自らの内によび起こしていく過程であるといえよう。そして、その過程を創り出す基になるのは、カウンセラーとクライエントの関係いかんであり、この関係は又、カウンセラーの人間性、態度、技術、いかによるものである。従って、カウンセラーの資質が大いに問われることになる。とらわれの状態から解放され、生きゆく力を回復していくのは、クライエント自身なのであって、カウンセラーがその力を分かち与えたり、注入したりするのは、決してない。いわば、カウンセラーという触媒によって、クライエントは、自分の足で立ち、自前の力を発揮していくことを、自ら学ぶのである。

しかし、カウンセラーは、単に触媒にすぎないとは言っても、そう在ることは、生易しいことでない。当然ながら、絶えなき「学習」や「研修」が要求される。しかも、それには、カウンセリングについて学ぶ認知学習に、そのエッセンスを体得する経験学習が伴

わねばならない。知的に理解すると共に、理解したように自ら振舞えねばならない。即ち、カウンセラーたることは、自己に向かう歩みともいえる。自己の情動的歪みや、不適応感を直視し、自己の生き方や人間観を洗い直し、自己の問題に直面する学習が、必須となってくる。

さて、この難かしくも、はるげき道、他人も生き、自らも生きるという実り多き道——カウンセリング研修について、二回に亘って述べてみよう。

研修にあたっては、指導者に従って訓練を受けるのが常道であるし、又、民間団体や、公的相談機関の行っている講座や講習、ワークショップなどに参加することも望ましい。しかし、そういう機会の持たない方であっても、教師としての日常にあって、生徒を真に援助できるように関係を作ろうと、ひとり努力していくことも、不可能ではない。それどころか、「自分自身をたえず吟味し」「自分自身であろう」として、日々新たな歩みが続けることこそが、カウンセリング研修の、重要なポイントなのである。カウンセリングに興味のある方が、現場にあって、自己訓練にも応用できると思われる方法を中心に、今回は述べてみよう。次回は、個人の研修を振り返って、どこでつまづき、どこで乗り越え、開かれていったかを、具体的に、頭わにしてみたいと思う。

一、書物を通しての学習

カウンセリング研修には、経験学習が欠かせないけれども、自分の経験を、客観的理論構成で裏付け、自分が実践において動揺した

り、不安になったりしないために、知識を深めること、又、自分のやり方に安住し、マンネリに陥らないために、理論による挑戦を受けることは、肝要である。

初心者にとっては、わかりやすい入門書の助けを借りて、カウンセリングを知るのが、もっとも手近な入り方であろう。基本文献は数多くあるが、そのうち、いくつかを紹介してみよう。

入門書として、

佐治守夫『カウンセリング入門』国土社、伊東博『新訂カウンセリング』誠信書房、河合隼雄『カウンセリングの実際問題』同、水島恵一『カウンセリング入門』大日本図書

技術を学ぶには、

何れも『カウンセリングの技術』の書名で、友田不二男著（誠信書房）、ロロ・メイ著、ロジャーズ著（共に岩崎学術出版社）がある。

集大成されたものに、

沢田慶輔編『相談心理学』朝倉書店
カウンセリングを考え直すために、
カウンセラー『透明なる自己』誠信書房、河合隼雄『カウンセリングと人間性』創元社

人間の「心」を考えさせるものに、

シュヴァイング『精神病者の魂への道』みず書房、セシエー『分裂病の少女の手記』同、レイン『ひき裂かれた自己』同、ピアズ『わが魂にあうまで』羽田書店、西丸四方『病める心の記録』中公新書

最後に、私自身、研修に役立ち、感銘を受けた本をいくつか挙げてみよう。

プーバー『孤独と愛』、ロロ・メイ『失なわれし自己を求めて』、ロジャーズ他『人は人によりてのみ』、フロム『自由からの逃走』、ピカート『われら自身の中のヒトラー』、テイリッヒ『生きる勇氣』、谷口隆之助『疎外からの自由』、フランクル『死と愛』、ギェスドルフ『何のための教師』、正木正『教育的叢知』、オルポート『人間の形成』など

二、グループ体験

各自の事例を持ちよって意見交換する事例研究会、^{イニシエーション}寝食を共にして自分たちの問題を出し合い討議するワークショップ、その他、エンカウンターグループとか、Tグループとか、カウンセリング研修では、人間関係を学ぶ——他人の発言をもとに自己理解を深めたり、自分が他人にどうかかわれるかなどを学ぶ——ために、グループ・ダイナミックスを利用することが多い。良きファシリテーター（促進者）に恵まれて舵とりをされると、赤裸々な自己の姿、他人の姿に接して、人間に目を開かれる思いがしたり、グループ成員相互の動き、話の流れっていく様から、個々人の姿勢とか人間性、その発言の持つ意味の大きさに気づいて、敏感性を養なうこともできる。興味ある方は次記に問い合わせるとよい。

日本カウンセラー協会(03)586-1761 日本カウンセリングセンター
(03)953-8720 日本カウンセリング協会(045)461-5714

日ごろ、グループ討議に参加したら、次の項目について、イエス・ノーでも、プラス何点マイナス何点でもよい、自分を含めて参加者全員の反応を記録してみることも、興味深い。これらの項目が、高い得点を得られる時には、そのグループ討議は、グループ・カウ

ンセリングと同じような効果をもち、ひとりひとりの心を開き、高め、何か資するところがある筈なのである。

項目(1)参加者の発言が、話し合いの内容の焦点(核心)をついてるか。

項目(2)又、その発言が、口先だけの理屈ではなく、感情や経験の裏付けのある、卒直なものであるか。

項目(3)今、発言している人の言わんとしていることを、的確に参加者が理解しているか。

項目(4)各メンバーに自由な自己探究をゆるし、困惑している者には援助しようとしているか。

私が研修生として担当していた事例をテーマに、研究会が開かれた時のことである。

「あなたは、このクライエントの父親に対する憎しみを、とても深く、とらえていられますね……?」

私のテープを傾聴して下さっていたHというヴェテランのカウンセラーが、穏やかではあるが確かな口調で、私にこう質問した。

「ええ」と私は肯いて、Hの眼差しが、自分の心の奥に届くのを感じた。その瞬間、自分の姿が明瞭に見えてきたのである。

「私には、クライエントの父に対する憎しみだけが伝わっていた。私自身の中にも我が父への憎しみがあるからだ。だが、このクライエントのもう一方の気持、父への敬愛心に、私は反応することができていない!」

この時のHの私への焦点の合わせ方で、私は、自分が、両向性を示すクライエントの気持をうけとめられていないことが、一瞬にしかわかったのであった。

三、カウンセリングを受ける

精神分析では、「教育分析」といって、訓練中に自分の分析を受けねばならない。同様に、カウンセリングの場合も、自分自身を理解し、受容するために、カウンセリングを受けてみることも必要である。これは、同様に、受け手の気持を動きを学習することも可能にする。同じ理由で、教師が教わる身になってみるのも、感受性を高める良い経験になる。例えば講習を受けた時には講師の話し振りを、習いごとをしているなら、その先生の態度を、教えられる身は、どう感じるか、詳細に検討してみるのである。又、自分の生徒との面接や授業を、テープにとり、受け手の身になって聴いてみる。つらい修業ではあるが、自分の姿が如実にわかるものである。

ロールプレイも、この線に沿う学習である。模擬面接ながら、カウンセラー役割の者は、テープに現れた自分の応答態度や発言を、吟味することができるし、クライエント役割の者は、自分が理解されたか否か、受容されたか否かを体験的に味わい、受け手の気持を知る学習になる。グループ内で交替して実演する場合は、観客の立場にいる人たちの意見を聞くと、更に、学習は、広がっていく。

もっと手近な方法。あなたが、誰かに、何か相談を持ちかけた時、少し混み入った話をする時、相手にどういふ対応をされれば、もっとも心が軽くなり、方向が見え(たとえ、解決に至らずとも)、力が湧いてくるかを分析してみるのである。この対応の仕方の奥義が会得されれば、カウンセラーなどと呼ばれなくても、あなたは、確実に、周りの人々を援助できる人になれるであろう。

〔参考文献〕田畑治「カウンセラーの養成」『現代のエスプリ』No. 109 所収、広瀬米夫著『カウンセラーの自己訓練』岩崎学術出版社

●「外庄」による教科書問題で、突如「教科書評論家」総出現の態。某社会教育の企画はジャズダンスと並んで教科書問題。踊る阿呆の私になぜか前者ではなく後者でお呼びがかかる。今や、喫茶店でも井戸端会議でも、老人同士も文学かぶれも各種運動家も、ナント家庭訪問まで（珍しい話題ノ）耳を澄ませれば「侵略」か「進出」かと賑々しいこと。

●なにを今さら。検定のねじ曲げは今に始まったことじゃなし。家永教科書訴訟はもう十七年も闘っている。「やむをえず」権力に屈した執筆者、「国民の良心を代弁する」マスコミ記者、「教育の管理統制を憂うる」教育者、「文部省に抗議する」文化人という名のクラゲ人間（頭デッカチ泳ぎ上手）、そして「評論家」さんたちも、教科書裁判にどうかかわったのか知りたいワ。入会している、ですと？ 団体加入ではなく自費ででしょうか。

●家永訴訟をすべてよしというつもりはない。だが、巖のごとき教育体制を前に己れの無力を思うにつけ、文部省を「被告」に検定のマル秘文書を陽の下に引きずり出した裁判に驚き打たれ、ほんの一端ながら加わった。

「やむをえず」権力に屈した家永教授は、「死の床で二度と後悔しないために」十七年前に訴訟に踏みきったのだ。「外庄」ではない。

●「権利ばかり教えて義務を教えない」日本の教育なのに、なぜか権利意識が希薄な国民感情に裁判は「なじまない」のか。教科書裁判を訴える私に教師も親も冷たかった。とこ

丙十舞雅里 バラード

(7)

ろが、かの「文化人」の声明にはとびついて、せつせと署名を集める人々がいる。クラゲ人間に漂うクラゲ人種。やらないよりはやったほうがいいだろうが、署名にどれほどのゴリヤクがあるか、一度抗議先へ持って行けばわかるのに。

●「評論家」でもなんでもいい。それでも教

科書の実体が人々の口の端に登ったのはいい。だが、おそらく「外庄」は「政治的決着」で終わるだろう。マスコミからも消えるだろう。問われるのはその後だ。よしんば「進出」が「侵略」になったとしても、現在の教育問題のいったいなにが解決したというのだ。

●戦前の教科書の呪縛から一步も出られぬ「評論」が気にかかる。オカミから下される教科書への「信仰」がますます高まった感にゾツとする。検定制度の違憲違法を問う一方、教科書は一教材でしかないという認識を現場で確立するならば、検定は事実上崩壊するのだ。「教育の国家統制に反対」するならば、教科書に頼らずに授業できる教師の力量をこそつけるべきではないのか。教育の画一化をなげきつつ、画一的授業を続ける教師なんてもうタクサンだ。集団で叫んで個人ではなににもできない日本のムラ人間の猛省こそ先決だ。

●今度もまた子供不在の教科書騒ぎ。外の顔色をうかがうよりも子供の顔を見たらどうだ。子供に視点をすえたとき、教科書も授業内容も当然変えずにはいられないはず。どちらさまもネ。

（門野晴子）



学習の 主人公たち

「家事」ってだれがするのかな

鹿児島県立頴娃高等学校の生徒たち

本校では「家庭経営」を男女の

生徒が選択しています。一学期は食物から入りましたので、特に男子生徒は「家事労働」について、ほとんど学習していません。その生徒たちが「家事」をどう考えているか、九月一日二学期の始業式後に書いてもらいました。かつて男尊女卑で聞こえた「薩摩」の高校生たちの言葉です。

(岩沢秀子)

有村里由美

料理などは、普通主婦がするものだと思う。他のおフロ、草むしり、子育てなどは、家族で分けあってした方がいいと思う。

伊瀬知健一

昔から、家事についても、世の中の政治においても、男尊女卑というものがあって、女性はいつもの、しいたげられてきた。現在でもその風ちようがあると思う。常に炊事、洗たく、そうじをやる者は女性であるときめつけられているように思える。自分の家庭でもそれは言える。やはり家事は母がおもにやっている。しかし時々自分も少しは手伝うことがある。それでもそれはほんの一部分だけだと思う。女性はかんしんするほどはたらしきものだと思う。

伊瀬知浩子

家事は、昔から女がやるものだよと言われてる。主婦業の一つとして――。

炊事、洗濯、掃除その他いろいろ主婦業は

あるが、私は、家事は女がやるものだよ、言い切ってほしくない。家ではもちろん、私も家事はしているが、なぜ女性がしなければならぬのだろうか。

男女平等にすれば良いと思う。

石峯浩志

家事は普通女の人がする。しかし男女平等の今かならずしも女の人がしなければならぬという事はないと思う。

僕のいとこの若夫婦は、奥さんも仕事をしているため家事を夫の人と半分ずつしている。とてもりっぱな夫の人だと思う。

などと言いながら、やっぱりほんの少しは家事は女の人にやってもらいたい気がする。

上野政彦

僕の家は、母子家庭なので母が家事をやっています。だから自分でしようなんてあまりしようと思ったこともない。男は別に仕事をしているのだし、とも働きしている場合は、別である。とも働きしている場合は、半分は男もすることがあってもよいのでは、ないかなとは思う。

私が学んだ小・中・高の家庭科

中尾 尚子

私が受けてきた家庭科教育は、小・中・高で大きく違った。教科内容には、実用向けの教育でそう違いはなかったように思うが、小・中・高各々の先生の教育思想及び授業態度はかなり違っていたように思う。何よりも違ったのは、自身の授業態度と、家庭科という授業の私の中の比重である。

小学校における家庭科の授業は何か特別で、ミシンを使う日とか、調理とかいう日は、ことさらに意識し、楽しい教科であった。自分の力で袋を作って使う喜び、自分で調理して食べる喜びは、大きなものであった。男の子も女の子も、当然のごとく針をもち、エプロンをつけたのは、やはり当然のことだからなのである。男の子と女の子が机を並べて家庭科の授業を受けることに何らか異和感を感じたことはなかったし、男の子も、憶することなく、いやがることもなく、生き生きと楽しんでた。

教科書の内容やどんな話を聞いたかは、定かではない。ただ、先生が授業中いつも言われた言葉だけは覚えていて。「特に男の子は、一生忘れないように」とか、「人間として生活するために、男女の別なく、どんな事でもやれるようにならなくちゃね」とかいうことだった。自然な形で私たちに正しい授業をされていたし、それがうまく私たちに反映されて

いた。

先生は、女の子よりもむしろ男の子に厳しかったが、男子には今後、正規の家庭科教育を受ける機会がないのを見こして、又、大人になった時、つまらぬ偏見をもたぬようにという考えから出たことであろうと今になって思う。

中学校の家庭科教育ははっきり言ってつまらないものだった。縫い物や料理など好きで、関心のある私でさえ、やる気もおこらなかったのだから、そういう方面の不得手な人は、まったく家庭科の授業を軽視していた。

男子は技術、女子は家庭と、教科書も教室も分けられて、男子は木工とか機械、女子は年輩の先生から、時代にそぐわない、いいかげんな授業を受け、実に味気ない、不満の多いものだった。女の子はただ縫って、ごはんが作ればよいという、その先生の考え方に、小学校の時と違うと思いつつ、やる気をなくした。友達の間でも「男の子がいれば楽しいのにね」とか、「私は木工の方をやりたい」「こんなことばかりやってバカみたい」というような、不満の意見ばかりだった。

＃＃として、男女を分けるのか、＃＃料理や裁縫のできない女は、女として本当にだめなのか＃＃＃＃中学校の家庭科で教えることは、男の子にも教えないで大丈夫なのか＃＃＃＃という、根本的疑問の答えを見出すこともなく、又誰も教えてくれることなく、つまらないまま、

明日の家庭科教師たち

受験教科外の授業ということもあって、怠け通した感じだった。

手許にある教科書、『技術・家庭女子用』の前書きに、技術・家庭科は、私たちの現在及び将来の生活に必要な技術を、実践を通して学ぶ教科だとあり、(1)生活に必要な技術を身につけること。(2)創意くふうして、ものをつくること。(3)仕事を、計画的・合理的にすすめること。(4)協同と責任と安全を重んじること。(5)技術を生活に活用し、生活を明るく、豊かにすること。と具体的に記してあるが、(3)(4)(5)は、男女が共通の知識や技能を持った方が、より理解し合え、又、協力できて、生活の向上につながるのには、目に見えたことだと思いののに、こういう学習の目標を掲げておきながら、男子と女子の領分を分けてしまっている。わざわざ、男女の壁を高くしてしまうことになりかねない。

高校に入っても、なお壁はなくならない。女子にのみ、「家庭一般」という教科が与えられる。「家庭一般」は、中学校より、かなりつつ込んだ内容で、教科書を読んでいるだけで興味深く、ためになった。「家庭の経営」というところなど、特に興味深かった。いま読み直してみると、この項目は、男子も一緒になって理解しなければ意味がないことに気づく。家族の協力とか分担の必要性を説き、「従来のような『夫は外回り、妻は内回り』という固定した考え方は、妻の負担が過重になりすぎる。変動の激しい生活実態に対応して、家庭生活を円滑に経営していくためには、従来の社会通念などにとらわれず、家族員が分担協力して家事を処理するような

民主的な方針をとるべきであろう」というすばらしい文章が目につく。ここまで述べておきながら、なぜ家庭科は女子だけなのだろうか。従来の固定した考え方を維持しているのは、いったい誰かと言いたくなる。

それに「家庭一般」では技術検定という、ものがあり、きゅうりの薄切りテストなどやらされたのを覚えてはいるが、やる価値のないことを、とってつけたようにやらされている気がしてならなかった。先生も決まっていることだからと苦笑されたのを覚えてはいる。

それとは反対に、有意義だと思ったのは、老人ホームに寄付するためのものを、クラス単位で計画・製作したことである。私たちは余り毛糸で、モチーフを編み、ひざかけを作ることになったが、男子にも働きかけて、毛糸を持ってきてもらったし、みんなで協力しあった作品が、他の人に有効に使われるという喜びは、小学校の時の喜びと似ていた。授業と直接かわりがないことだったけれど、一番ためになった気がする。

授業はなかなか内容のあるものだった。先生もよい先生で、教科書の中から重要箇所を選び、自分の知識で補いながら、家庭科のわくを越えて、社会問題、経済問題にまで発展していくことがよくあった。衣・食・住・保育など、どれをとっても社会と大きなかわりがあるし、そこに問題も含まれていることがわかった。高校になって初めて、家庭科で、ただ縫ったり料理したりすること以外に、広い視野に立って、家庭や家族のあり方や有意義な生活の送り方というものを授業で取り扱うのだということがわかった。

家庭科教育は、どの教科よりも実生活と密着し身近でしかも意義ある教科であるのに、他教科より軽視されたり、教師まで古くさい

思想をもち、それを押しつけることがけつしてあってはならない。これは私が受けてきた家庭科教育を振り返って感じることである。

さて、教育実習で、家庭科教育を行う立場におかれ、現状に触れる機会を得たが、受ける側で抱いた印象と大差なかった。つまり、高校の先生方の家庭科軽視・差別視を痛いほど感じ、家庭科に対し何の関心も払われていないことを知った。教育実習校は私の母校で、進学校としての例にもれず、受験教科優先で、家庭科への理解とその改善に協力を望む余地もないといった感じであった。そういう校風の中で、家庭科教

寺島紘子さんへ

八、九月号の、寺島紘子さんの「障害者の人権」の授業の中で使われたスライドをつくった側として、ひと言ふた言感想を述べたいと思います。

あのスライドは、私にとっては決して満足な出来上がりとは言えません。ヘルパーとして来た高校生とも、ほんの短い間でしかおつきあいができなかったし、彼女と何か共有できるものをつくるどころまではとも行けなかったからです。そして出版社のしめ切りに追われ、文章的な確認も十分出来ないまま仕上げました。その間私がいちばん恐れたのは、このスライドを使う場合、障害者にまだ出会っていない

師一人が、がんばってみたところで、生徒の家庭科軽視を変えるところまではいかない。

調理実習などで他の授業にちよつとも迷惑をかけると、それこそんでもないということだし、試食して、「これぐらいなら、この生徒も嫁にいけますな」という程度の感想をもらされる。家庭科を花嫁育成の講座程度にしか思っていないことに今さら驚き、いきどおりを感じた。家庭科といえば、縫い物、料理、女子大の家政学部といえは花嫁学校と思う人々が、教育者の中にまでいることは、家庭科教育の理解と前進を困難にするものであり、大きな問題であると思う。
(日本女子大学学生)

新井 純子

人を見て、何かしらわかったような気になることでした。スライドの中の高校生もうちに来る人たちも、かなりの人の中に、すぐ身構えたかたちで来る人がいます。何か考えなければいけないとか、してあげなければならぬとか、義務や使命感を持って来るのです。そういう人たちは多くの場合、以前、障害者のことにちよつとかかわったとか、障害者問題を頭で考えたことがあるとか、さもないれば常識的な意味での「かわいそうなひとたち」に何かしてあげなければいけない、と強く思っていたひとたちでした。そういうかたちで身構えて来た人の場合、動き自体も固くなってしまいます。私たちとせつかく出会えても、伸びやかにかかわり合うことが難し

いようです。いちど持ってしまった意識や価値観を変えるのは、かなり大変なことです。

それとは逆に、障害者と出会っていなくて、別に常識にも侵されず、何も考えて来なかったひとたちは、とてもたのしいです。彼らはひとつひとつに「へえー」とか「まあ」とか驚きながら、「そういうこともあったのか」と実に素直にあたらしい出会いをたのしんで行きます。そして「共に生きる」たのしきみたいなものを身につけて行くようです。個別的なながあいつきあいができるようにもなっけて行きます。

あのスライドで、先入観を、私は極力つくってほしくないと思いました。生の障害者とかかわりの中で見えてくる「障害者問題」が私は本物だと思っからです。「共に生きる」たのしさがわからなかったら、「分けられてしまう」かなしさはわかりません。そしてこのかなしさは障害者だけのものではないはず。

授業についての感想ですが、ひとつに、寺島さんが教師としてでなく、なぜ「障害者問題」もやりたかったのか個人としての必然性が見えて来ないように思います。もちろん、差別の構造や現実を知ること無意味ではありませんが、差別に気づく一歩は、やはりごく個人的な痛みの肉声からしかはじまらないのではないのでしょうか。差別されてる側の肉声ももちろん重要ですが、差別する側の人がそれに気づいたときの痛さも同様に人を動かす力があると思います。

これとあまり変わりないのですが、授業全体として、前述の差別的構造や現実などにこだわりすぎた感があります。社

会全体を見とおして、その仕組みやあるべき方向を考えるのも確かに大切ですけど、前に述べたように、差別に気づくきっかけは、驚きだったり、怒りだったりあまり社会的でない、個人的な感性の高まりからのものが多いのです。極端に言ってしまうえば、出会って、感じ合うことが第一歩とも言えるでしょう。みんなの前で自分の父親のことを「父は目が見えない」と言えないと発表した生徒のことなどを掘り下げて行くことができたなら、もっとおもしろい授業の結果になったのではないかと思います。また実際に施設に行くなど障害者とじかにあう機会をつくっても良かったのではないのでしょうか。いくら良い資料をつかっても、それは資料でしかありません。障害者にあつて、しゃべっていることがさっぱり聞きとれなかったり、その場を逃げ出したくなったり、気持ちが悪くなったりすることが差別に気付くはじまりで、かかわりの中でどう変わって行くのが大切なのではないのでしょうか。

最後に、もし同じスライド（「障害者とともに」一橋出版）を使うような場合は、なるべく直接的な障害者とかかわりを前提に、あたらしく見方を変えて行くとかかりとして使っていた方がいいと思います。例えば寺島さんの文章でいえば、前任校の家庭クラブの場合に、それまでのかかわり合いを大切にしながら、しかし他の障害者の例などみる中で、社会的な構造や、どうあるべきかを考えるきっかけとして使っていたかと思えます。障害の種類、また施設と地域の違いもあり、視野を広げるのにはちょうどよかったのではないのでしょうか。

寺島さんの書いておられるとおり、「人権」とは人に教えられてわかるものではないと思います。

そして「障害者問題」も、人に聞いたり本で読んだりしてわかることではありません。障害者と直接出会い、驚き、そしてかわりの中で悩み、変わって行く中で何か新しい展望が見えて来るのではないのでしょうか。それには一年や二年で

父

父が逝って、二週間がたとうとしている。気持が落ち着いてくるにつれて、元気だったころの姿が思い出されてくる。

明治生まれの頑固な人であったが、将来を見る目は確かだったことが、今になってよくわかる。戦争中、すでに四十歳近くになり、教職にあつたことから、「おれが招集されるようでは、日本も負けだな」と独り言を言っていたとか。十九年に招集され、種ヶ島で終戦を迎えた。予想通り敗戦であった。出征中の日記は、「悪夢」という題をつけられ、私たちが兄妹も平和になってから読ませてもらった。

出征中に生まれた私は、父の希望の女の子であつたため、兄たちからうらやましがられた。小さい時に母と姉を亡くしたのが原因ではあろうが、男の子を特に大切にしていた時代に、第一子から女の子が欲しいと言いはっていたそうだから、あの時代では変人の一人であつたかもしれない。

私が大学で家政経済を専攻しようとした時、「これからの家庭科は技術中心の時代から家庭経営が中心になる。これだけ時代が変化し、電化が進んできた時代にただ、料理・裁縫

なく、五年、十年という長い年月がかかります。この授業もどうかこれだけに終わらせないでほしいと思います。その後の経過などお伝えくだされば、大変うれしく思います。

脇 美智子

を教えるだけの家庭科でなく、どんな変化にも応じられる人間を育てる教科でなくてはならない。良い科を選んだ」と励ましてくれた。確たる考えもなかった私は、初めて将来への目が開かれた気がした。

私が中学の家庭科教師として初出勤した日、父自らフルコースを食卓に並べ、娘の門出を祝福してくれた。子供の時から、父が台所へ入ることに不思議に思わずに育った私にとって、今でも、生徒が、「私作る人・僕食べる人」という考えから出ていないのに驚かされる。私が結婚して夫の赴任地、バンコックへ発つ時の別れの言葉は、「山内一豊の妻になってはいけない。最初から夫に内緒ごとを持っていくような妻は悪妻の最たるものだ。夫婦協力して、何でも話し合える家庭を作れ」というものだった。良妻の見本と言われる一豊の妻も確かにこう考えれば悪妻でしかないとおかしくなつた。

「今の世の中では、女という立場は弱いものだ。それだけに、女の子には教育を受けさせ、資格をとらせ、自信を持った生活ができるようにさせるのが親の努めだ」という言葉を思い出す。私は、退職

後、十年間、家庭にいて、昨年から高等学校の非常勤講師として再び教壇にたつようになった。その時の父の喜びは、今思い出してもうれしくなる。が、その直後に父は倒れ、一年余の寝たがりの生活の後、別れの日を迎えてしまった。いつまでも親離れのできなかつた娘は、今こうして父の残

してくれた言葉をふりかえって、これからは、自分の娘に、そして教へ子たちに、私が父にしてもらったのと同じ人生の指針をアドバイスできなければと考える。それは、これから二十年、三十年後にふりかえっても決してまちがってはいなかったと言われるようなアドバイスでなければと考える。
(埼玉県立入間高等学校)

子供に伝えたいくらしの暮らし

小林カツ代

近ごろよく次のような依頼を受けます。

「おたくではお子さんに家事を手伝わせていらっしやるそうで、ぜひ取材させて下さい。」

「うーん、最近よくそう言われて、雑誌などにわりにのせてるので、他の人にお願ひしたら？」と言うと、著名人のほとんどが言行不一致で、つい先だっても日ごろから男の子にも生活の上での自立をさせなければいけないとかねがね言っている評論家に取材依頼をしたところ、

「それがね、正直いうと息子にはあまりそういうことをさせていないの」とのたまったそうで、編集者はぼかーん。こういう言行不一致も困りはするけど、「娘には手伝わせず、息子にはそんなめめしいことをさせたくない」という言行一致の人はもっと困ります。

現代の世の中において、子育ての重要な姿勢のひとつに「いかなるものに対しても差別感を持たない人間に育てあげ

る」ことがあげられます。なぜ、現代のとわざわざ銘打つのかと言いますと、これは日本の子育ての歴史の中でかなり欠落していた部分だからです。だからいまだに差別感ありのおとながうようよしているのです。では差別感なきおとなに仕上げるにはどうすればよいかは、これは言葉や、親の生きざまによってかなり影響を与えられるでしょう。しかし、それだけでは不十分で、もっと具体的に、生活の中で、くらしの営みの中で肌で感じとっていくものでなくてはと思います。

夏休みのある日、娘の同級生である母親と買物途中ぼったり出会いました。今年の夏休み、どういうわけか小学校五年の子らには多すぎると思われるほど、まさしく山のごとき宿題が出、母親同志、それらをちっともやらぬ子らへのぐちばなし。宿題のひとつに運針があり、毎日必ず一本。提出ときには45本並んでいなくてはいけないわけ。暑いさなかのことで汗によって針はすぐさび、スムーズに行かぬ縫いになりますすいやけさし……。

「でもおたくは女の子だから必要だけど、うちは男の子でしょう。そんなの意味ないからしなくていいよってやってやるんですよ」と、はからずも出たIさんの言葉に、あーブルーラスお前もかの心境の私。

なぜ縫いものは男の子に必要なんでしょうかね。つまり、それは女に期待してのこと。息子はいざれ結婚する。結婚したら女房がいる。そして針仕事は当然女がする。だから男がそれを学習する意味がない、という論理。

夕食の仕度時間も迫っていてここで反駁する時間的ゆとりはなく、そのまま宿題ぐち話で別れました。以来ずーっと気持が落ちつきません。息子を持つ母親にまだまだある性差別。

私は娘が四歳の誕生日に針箱を与え、息子にも四歳の誕生日、姉とおそろいの針箱を贈ってやりました。とてもうれしそうでした。それまでの積み重ねがあったので、決して「こんな女の子のなんかいらぬ」とは言いませんでした。それから子どもたちは次々と幼い手から作品を生み出し、子どもしか作れないかけがえのない愛らしいものを作ります。息子はある教会の小さいバザーで、こぶりのふたつきのかごを買ってきました。あれは小学校の二年生の時。自分の針山にちょうどいいと思って。そこへ針山を入れ、ふたをする習慣をつけたら、もしたたみの上に置き忘れても危険がないからと。

この思いつきは母としてうれしかった。彼の針山はしょっちゅう針箱から出されて動き回り、つねに私から「ふんだら

どうするの?!」とどなられるほどよく使われていたからです。彼にとって針山は、彼の生活の道具になっていたのです。だからバザーでも小さいふたつきのかごにすぐ目があったのです。

針仕事に限らず、生活する上に必要欠くべからざることは男も女もたいした違いはないはず、食べる、着る、住む、それをする上の手の技術。これらは幼いうちから自然に身につけさせたいと思っていました。自分で着たり脱いだり出来るおとなが、ボタン一個取れたらさて出来ぬ、なんてばかなことどうして今まで見過ごされてきたのでしょうか。あまりにも男社会・女家庭の時代が長すぎて、当の女たちがすっかりそのことにマヒして、男がやってもちっともおかしくないこともすべて一手に引き受ける習慣が身につき、またこれを伝承していつているこわさ。そのこわさは何も出来ぬ男を作るこわさより、性差別をみっちり自然に次の世代に植えこんでいるこわさです。

娘は小学校三年になるとひとりでミシンを使い出し、レッスン用の手さげを作りました。息子は三年になると、サッカーでろんこになって帰ってきたかと思うと、サッカーシューズの袋をさっさとぬってそこへ靴をしまいました。すべて生活の中にとけこんでいます。

彼らは大きくなるにつれ、いやおうなく性差別の中に身をおきはじめました。料理づくりは彼らの大好きな生活技術。子どもの料理講習なるものに意気揚々と出かけてみたら男の子は息子ただひとり。でも彼は平気で姉と休まず出席しました。なぜ平気かという、自分のほうが正しくて、料理なんて女だけが習うもんだという人間のほうが間違っているとほつきり分かっているから。

親も言いたい

料理でいえば、「子どもと楽しむお菓子や料理」、これはまさに楽しみのひとつであって、ほんとはやりたくない時でも作って食べないと死んでしまうといった、生きるための術でもあるはず。このことを教えこむような料理参加でないとやらせる意味がありません。

今年の夏、娘の学校で娘たちにはじめての経験である、昔でいう林間学校のようなものに二泊行ってきました。行く前、ささいなことで私とけんかをし、「もう知らない。あなたひとりでも何もやりなさいっ」とつい言葉のいきおいで言ってしまった。向こうでは牛の世話とかいろいろと労働もあるとのことで、ふだんと違う生活が待っています。持っていくものもかなりの量になり、お母さんと相談でといったものもけっこうあり、けんかのいきおいとはいえしまった！と思いました。

気の弱いやさしい娘は多分涙を伝わせつつリュックをつめたことでしょう。心配で夜中、ばんばんにつめこまれた巨大なリュックの中身をそーっと点検しました。

見事！ まったく何ひとつ不足なく、何ひとつ unnecessary も

生活していい子どもたち

○ないないづくし

つい先ごろ、バンコクの日本人学校の先生を三年間やって帰国したばかりの友人と会った。

のなし。いつ訪れるかも知れぬ生理用のショーツとナフキンまで入り小さい針箱セットやバンドエイド等々、先生の助言をむろんしっかり守ってのことでしょうが、実に安心しました。しかし、これらはやはり積み重ねであって、ほんとのところ、子どもにいろいろやらせてというのとても面倒で、まだまだつたない手の時は親がついやってしまい、大事な時期に芽をつみとってしまいます。ひとりやるほうがよっぽどらくな時期のほうが長いです。でも、やらせることです。

きのう息子はひとりでおべんとうを作って出かけました。自分から作りたいと言いつい出し、あり合わせで。お米や野菜洗いからすべて。おかずは卵焼き・かまぼこのゆでたもの・キャベツサラダ・りんじんグラッセ。梅干し。ごはんにはおかかがかかっています。うれしそうに出かけたその顔は四年生のわんぱく坊主。めめしくなる？ と思う人に見せたいものです。

長々と書いたわが娘と息子の話。これが自慢話に聞こえるほうがおかしくて、こんなこと実はごく当たり前の話であるはずなのです。(料理研究家)

駒野 陽子

中学校の理科の教師で、東京にいたころは、「最近の生徒は、馬や、牛や、にわとりさえ見たことがないんだよ。かぶと虫やくわがたはデパートで売っているから、買ってもらったことがあるが、と

かげやかまきりやくもを見たことないっていう子はざらだよ。図鑑やテレビでは知っているんだが、そばに寄ったこと、さわったことがないんだ」とよくボヤいていた人だ。

久しぶりで会った時、「あちらの生活はいかがでした？」という私のありきたりのあいさつに、

「いやー、よわった。うちの子たち（二人とも小学生の男子）が全然だめになっちゃった」

と、彼の第一声はまたもボヤキから始まった。

さては、彼も「海外生活で子どもの学力が落ち、日本の学校の勉強についていけない」と嘆く、外地帰りの教育パパになっちゃったか、と心配したら、さにあらず。

「勉強は日本人学校だからこつちと同じ教科書で同じような授業をするし、参考書もたくさん用意してある。中学生になると、学力テストもあって偏差値を出すところまで同じさ。」

ただ、むこうでは日本人の家庭には、現地の女の人がお手伝いさんに来るんだ。いらぬ、というとその人たちが職を失うことになるから断われない。それで子どもたちが自分の身の回りのことを人まかせにする悪いくせがついた。それでも、むこうでは、いろいろな家畜や動物や昆虫、珍しい植物なんかに取り囲まれて、日暮れまで外で遊んだり、泳いだりして、体をよく動かしていたからまだよかった。こつちへ帰ってからは最低だ。クローラーのある部屋のテレビの前にすわりっぱなしでごろごろしてる。あれが欲しい、これが欲しいと、テレビで見るもの何でも欲しががる。今は、ゲーム・ウォッチというのに凝っているよ。こつちじゃ遊ぶのにもたいそ

うな金がかかるんだな」と、嘆きはつきない。

なるほど、東京の子どもには、自然がなく、遊び場がなく、仲間がなく、生活そのものがない。日ごろ気にはなっていたが、彼の話で改めてそのことを痛感した。

○よけいなものが多すぎる

「たった三年留守にただけだけど、東京の暮らしもずいぶん変わったね。便利で快適になった、と言いたいが、なくてもいいものばかりどんどん増える。テレビ、洗濯機や冷蔵庫、クローラーなんかは前からあったけど、なんだい、あのリモコン装置というやつは。目の前にあるテレビに手を伸ばすのさえめんどうがって、リモコンでピコピコ。洗濯機だって、前の方がよかった。子どもに洗濯機の

使い方を教えながら、モーターの仕組みを説明したり、脱水機で遠心力の話をしたり、理科室なみの勉強をしたもんだけど、今は洗濯ものをほうりこんで、ボタンを一回押すだけ。あれじゃ、機械を使う面白さは全くないね。それぞれ理的に説明できないことはないけど、自分が手を出して動かしたり、調整したりしないと、興味が出ないもんだよ。

ゲーム・ウォッチだってそうだ。エレクトロニクスの技術がこう進歩しては、故障しても調子がわるくても、分解してみる楽しみがないから、こわれたら使い捨て。売る方はそれでいいかもしれないが、親のふところはたまらないよ。デパートのおもちゃ売場に行ってみれば、ボタンや、スイッチひとつで動くおもちゃばかり。子ども部屋には、切れた乾電池がごろごろしてる」。

子どもたちのおねだり攻勢には、彼もだいたい悩まされているらしい。

消費は美德だ、と言われた高度成長の時代は終わったが、今や、便利なこと、手間を省くことこそが商品の価値と言わんばかりに、新製品が続々と売り出される。

その製品の広告は、もっぱらテレビのコマーシャルから……というわけで、テレビに対する彼の怨みも相当なものだ。

○わかったつもりで……

「知識だって、なるべく楽をして身につけようってわけだから、テレビや写真や図鑑でわかったつもりになる。それは、あっちへ行く前からいつも言っていたことだけで、実物を見たり、さわったりしないで、頭だけでわかった、と思ってるほどこわいものはないよ。うちの子だって、むこうで庭先を駆けまわっているにわとりを抱いてみて、『ああ、にわとりってあったかいんだねえ』っていうんだよ。蝶のおなかの柔かい手ざわりや翅の鱗粉の感じなんて、やっぱり掴んでみなくちゃわからない。さわってみて、はじめて生命とは何かがわかるんだよ。

野球だって、甲子園の熱戦の選手の汗を目で見ながら、自分では涼しい部屋でジュースを飲んでるんだからね。あれでスポーツが好き、なんていえるかね。

むこうじゃ、テレビがあまり普及してないんで、うちじゃテレビを買わなかった。テレビのない生活って、何とすばらしいものか、とつくづく思ったよ。家にもテレビでひまつぶしができないから、本を読んだり、笛を吹いたり、家族と話したり、友達と遊びに出ていったり、必ず頭や体を使い、他の人間や生きものや、自然と心を通わせる。テレビや

ゲームウォッチと向きあって、ひとりぼっち、なんてことはないものな。

○生活を取れもどすために

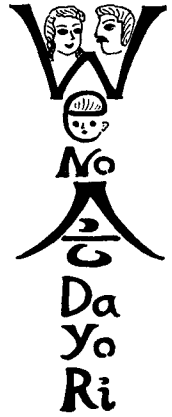
私も、子どもたちを育てている時、よく彼と同じようなことを感じた。だが、この十年余りの間に、子どもたちの『生活の喪失』はいつそう進んでいる。学校で生徒たちを見ている、年々、体を動かすことを厭う子たち、頭でっかちで、通りいっぺんに物事をわかったつもりになり、感動するみずみずしい心を失った子どもが増えてきている。

非行、登校拒否、自殺といった子どもの現象は、こうした『生活の喪失』と深くかかわっているのだ。

「これから当分は、うちの子たちと徹底的に対戦するぞ。ともかく、自分のこと、家の中の仕事は何でもやらせる。家の中の仕事——これは、わずかに残された生活の手ごたえだから、できるだけ活用しなくちゃ。おもちゃは何も買ってやらない。金を使わなくては楽しめない、という根性を叩きなおしてやる。テレビもできるだけ見せない。自分で原理を理解できない機械はつかわせない。一日に二時間は汗を流すほど体を動かさなければ、めしを食わせない。ああ、そうだ。自分で火を燃やしてめしを炊き、料理をつくらせるのもいいな。」

彼の悲壮な宣言にもかかわらず、マンション住まい、という住宅事情では、子どもたちとの対戦で彼に勝ち目はなさそうだ。だが、すべての親たちがこうした対戦の決意をもたなければ、子どもたちは、これからどうなっていくのだろうか。

(東京都新宿区立牛込第一中学校)



△ We 岐阜の会より▽

例年、半田先生が私のなずな学園を訪れて下さる好機を待って「半田先生を囲む会」を計画してまいりましたが、今年は何の読者会に切り替え案内をしました。

夏休みと言っても最近の先生方は、いろいろな行事や校務に拘束され、なかなか自由に勉強の時間が得られそうにないという実情も耳にし、八月二十四日は夜の研究会、翌二十五日は午前・午後引続いてゆったり語り合いました。前日は小中高大の先生方が多く、教育の現場における実態や問題を語る中で、家庭科の実践やなやみを交流しました。お子さん連れで取材に来て下さった若い女性のアナウンサーや、新聞記者の方々に、参加者は一入心をひかれ共感を覚えました。

次の日は、家庭婦人や退職者、障害児の親やボランティアも加わって「男女共修をめぐる問題」を中心に語り合い、続いて半田先生

のお話をうかがうことができました。

佐藤慶子さんの猫に一頁をさいていること、名取先生の現場実践に秘められた編集の意図、それぞれの執筆者がバックボーンとして常にもつめておられることなどがうけつけ、やがて登場される学者陣の筋の通った理論によって鮮明にされ、創造される冊子に期待いたしました。

十名集まって下さればと思つて案内したのですが、二日間にわたり、六十名余の参加を得、半田先生の魅力を一入感しました。出席できなかった方には希望があればテープを回すことを約束して散会いたしました。

(尾藤 操)

△ We 相模原(県北)の会より▽

神奈川読者会に参加された相模原の山崎さんの熱心なよびかけで、九月十一日、十八号台風の雨をついて、書き手の長谷川さん、名取さん、作り手の半田さん、馬場さんを囲み、熟若男女十三名が集まりました。

自己紹介をしながら、生活の急激な変化を反映して、教師からは、生徒の家事労働への参加が少なく、生活者としての意識が薄い、

集中力がないという話、母親からは、子どもが学校で生活についてどんな教育を受けるのか心配という話題が出ました。

受験体制の高校教育の中で、生徒に「家庭科はおいしいものが食べられてうれいと言われ、それだけなのかとがっかりする」と話した若い教師の例をひきながら、長谷川さんは「すばらしいではないか。数学、国語の授業で、生徒がそれだけの共感を持つことがあるだろうか。既成の知識体系を押し込もうとする今の学校教育の中で、生徒が人間として生きるため、自ら学ぶということがあろうか」と言われました。大学の聴講生として勉強されている主婦からは、「学ぼうとする意欲こそ、出発ではないでしょうか」と。このように学校の外からの価値ある意見がたくさん出ました。馬場さんの表紙も評判よく、新しい読者も増え、次回集りの相談も煮え、今後継続的に読者会を持つことになりました。

次回は、十二月四日(土)二時から、記録映画「侵略」を見た上で、新しい家庭科について、Weについて交流することになりました。場所は、県立相原高校(国鉄横浜線橋本駅南口前)です。ぜひお集まりを。(福島澄香)

△Weの会合宿に参加して▽

八月二十一日、男と女、五十年近い年齢差、さまざまな職種、と実にバラエティに rond 六十名の参加で合宿はスタートした。

まず永畑道子さんの「学校はもうダメなのか」という講演。だまされてはいけない。そのためには勉強しなければならない。と言いつつ続けられたというご自分のお父様のことから話し始められて、「私には学校は地獄ではなく天国でした。果たして今の学校は？」と耳を塞ぎたくするような例を示し、そうなった原因を明治からの歴史を通して語って下さった。ご自分のPTA活動や中野の準公選の例をひいて、でもまだ方法がありますよと明るく結んで下さったけれど、これから入学する子供を持つ親としては気が重くなることばかり。

荒れる生徒たちの実態も報告され、問題解決の難しさばかりが印象に残ろうとしている中で、中学生たちが合宿に参加していたことが私には救いであった。彼女たちは表・裏番長で相当なワルとみなされていたそうだが、二日間に見せた明るさ、相手の話を聞き、自

分たちの言葉で話そうと真剣に考えている態度に接していたら、学校はどうあれ、例えばどんな悪い環境になっても、子供にはそれをね返して育っていく力があるんじゃないか。問題があるのはむしろ評価する大人の側じゃないか、と思えてしかたなかった。

二日目は武田秀夫さんの「教師をやめて今」の講演。自分は一人の悲しみが皆の悲しみに、皆の幸せが一人の幸せになるのを理想として二十一年間教師をやってきた。でも今教師をやめて思うのは、一人一人の悲しみを美味しい酒に変える努力を一人一人がすべきではなからうか……。この言葉で引き出されて己の内なるものを見つめ、整理しつつの発言が続いていく。重い重い言葉。誰も答えることはできず、ただそれぞれの胸の内になってしまう。いく。

こう書いてくると、深刻に顔をしかめて二日間を過ごしたようだが、そうではない。一日目の夜はセキララに己をさらけ出し、より親密になろうとセキララ大会、二日目は眩しい陽射と流れの音に囲まれてのパーベキュー、とワイワイガヤガヤ食べて飲んで、快い疲労感とWeの仲間をより身近に感じられた満足感で一杯になった。

Weの読者というだけで、年齢も職業も、それこそ今一番関心を持っていることすら違う人たちが楽しく集うことができたのは、違うからこそ相手を知ろう、聞こう、まず受け入れてみようという態度になったからだろうか。違うからこそ皆が相手にやさしくなれたのだろうか。参加者の笑顔が心に残っている。

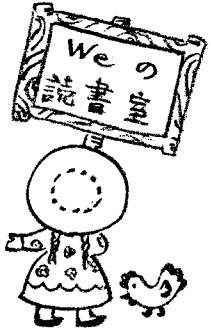
私は楽しかった良かったで終わったのだが、合宿の進行や準備、裏方にまわられた方はさぞ大変だったことだろう。どうもありがとう。

来年の合宿には、Weの仲間はどうなるだろう。私はどう変わっているだろう。Weを知って一つの目標が持てたようだ。

(山崎京子)

Weの会合カレンダー

- 10・3 埼玉 所沢 中嶋里美さん宅
 - 10・24 武蔵野 御殿山コミュニティセンター
 - 11・20 城北 北区十条出張所
 - 〃 神奈川 県立婦人総合センター
 - 12・4 相模原 県立相原高等学校
- Weで仲間を作りましょう。友情を深めましょう。あなたがまず呼びかけて！ お問い合わせはウイ書房へ03・3336・1380



毎日の暮らしの中で、私は実にさまざまな人と出会い、やりとりをし、別れ——を繰り返している。そして、その中に確実に人間としての成長の道すじが用意されている。

ふだん、とりたてて気にとめることはないのだが、この春以来たたくさんの人に出会い、その人たちをつなぎ合わせることを仕事とする場に職を得て、ふと立ちどまっていたいま、その感を強くしている。

とりわけ、自分にとってかけがえのない人との出会いには、めぐり合うべくしてめぐり合った必然、とでもいふべきものを思わせられるのだが、その必然をていねいにときほぐしていくと、互いにひきよせ、ひきよせられる力といったものにゆきあたってしまう。

目には見えないからひょっとわかりにくいけれど、その力は、互いの関係の中で培われ、獲得されていくものだと思う。

そのことを、一冊の本との出会いが、さらに深く考えさせてくれた。

伊藤雅子さんのことはご存知の方も多だろう。国立市公民館の職員として、主婦の問題に初めて焦点を当て、おとなの女の学習活動を展開させてきた人だ。

その人が一九七九年一月から毎日新聞の家庭欄に月

二回連載を続けてこられ、その三年分をまとめたものが本になったのだ。連載は町の公民館で働く自分の暮らしの周辺に視点を定め「人にふれ、ことにふれて心にとまるものがあつたとき、なぜ自分はこのことに心をとめたのかと書きながらたぐり出し、確かめ——『こんなふうに読んだ』と応えてくださる方々とのふれあいによつてもう一度自分を確かめる」歩みだったという。「ふれあいの中から」というタイトルそのままに、伊藤さんの暮らしの中のふれあいや読者、担当記者とのふれあいを糧にして生まれた本といえる。

伊藤さんが大切にしていることは、「人とのかわりの中で自分を生かし、育てる力をつけるには」ということで、社会から切り離され、閉鎖的になりがちな女たちが育ち合うには——ということに共同で取り組んでいることだ。〈夫の転勤〉や〈女の長電話〉に題材をとりつつ、女のおかれた状況をていねいにときほぐし、せまい、限られた生活圏・人間関係の中で育ちそびれの様相を示すおとなの女たち、そしてそのまわりの子どもたち、男たちの構造を解き明かしていく手腕には、いつもながらうならされる。

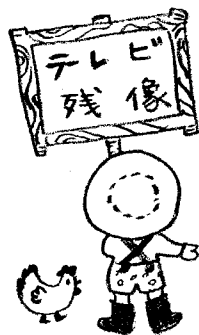
うならされるのだけれど、そのあとの胸の中のわだかまりのなさ、むしろあたたかくひろがるおもいは、伊藤さんがいみじくもおっしゃっているように「ふだん面と向かってはいえない身近な人たちへのラブ・レター」であるからだろう。求め、呼びかける伊藤さんのおもいが、その視点・姿勢の中に貫かれているからこそ、私たちに確かに伝わってくるものがある。

こんな関係のあり方を、女たちの学習活動の場だけでなく、あそこにも、ここにもひろげてゆけたら——と思う。

伊藤雅子著『ふれあいの中から』

筑摩書房・九八〇円

野村 康子



の恐しさだけでも子供に伝えたいと身をもむような思いでいる時に、山田太一『終りにみた街』(中央公論社)に出会った。一気に読んで子供にも話してきかせた矢先にドラマ化され、期待をもって観た。

「立ち止まらないで見て下さい」さすがに小声の注意だが、係員に促されて、ノロノロ人波が動く。夏休みのせいか子供を連れだした母親が多い。人々の視線の先には、高熱で変型した瓦、瓶、弁当箱の中の炭化した真黒な米飯、瓦礫に埋もれる頭骸骨……壁面には二発の原爆がもたらした惨状を凝視したパネル写真が続く。

だが、どんなに詳細な説明を読んでも、どんなに深い思いをこめられた遺品を見ても、私が、広島、長崎のあの焼かれ殺された人々の恐怖、痛み、渴きを体験することはできない。私たちはよく「痛みを分かち合う」とか「相手の身になって考える」とか簡単に言うけれども、本当にそんなことが出来るのだろうか。展示場の人混みに倦み疲れた十歳の息子が、一応「戦争はいやだ」と感想をもらしたものの、その心は早くも玩具売場に飛んでいたのを責めるわけはいかなかった。しかし、「ヒロシマの現実」に学んで、未来の核戦争への想像力を強化し、それをふせぎたい(大江健三郎)と心から願う人間の一人として、なんとか戦争

S.F手法をとったこの作品、現在を生きる清水要治一家と宮島敏夫・新也父子がある朝突然に昭和十九年の日本に投げ出される。日本の敗色は濃くなっているのだが、一般民衆は、大日本帝国の勝利を固く信じ続けていた時代であり、かつ、あと一年余で敗戦を迎えるという時点へ。驚き戸惑う彼らを勇気づけるのは一冊の歴史の本だ。彼らは何処に爆弾が落とされ、何処が助かるかを知っているし、日本の敗戦も、ケネディもレーガンも知っているのだ。だが彼らは自分たちだけが生きのびることを潔しとせず、三月十日の東京大空襲を「予言」し、多くの命を救おうとするが、非国民呼ばわりされ、殴られる。非行少年だった新也は、軍国少年となり父親を激しく非難し、要治の娘も息子も反戦的父親を批判し、「みんなと同じように学童疎開をしたい」とさえ言う。子供たちの反乱の最中に被爆。「そんなはずはない、歴史とは違うではないか」。崩れ落ちた東京タワー、高層ビル街、国会議事堂。要治がその生涯の終わりに見た街は、私たちが由らないオプティミズムによって必死に否定しようとしている未来の日本の姿だった。

自ら脚色した山田太一は、このドラマのプロデューサーを「勇気ある人」と言い、「いかに今、ドラマの企画の許容の幅が狭いかを改めて感じました」と述べている。

二時間ドラマに圧縮したことによくは由来すると思われる弱点——戦時下の日常生活の描き方におけるリアリティの欠如、自由と民主主義の教育を受けた子供たちが、ごく素直に愛国少年少女に変身する過程が描ききれていないことなど——があるとはいえず、今のテレビ界のありように挑戦して、人類の生き延びる道を暗示したスタッフの姿勢に私は光明を見たい。(脚本山田太一、日本テレビ)

秋に想う

夏が過ぎ、秋が来るころになると、私はいつもわびしさを感じる。冬になるとそれは、あきらめに変わってしまう。「今年も半分以上たってしまった。何にもしないうちじまた一年過ぎてしまうのか」という気持ちだが、一瞬私を苛立たせるのだ。

今年はこのをやれたからすばらしい年だった、と思えたのは十代のころで、それからは思いどおりにならなくなった。人間はある程度情性で毎日を生き続けているのかもしれない、とこのごろ私は気がついた。そういうふうには生きてくれないと思いつながら、流されていってしまう恐しさ。

今年も日々のとりとめのないことに追われてふと気がつく、あのわびしさを味わっていた。でも、よく考えてみると私のような重度身障者は、よい就職も得られず、すばらしい伴侶にもめぐり会えず、いつもわびしさをかみしめているのだ。それは季節にかかわり

栗原 実抄

なく、霧のように立ちこめて、私たちを包んでいる。霧はほんのちよっとした抵抗で、晴れるときもある。しかし、また少しすると立ちこめるのだ。わびしさの霧に包まれながらも、皆明るい顔をしている。そんなことに負けてなるものかという感慨が、どの顔にもあふれている。

去年もその前の年も、秋が過ぎると気が抜けたようになつた。一昨年は、九十枚の原稿を仕上げ、徹夜を二晩ほどしたので、一時身体の具合を悪くした。某新聞社が、女性が書いた「ヒューマン・ドキュメンタリー」を募集していたので、勉強のつもりで応募してみたのだ。八月の初めに書き始めたのだから、九月末日の締め切りまでに九十枚を仕上げたのは、かなりきついことだった。それに関する自分のことを主題にして書いたもので、なかなか進まなくて困った。結局、私の応募した原稿はボツになった。

去年は、十月に車いす市民集会在大阪で開催されたので、それに参加して三日間女性障害者の問題を考える分科会で、様々な意見を聞

いたり、発言したりもした。全国から集まる障害者の抱えている悩みはあまりに多く、とても三日間では結論を出しきれないような感じだった。

この春ごろまでは、私は小説を書いて新人賞をねらうつもりだった。しかし、途中でやめてしまった。中断しているといった方が、より正確かもしれない。題材がやはり自分のことだったので、書き渋っているところがある。この冬あたりから、また少しずつ書いていきたいとは思っているのだが……

秋になるとセンチメンタルになる人が多い。夏の暑さから解放されて、ホッとひと息つけるからだろうか。木の葉が落ちるのを見て、無常感に襲われるのだろうか。人は時々過去をふり返り、自分は何をしてきたか、と思つてみる。自分の生きてきた道は引き返せないのに……。何事も悔いなく生きるということは、何と難しいのだろうか。全て自然のままにいられたらと思う。



「K子さんのね子たち

貝柱とコーンスープ

さとう けいこ

ミミ子はわが家の自慢の娘であった。何しろ好き嫌いなくよく食べよく育ち、手のかかることなどそれまでに一度もなかったのだ。

成長の証しか、満一歳になる一か月あまり前に四匹の子猫を生んだが、その時も文句なく安産だった。ゆかいなことにこの時チー子

が十日ばかり前に出産するためにダッボール箱へ入り込んでそこで産んでしまったものだから、ミミ子はどれが自分の子猫か判別できない。一箱に八匹の子猫では狭かろうと別の箱へ移してやったら、何とチー子の子どもまで連れて行ってしまいうではないか。いくら子猫を別々に分けてやってもきかないので、私もあきれて八匹をミミ子にあずけてしまった。

八匹の子猫にお乳を吸われたミミ子はしばらくですっかり目が回ってしまつて、もう私がチー子の子ども

どっちの親猫からもお乳をもらっている光景を見かけた。親猫も子猫もそれがごく自然であつた。

を連れ出しても抵抗しなかった。こんなことがあつたためか、後々まで、チー子の子どもとミミ子の子どもは、

□ □ □
こんな元気なミミ子も、半年足らずの間に二度、九匹の子どもを産むのは身にあまる負担であつたことだろう。ミミ子をバスケットに入れ病院に運びながら、私は多産なミミ子の不運を嘆いた。お医者さんの予想に反して病状は好転せず、二か月が過ぎた。そのころからミミ子の食欲が減退し、口の中が痛いのか堅いものを受けつけなくなった。

好物は貝柱の缶詰とコーンクリームスープくらいになり、私は少しでも値引きしているのを見ると貝柱の缶詰を買ひ求め、スープは毎週一週間分を買ひだめた。そして、この好物でミミ子を引き寄せては、つかまえて注射に通つたものである。しまいにミミ子は条件反射のように貝柱を見ると逃げ出すようになってしまつた。

五匹の子猫はそれでもどうやら元気に育つてはいたが、夏子（夏生なつうままれた猫）は育ち難い、と言われる通り、一雨降つて寒くなるごとに、肥るどころかやせてしまうように見えた。

年の暮とともに、ミミ子はすつかりやせおとろえてしまひ。腫瘍は小さくなつたものの、体力は限界にきているように見えた。「早く子猫をよそにあげて下さい」。再三獣医さんから注意を受けたが、なかなか行先が決まらず、ようやく暮もおしつまつて四匹もらつてくれるお宅があつた時は、天の助けと思ふほどだった。

子猫の世話から解放されたミミ子は一息ついたようである。あまりの衰弱ぶりに私は治療をあきらめ、ミミ子に最もよく似たフミ子をミミ子の形身に残そうと決心した。

しかし、病の峠はもう越していたのか、家に寄りつかなくなつたミミ子が正月を過ぎてコタツの側へ寄ってくるようになった時、すでに三度目の妊娠をしており、これがミミ子の病気を一気に回復へ導いていたのである。



私が私に与えた二頁を、今ほど恨んだことはない。これまでも、到底書き尽くせないとの自己規制から、書かねばならない内容を切り捨ててきた。その欲求不満もかなりふくれ上がっている。でも今回が一番きつい。最低四頁なければ、私の思いは伝えられない。私には原稿用紙が頼信紙に見えてしまう。

事の始まりは、九月十日の「女の自立と老い」を考えるシンポジウムだ。午後一時から九時すぎまで、堰を切ったように語り合われた諸問題。そこで頭の芯にこびりついてしまったことを抜きにして、家事労働を語ることはできないのだ。ふくれ上がる問題意識——それなのに、またしても針でつついたようなことしか書けないのがつらい。

◆ 本人のたつての希望で、義母を老人ホームに入れたものの、「母の日」も「敬老の日」もわが家では禁句になってしまったと声をつまりさせた人がいた。ホームから行事の案内が来ても、一度も面会に行けなかった。お姑さんは、ホームも気に入らずもどってきて、以後「じゃあ、わたしはホームに行くよ」を切り札にしているとのこと。私の心に響(こも)りが下りた。たまりかねたように老人ホーム

の職員が「せめて行事の時ぐらい、家族は来てほしい」と言う。

老人ホーム行きが決まるまでの長い長い家族間の葛藤。そこまでは皆の前で語り得ないお嫁さん。それぞれの家族が重い問題を抱えていると知りながら「時には面会に来て」と訴えざるを得ないホームの職員——。十八年も介護している人、四人目を介護している人……。語るもため息、聞くもため息。

介護の精神的・肉体的苦痛を味わい尽くし、同じ苦勞を子供にさせたくないのに、呆けたり寝こんだりしたら施設に入れてくれと書置きした人、施設って、老人病院って、どんな介護をしているか知ってるんですか？ と言う人。ポランティア十年の体験者は「私たちは働く女性や行政の下請ではない」ときっぱり。では、われらは「野たれ死研究会を作りたい」人と同志になるよりほかないのか？

これでもか、これでもかといきつけられる事実にうろたえた。でも、一番やりきれなかったのは、看取る苦勞、老いの悲惨、それらがすべて女性のものとの暗黙の了解の上にシンポジウムが成り立っていることだった。男性だけの老人問題シンポジウムが開かれたとしたら、その話題は大分異なるのであろうから。

誰が一番苦勞したかを競うコンクールではないはず。樋口恵子さんがよく言うように、「老いたるライオンを看取る若きライオンなんて地球上にいない」。老人の看取りは、人間だけがする最も人間らしい行為なら、それがどうして悲惨な苦勞話になるのか？

一つには、看取る者、看取られる者の人間関係があるだろう。女は実父母の介護がままならず、アツレキのあった義父母の介護に当たることが多い。その上夫は、息子でありながら、すまして親の介護を押しつける。これがやりきれなさを増幅しているのだ。

必死で思い浮かべようとした。人生の最後を落日のごとく美しく染めた人々のことを……。そして考えた。呆けを明日のわが姿かもしれないと言いきかせるからこそ、おびえるのだけれど、七〇年、八〇年の積み重ねが老いの日に現れるのなら、平安な最期は、何によって可能かを話し合うことこそ大切ではないか。でも、それは私が呆け老人を看取った体験を持たないからだろうか。それなら、私は、家事労働をしたことのない人が、家事労働の評論をするのと同じ誤りを冒しているのだろうか。

私は、本来なら心をこめて家事をし、くらしをいとおしみたい人間だ。仕事に打ち込むために、やむを得ずはしょっているけれど、私自身それでよいとは決して思っていない。細やかな心配りで家事をした母に育てられ、人間が生きることにしかかわる営みは、決して雑事ではないばかりか、くらしの文化を生むものとしてらえてきた。母の世代では、それが主婦の仕事であったのに対し、私は一人の人間にとっての必然と考えることが異なるのだけれど……。家事をくらしの文化と結ぶのは、私が生きたいとする仕事を持ち、「家事を目的とせよ」と誰からも強制されていないからなのだろう。

だが、Weの神奈川の会で「夫に気持ちよく料理をさせる法」が男たちから出た時「あつ、それは違う」と叫んでいた。私だけではな。仕事と家事を両立させている女たちが一斉に声を挙げた。

家事とは料理・裁縫・洗たく・掃除・育児・介護などの言葉では言い現せない、無数の名もなき仕事で成り立つものだ。気の向いた時、気嫌のいい時だけ「してくれるお料理」で、女の重荷が軽くなりほしくない。ベテランは、幾つもの仕事を組み合わせ滑らかにこ

なしていく。そこに未熟練者が闖入することは、リズムを狂わせもするのだ。でも女は、子供にお手伝いをさせるのと同じ教育的配慮で、男を育て鍛えるために、じつとがまんしていることもあるのだ。

れっきとした名のある家事の間を埋める、名もなき無数の家事、それがあって初めてスムーズな流れが生まれる。それは、妻と全く同じことを全部やってのけた体験を持たぬ夫にはわかりっこない。どんなに理解があり、協力してくれる夫であろうと、家事は妻の女の仕事という意識を崩さぬ限り、決して五分五分にはならない。

私は、家事はくらしの文化を生む、と書いた。それほど価値ある営みを、多くの主婦が桎梏と感じ、たまらない虚脱感に陥るのは、家事を女の仕事と決めつける背景が問題なのだ。これが女性差別と抜き難く結びついていて、女性蔑視が家事蔑視となるからだ。

家事労働に手を染めなかった男たちは、何よりも自分が人間として歪んだ存在であることを知らなければならぬ（自分が生きたために当然行すべき労働を、誰かに押しつけている点で同罪の女もいるが）。無数にあるこま切れ家事を一身に負い、遠慮会釈なくやりかけの仕事を中断させるセールスマン、電話、ご用聞きに応待し、一人一人異なる家族のスケジュールに合わせていつも待機し、自分を捨てなければ一日も過ごせない生活。若い時には育児、中年すぎからは介護。誰の手代わりも得られぬ女たちが、九月十日、うらみつらみを吐き出した。さて、そこから何が生まれるのか？

つまらない雑事ゆえに、男も家事をやれ、ホトホト疲労こんぱいした故に夫も介護をしてみる、ではなくて、人間として当然の行為故に、人間としていっそう豊かになるために、男も女も、家事・育児・介護を、との波を起こしたい。

わたしの家庭科通信

(岡山市立可知小学校・国末敏子)

【家庭科だより】

No.3 57年6月 可知小学校



5年生は 整理 整頓、6年生は ごはんとお汁の学習がおなりました。
 学校で学習したことが 気持ちや くらしを よい方へ動かしているでしょうか。机の上の
 整頓とか 自分からそうおこなうとか ぞみをかにつけるとか、米を洗うとか 何かの形であ
 りればはめるとよいですね。ノートには 家庭で実際にしてみたことや、いっしょに食べた
 おいしいといってくれたこと、などと共に ご家庭からの ご意見も 書かれていて 参考にさせて
 いただいています。

う は 5年6年どちらの衣服の学習に入っています。
 5年生の男子が こんなに針と糸を はうすに使えるとは
 思っていなかったと。これは うれしいおとろきです。
 むしろ 早正しくできた人が 男子であった例が多いのです。
 おそらく、からがや手先を使う 経験が多かったか、
 少なからずかということや、話を聞いた時 図を見たりして
 理解する力とか おおむね正しくやりとげようとする力が
 ほとんどもあって できていくのでしょうか。何よりも新しい
 経験にためらわず チャレンジする力において 男子が
 まわっているからでは。あとは やればやるほど上達
 していきます。

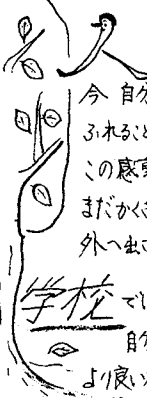
教室スナック

「ぬぐな」
 「体操ズボンをはいてい」
 「ほくも のて見にう」

学生ズボンのうしろのほくも
 をぬって帰ろうとしている友だちを
 見ている話声……

A君 ついに めって帰りました。

先生、黒板けしがやぶればのを
 はおすから 布をください。



として生まれて十年 人類の進化の歴史を かけ足で学んで取ってきて
 今 自分の手に 針(モノ)を持って (モノ) 使えるほどに 成長してきました。
 ふれるとの少なからず男子であれば なおさら 感動は大きなものがあります。
 この感動を大切に育てていくために、その意欲と行動力を取り上げました。
 まだかかされて外へ出ない自分の力を より良い方向へ伸ばそうとする ねがいと勇気づけ、
 外へ出させるエレジーに せまよう。

学校

では グループを作り 役割を決めて学習をすすめています。|人|人|
 自分の仕事の責任をはたすことで グループ全体に 役に立てることに気づきはめれた。
 より良い 社会をささぐための 活力をもった子どもたちが 今からも育てほしいと願っています。

☆☆報告——

第一回女性による

老人問題シンポジウム☆☆

人間って自然のほんの一部にすぎないのだから、「生」「老い」「死」はだれでも通る営みと思っっています。「老い」は、一時、一時を過ごす中で成熟と共にきざまれ、あまり自覚はしないけれど、だれにとっても身近なことのように思います。

九月十日、新宿文化センターで開かれた第一回女性による老人問題シンポジウムに参加してそんなことを考えました。主催は「女の自立と老い」を考えるシンポジウム実行委員会。第一部の分科会は「家庭の老い」「老いを考える地域づくり」「なぜに貧しい女の老後」からなり、第二部はシンポジウム「女の自立と老い」を考えるでした。

発起人代表の樋口恵子さんは「なぜ女たちが集うか。それは老いのみとりが女性に任せられているからだ。老いのみとりは人間のみがすることだから、より男もかかわっているのではないか。老いをよりよく知っているも

のが語り合うことによって老人の問題がときほぐされていく」と呼びかけました。

私が参加した「家庭の中の老い」分科会では、「私だけがたえればよい」という良妻賢母主義的考えをとっぱらってぶちまけよう。

老人問題はそこから出発する」という司会者の言葉にはじまり、まず、みとる側、みとられる側の現状がはき出されました。

80年一月に京都で発足した「ボケを抱える家族の会」会員から、「老人介護退職したもへの職場復帰を」に始まり「83歳の父と同居したが、性別役割分業で生きてきた人間の老いをみる思い。子供の頃から老人の形が決まっているのではないか」「一か月に一回でもよいから預ってくれる場がほしい。あるとただで気楽にみとることができ」「医者」の不要な言葉でリハビリを受ける意欲を失わせることがある。高齢者を受け入れるリハビリ病院が少ない」「遠くに住む夫の親がたおれた時、経済的余裕があるので付きそいをつける予定だったが「子供がみとるべきだ。おれは仕事があるからお前が行け」と夫がいう」「テレビの描き方でも一方的に病院介護に不信感を持たせるもの」と次々に発言が続きました。

又、みとった人は一様に「私はボケたら絶対に施設にはいる。家族に迷惑をかけたくない」と言い切っていました。

現に今、介護で疲れきっている人たちの訴えを聞くと、救いになる施設が色々な形で作られることが望まれます。そしてそれは、急を要しているのです。

でも「絶対に施設に入る」と言い切られると、いきづまってしまい、ちょっと悲しい気もします。

私は父や母をみとってあげたいと思いません。というより、それを素直に言い合える親子の関係でありたいし、つくりたいと思っっているのです。又、自分がどう生きて「老い」を共にするかを考える時、親子間ばかりでなく、地域の中での関係、男女の関係も含めた豊かな人間関係をつくりたいと思うのです。

他人と生きられる力を育てる教育が重要だ」という会場からの発言は「老い」がみとる、みとられる時だけの問題でないこと、又、当然、男も女もかかわっていくことだということを指していると思えます。

今、自分の老いのイメージはない。でも改めて考えた時、いかに今一時の過ごし方とながっているか気付きました。(馬場洋子)

Watakushi kara Anatani

▼「指」という雑誌、ご存じですか？そこで田川建三という秀れた神学者が、家事と男の自立について、シリーズで短文を書いています。

以前、夫が言ったことがあります。「家事育児を本当に男が女と半々に分担するのが当然になったら、今までのように、一日24時間全てを研究のために使い尽くすような男の研究者は存在できなくなるだろうな。研究者としての人生をとって、子供をもったりするのをあきらめて、ひたすら秀れた研究成果を得ることのみに没頭するのではなければ、達成できない部分というのがあるのではないかと思います」。

私としては、そういう研究者が、家事育児を生活の中に当然のこととして持つ

ていく時に、これまでの男の秀れた研究者が持てなかった視点からの発見や掘り下げができるかもしれない。そういう可能性を信じたいと思いましたが、反面、夫が言わんとしている中身も否定しきれない気持が残っていました。

と子供たちとで一緒にうどん作りをし、父母も応援にかけつけてくれ、おいしいおいしい、と味わったのです。

生き方を、とてもさわやかだと思えました。戦争の記憶はるかなあなたの幼児期のペールの中、という私たち世代は、自らの体験から生み出す声を持たないので、今生きる社会の状況にせいっぱい敏感になるしかないでしょう。ダイ・インもその一つの表出、といったところではないでしょうか。

言う時、一例として田川建三氏の神学者としての研究発表のレベルを頭の中に描いていただろうことは確かなのです。

その田川氏が、男も妻への協力としてなんかではなく、自分自身のために家事をするのは当然のことという基本姿勢で、神学的小論文等をのせる小雑誌にシリーズとして家事を取り上げだしたので、ぜひ読んでいただきたいな、と思います。(北海道 山口里子)

後パン工場見学に行っています。もちろん小麦(原麦)を穂ごと見せ、石うすでひき、粉を作り、粉と小麦との関係をつかませ、そしてパン作り、という流れでした。

▼うつろいゆく空の雲が、しだいに淡く薄くなって、秋の訪れを感じさせます。沈みゆく日の染め出す夕焼けが、心の中にしみこんでいきます。

▼毎月楽しみにWeを待っています。名取氏の「うどん作り」(七月号)を拝読いたしました。四年前の社会科の授業を思い出しました。小学校二年生、五クラス担任

▼私の見つけた小麦粉という映画も、日清製粉晴海工場から借りて、子供たちに見せました。楽しい授業でした。その子たち、今四年生です。(東京都 鈴木まき子)

▼毎号Weをととも興味深く拝見しています。本全体が時代のリトマス試験紙みたいなもの、という感じですよ。八、九月号の「たった一人の反戦」、とても心にしみました。自らの原点をゆるがせにしな

す。私としては、そういう研究者が、家事育児を生活の中に当然のこととして持つ

ていく時に、これまでの男の秀れた研究者が持てなかった視点からの発見や掘り下げができるかもしれない。そういう可能性を信じたいと思いましたが、反面、夫が言わんとしている中身も否定しきれない気持が残っていました。

と子供たちとで一緒にうどん作りをし、父母も応援にかけつけてくれ、おいしいおいしい、と味わったのです。

生き方を、とてもさわやかだと思えました。戦争の記憶はるかなあなたの幼児期のペールの中、という私たち世代は、自らの体験から生み出す声を持たないので、今生きる社会の状況にせいっぱい敏感になるしかないでしょう。ダイ・インもその一つの表出、といったところではないでしょうか。

Watakushi kara Amatani

Weを支える人たちは合宿に参加できなかった人たちに
よっても、厚い大きな層と
なって存在しているという
ことを思います。

半田さんが創刊号で「I
の拠点としてWeを創る。We
の中のIとして生きる」と
書いていらっしやいました
が、武田秀夫さんのお話は
それと相通じるものだ、と
思いました。

永畑道子さんのお話も、
心に刻みました。永畑さん
のお話があるというので、
合宿に行く前に、あわてて
『炎の女』を読みました。

(東京都 落合仲江)
▼Weの合宿、参加してとて
も良かったです。ありがと
うございます。もともと出
不精で、そういうのは苦手
中の苦手でしたけれど、い
ろいろなすごい人を知り、

私もおそまきながらがんば

ろうと思っています。

Weで知った「声なき叫び」、東京
での上映の時には見に行けません
でしたので、十月二十一日に、藤
沢市民会館で上映することにしま
した。神奈川県Weの会の方にも呼び
かけ、多くの人と(特に高校生や
男の人も見に来てくれたらいいの
ですが)見て、映画の後、感想会
を持ちたいと思っています。

(神奈川県 中村美和子)

▼合宿は、一日半という短い時間
でしたが、とても楽しく充実して
いました。永畑道子さん、武田秀
夫さん、お二人のご講演では、い
ろいろな問題が投げかけられ、考
えさせられました。永畑さんがお
っしゃった「今、自分に何ができ
るか」ということが、強く心に残
っておりまます。ここぞうかがった
お話、話し合われたことなど、こ
れからの地域のWeの会で、又考え
を出し合い、深めあえたらと思っ
ます。

子供を連れての参加で、皆さん

のお邪魔になったのでは、と心配
していましたが、「今回の合宿は、
子供もいて、子供と一緒に参加す
るあり方も知ることができてよか
った」と言ってお下さる方がいらし
て、うれしく思いました。子供た
ちは、皆さんに遊んでいただい
ても喜んでいました。

もっとも時間があった、た
くさんの方たちとゆっくり語りあ
えたら、もっとよかったのに、と
残念ですが、一年間それぞれの場
でがんばって、又来年お会いでき
たらすばらしいですね。今度は、
もっと多くの友人に声をかけて、
一緒に参加したいと思っております。

(東京都 蔡和美)

▼今年は海でやけず、合宿で夏ら
しく黒くなりました。おもしろい
合宿でした。それぞれがまったく
自由勝手に合宿を解釈して、それ
なりに違和感なく過ごせる会は、
めったにあるものではないと感じ
ました。(東京都 山川みづほ)

▼うっとうしいような日々ですの

に、教科書問題、参議院問題など
政治もまた、うっとうしい限りで
す。Weの合宿でその辺のモヤモヤ
も吹きとばしたいのですが、残念
ながら、都合がつかせません。御成
功を心よりお祈り申し上げます。

昨日、私の友人の渡辺慈子さん
より電話があり、「Weね、はじめ硬
そうだなんて思っていたのだけれ
ど、じっくり読んでみると、本當
に考えさせられるいい本ね。あな
たにそれが言いたくて……」と言
って下さいました。彼女も福祉に
関心深く、自宅に老人夫婦を下宿
させて面倒みておられます。「福祉
の谷間のような仕事なのよ」と、
大分苦労しておられるようです。

(埼玉県 石川尚子)

▼Weますます充実し、楽しみで、
いつもそばにおきたい本。必ず一
冊はかばんの中に入れ、何度も読
み返しています。何度読んでも新
鮮で、どの頁も光っています。

(宮城県 西原典子)

＜資料＞

労働省に

「男女平等法制化準備室」発足

労働省は、7月16日「男女平等法制化準備室」を発足させた。同準備室の概要は以下の通り。

1. 構成

男女平等法制化準備室に室長、次長3人、主査1人及び室員をおく。

- (1)室長は、大臣官房におく審議官のうち、労働大臣が指名するものを充てる。
- (2)次長は、内部部局の課長のうち、労働大臣が指名する者をもって充てる。
- (3)主査及び室員は、労働省の職員のうちから労働大臣が指名する。

2. 所掌事務

男女平等法制化準備室においては次の事項についての調査、企画及び立案並びに連絡調整に関する事務を行う。

- (1)雇用に関する機会及び待遇についての男女別取扱いで妥当性のないものは是正を図るための法制の整備に関すること。
- (2)労働関係法令中の男女別取扱いを定める規定の改正その他の整備に関すること。
- (3)育児休業を促進するための法制その他の制度の整備に関すること。
- (4)その他雇用に関し男女の機会の均等及び待遇の平等を確保するための制度の整備に関すること。

同準備室は、労働省婦人少年局に置かれ、人事は以下の通り。

室長 白井晋太郎 (大臣官房審議官)

次長 野崎 和昭 (監督課長)
佐藤ギン子 (婦人労働課長)
稲葉 哲 (雇用政策課長)

主査 松原亘子 (大臣官房政策課システム分析室長)
その他、室員6人が労働省職員から選ばれ、全体でプロジェクトチームをくんですすめる。

5月8日、男女平等問題専門家会議(労相の私的諮問機関)から出された「雇用における男女平等の判断基準の考え方について」の報告結果が、婦人少年問題審議会で検討中だが、この男女平等法制化準備室は、同審議会の事務局として機能する。

労働省が雇用平等法へ向けて積極的にのり出したあらわれ。 (「婦人展望」9月号より)

☆女性のための手帳各種発刊

男性用の手帳の小型版とか、表紙の色を変えただけで「女性向け手帳」とされている既成の手帳に飽き足りないあなた。生き生きと行動する女性にとって真に使いやすい手帳をとの願いから、くふうされたものをご紹介します。①定価 ②特色 ③予約先

- スケジュールノートBook ①一、二〇〇円
- ②見開きで一週間、スケジュールが書き込みやすい大きな余白、記録誌、日記にも
- ③エディション・ミロ (03・401・8248)
- 働く女性の手帳 ①八〇〇円
- ②使用頻度の高い電話番号のリスト、地下鉄マップ、先輩女性からのメッセージ
- ③サンパティック (03・240・2141)

- ネットワークノート ①七五〇円
- ②SOSニーズに答え、各種相談機関、女のグループ、ミニコミ誌など巻末に特集
- ③グループ366 (03・267・6741)
- Woman's Diary ①一〇〇〇円
- ②からだ、労働、女たちのグループ等の情報を一週間ごとに、電話、地下鉄マップ
- ③グループエス・アール (0425・271650)

あ・ん・て・な

★教科書検定問題 続★

8月26日発表の、教科書是正を明記した「政府見解」に対し、27日、韓国政府は「政府見解」の原則的受け入れを決定。だが、中国は「具体性を欠き、同意できない」と拒否回答、「即時果敢な是正」を重ねて要求。「政府見解」についての補足説明が断続的に行われる中、9月9日、中国、韓国とも「再説明を評価する」との見解を表明、外交問題としては收拾する方向を確認した。

教科書の歴史記述の具体的は是正措置を検討する教科用図書検定調査審議会（文相の諮問機関、会長・名取礼二・東京慈恵医大学長）の第2部会（社会科部会、部会長・大石泰彦・東大教授）会合が14日、東京・霞が関ビルで開かれ、小川文相は「歴史教科書の記述に関する検定のあり方」を諮問、「学校教育においてアジアの近隣諸国との友好親善の精神がとりわけ重視されなければならない」と強調。具体的な諮問事項は①アジア近隣諸国との関係についての歴史教科書の記述、特に近現代史記述に関する検定の基準のあり方②審議会の答申の趣旨を検定に反映させるべき時期、の2点。

これに対し大石部会長は「宮沢官房長官談話の枠に制約されることなく納得のいく結論に達することを心から望んでいる」とあいさつ、政府の対応に不満を表明した。「著者の結集を」と結成準備を進めていた「社会科教科書執筆者懇談会」（代表世話人、佐々木潤之介・一橋大教授）が9月4日、東京の私学会館で発足集会を開催、問題個所の正誤訂正を文部省に求めていくことを確認した。（毎日、9・5～15付）

★ベビーホテルの利用状況★

9月6日、労働省は夜間保育や宿泊保育を伴う無認可の民間保育所（いわゆるベビーホテル）の全国調査結果をまとめた。利用している母親の家族状況、職業、意識などを調べたもので、対象は全国で約2000人。

利用者の96.1%は有職者で、年齢構成は「25～29歳」38.3%、「30～34歳」37.0%、「24歳以下」11.8%。

職業別では、「水商売、美容師などサービス業」42.8%、「一般事務員、タイピストなど事務職」20.5%、「小売店主、セールスなど販売業」17.5%、「教育、看護婦、マ

スコミ関係など専門職」14.1%。働く理由は「家計補助」「自分と家族の生活を支える」など。

子供を預け始めた年齢は0歳50.0%、1歳26.0、2歳13.5%。「生後2～5か月」からは全体の3割弱を占める。

利用理由は（複数回答）、「自宅や勤務先の近くにある」「保育時間が長い」「夜間保育がある」「年齢を問わない」「日曜・祝日も預かる」。保育時間は平均8.6時間、週5日間預ける人は68.5%と最高。週5～6日預けている人（80.1%）のうち1回の保育時間が「24時間以上」は0.4%。

1日のうち一番多い保育時間帯は、昼間（午前7時半～午後9時）44.1%、深夜（午後10時～翌日午前5時）35.1%。

（毎日、9・7付）

★高まる女性の就労意欲★

労働省は、'81年中に労働基準法に定められた女子保護規定が守られているかどうかを調査、9月13日まとめた。対象は全国の従業員30人以上の約1万事業所。

昨年1年間の妊娠、出産退職者は、妊産婦全体の21.7%。'65年49.3%、'71年46.9%、'76年38.7%、'78年36.7%と年々低下傾向。

産前、産後の休業日数（最低各6週間）の消化状況は産前38.5日、産後48.8日で調査ごとに増加傾向。

生理休暇の請求者は13.4%（'65年26.2%、'71年、22.8%、'76年16.6%、'78年16.0%）。請求者1人当たり年間平均5.8回の休暇請求で、年間7.7日休んでいる。

これらの結果に対し、同省婦人少年局は'65年ころから出産定年制をめぐる民事裁判で女性側に有利な判決が相次ぐなど職場の男女差別の解消、女性の就労意欲が高まっているためとみている。（毎日、9・14付）

★五政党の婦人政策を聞く会開催★

9月16日、上記の会が参議院議員会館で開催された。主催は国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会（加盟48団体）。

育児休業法案、母性保護と雇用平等法案、パートタイマー対策、臨調基本答申と婦人関係対策、家庭科の男女共修問題について各政党の政策を聞いた。家庭科の男女共修については民社党の「高校は男女とも選択」を除き他党は男女共修。出席は自民・石本茂、社会・田中寿美子、公明・柏原ヤス、民社・加藤綾子、共産・山中郁子の諸氏。

十字路

北海道・意外に強い平和意識——道内学生

全国大学生協連道地方連合会が、北大、道大の札幌、岩見沢など四分校、札商大、北海学園大など延べ十二校を対象に、一、二年生を主に九千枚のアンケート用紙の三千八百四十二枚を回収して集計、分析した。

それによると現在の日本は「右傾化している」(46%)、「していない」(19%)、△防衛費を「削減すべき」(50%)、「現状では仕方がない」(25%)、△憲法第九条は改定すべきでない(55%)、△日本に核兵器が持ち込まれている(73%)、△非核三原則について法制定をすべき(64%)、「すべきでない」(11%)、△日米安保条約についてよく知っている(30%)、△日本政府が核兵器使用禁止の国連諸決議に反対または棄権していることを知らない(61%)など。平和意識・現状への危機感強いが、基礎知識の不足が感じられ「ムード的反核」に流れがちで、今後学内PR、平和活動に参加させる企画を打ち出すようにする。(朝日、8・16)

元気がいい社会人四ヶ月

サリドマイドの障害を乗り越えて今春、岩

見沢市役所に入った竹本良子さん(19)の社会生活が四ヶ月たった。良子さんは二歳のと きから乳児園や養護学校生活を送り、現在は障害を持つ人の力になりたいという希望がない福祉課勤務。「周りの人から温かい手をとってもらいやっと一人立ちした。今後はなんでもやってみたい」と。だが、辻典子さんや吉森こずえさんのように自動車の免許を取るのには、スパイクタイヤの交換、雪道の運転を考えるとこわくてイヤだという。

(朝日、8・3)

北炭夕張の閉山提示——二十一日

堂垣内知事は北炭夕張新鉱の閉山提案に関し、安倍通産相に存続と北炭真谷地、幌内の両炭鉱へも支援を要請することにした。また夕張市民各層で構成する「産炭地対策夕張市民会議」は「管財人の一方的な提案は労働者の大量解雇につながり、地元住民の生活を無視した暴挙。提案の撤回や阻止行動を展開する」と反対声明を発表した。

また、全道労協は当面の抗議行動として、二十三日に自治会館で対策幹事会、二十九日は大通八丁目で同新鉱危機突破全道総決起集会を開く。(朝日、8・22、山口里子)

埼玉・埼玉も「情報公開」提言

埼玉県の行政情報公開のあるべき姿を審議していた「県行政情報公開懇話会」(座長・寺沢一東大教授、二十委員)は提言をまとめ、知和知事に手渡した。県は早ければ十二月条例化、来年六月からコンピュータの検索システムで実施の予定。提言では「プライバシーを尊重し、広く県の保有するすべての情報公開の対象とすべきである」としている。

(読売、8・8、村上悦子)

新潟・断ち切ろう！戦争への道

昨年春、市内の公務員、会社員、主婦など十人の女性が「戦争への道を許さない女たちの会」(小川藤子代表)を結成し、夏「みつけよう戦争への道」をテーマに集まった。今年「断ち切ろう！戦争への道」と題し、「せいかい」「こども」「くらし」「おんな」を柱に、軍拡、教育、教科書検定、公害、食糧危機などを考える。講演は「あごら」編集部、斎藤千代さんの「おんなと戦争」、八日、中央公民館で。(新潟日報、8・6、山口久子)

千葉・朝鮮人虐殺 知ろう——船橋の主婦ら

「子供たちに、歴史をきちんと教えたい」という船橋市内のお母さんたちの手で、関東大地震災時の県内の朝鮮人虐殺を記録したスライドが二十八日完成した。つくったのは「三山

歴史サークル」(西沢文子代表)、自分たちの住む新興住宅地の歴史を知ろうとお年寄りの話を聞いているうちに知り、この夏休みに当時の新聞、関係者の聞き取り調査などをした。タイトルは「埋もれかけた記憶を―大震災と朝鮮人虐殺―」。代表の西沢さんは「朝鮮人虐殺がこの町内でもあったと知って、ショックでした。知らされていない真実ってずいぶんあるんですね」と語る。(朝日、8・29)

恍惚の人、実態調査へ―11月初試み

ぼけ老人問題が深刻化しているが、県社会部は全国的にも珍しい県内のぼけ老人の実態を調査する方針を固め、九月補正予算案に調査費の計上を要求、予算化され次第十一月に調査に入る。ぼけの発症の原因などが解明されていないうえ、症状の程度の判断基準も明確でない。県内推定一万五千三百人。対策もお寒いかぎり。今後、相談窓口の設置、特別養護老人ホームの短期保護内容の枠の拡充、既存の援護対策を進めるなどようやく本腰を入れることになった。

(読売、8・27、奥田暁子)

東京・中野区が「非核」宣言

中野区は八月十四日、「憲法擁護・非核都市」を宣言、区役所庁舎に「憲法を生かそう

くらしに 中野のまちに」とスローガンを大書した横断幕を掲げた。住民団体の「憲法擁護・非核都市宣言を求める中野区実行委員会」がさる六月の定例区議会に提出した①憲法擁護と非核都市の宣言②区施設への憲法擁護スローガン掲示③区民の憲法学習への援助―を求める請願が採択されたのを受けたもの。今後は都にも同様の宣言を出させ、非核三原則を条例化する運動を進めていく。

(都民、8・15、仲田香代子)

神奈川・簡単な家事なら何でも

困った時に会員同士が助け合うことを目的とした新組織「横浜ファミリー・サービス・クラブ」が一日発足した。子守、留守番、洗濯、軽い病人の付き添い、掃除、買い物、料理など負担の軽い家事を一時間当たり一律五百円で会員が助ける。有償ボランティアシステム。このようなクラブづくりは婦人の社会参加を促進するため労働省が呼びかけ、既に一都十三市で誕生している。同クラブ事務局は横浜市教委社会教育課内にあり、婦人に限らず男性の入会も呼びかけている(電話045・242・7515)。

(神奈川、9・2、皆川鎮枝)

愛知・10校で国籍差別―県内私立高

在日韓国居留民団県本部は二十三日、名古屋とその周辺の私立高校32校のうち10校が外国人の子弟の入学を認めず、また、7校が校長の推薦状を必要としたり、日本人の子弟六人以上受験した中学には韓国人一人の受験を認めるといった条件つきという差別を発表した。各校ともたてまえは「差別はしていない」というものの父母からの訴えや中学教師らの証言で調べたもの。同本部は仲谷知事に行政指導で改善させるよう要望した。

(朝日、8・24、山田和枝)

熊本・県教委に要請書―教科書問題で

県高教組、日中友好協会県本部、日朝連帯県民会議など八団体の代表十人は十三日、国際問題化している教科書検定に関して県教委の見解を求める要請書を木下県教育次長に手渡した。その内容は①政府・文部省に諸国からの抗議を受け入れ修正に応じるよう要請されたい②政府・文部省に教科書検定制度の再検討をするよう要請されたい③今回の教科書問題について県教委の見解を明らかにされたい―の三点(県教育委員長と教育長あて)。同要請に対し木下次長は「教育委員長と教育長に伝えます」と答えるにとどめた。

(熊日、8・14、中山そみ)



◆夏休み半ば、私に三人の男の子があることを知ったかつての父の同級生から、養子を申し込まれた。今さら子供に何を望むのか理解できない。わずらわしさや心配などを引き受けるかわりに、小さな喜びを与えられる日常生活か。老後のめんどろを見てもらうつもりか。財産の管理や先祖のおまつりか……。

◆アメリカでは選択家族というのが増えていて、そのうち養子もその一種だろう。が、子供が独立を考える時期に再度相互選択のチャンスを残して、初めの縁組をすべきではないだろうか。

◆さまざまな人と調和できる自分をつくり上げるか、孤独を抱きながら自分を守っていくか、九月十日老人問題シンポジウムに出席して考えたことです。(中野)

♣9月17日、We 湘南の会でのこと。「We の人たちと話している、自分の悩んでいることなんて、たいしたことはないんだ、と思えてくるんですネ。そして楽しくなるんですよ。大学時代、韓国籍のため教員の資格をとれなかったYさんの言葉。」

♣同18日、We 城北の会でのこと。荒川土手での右翼の動きが激しくなっているなど話していた時、10月号執筆のS美さんが、「今日は、満州事変の始まった日。私たちは九・一八事件と言っていて、いつも抗議デモをしていたんですよ。」

♣二次会は近くの篠原演芸場へ。今日は旗丈司一座。五、六歳の女の子のライト係に仰天。丈司にうっとりする人あり、大笑いの一時。ありがとう。(馬場)

♥木犀の香を聴いて、います。四十年近い昔、国語の教科書にありました。独り慎シムとは、と尋ねられた高僧が「木犀の香をお聴きか。すれば、それが独り慎シムじゃ」と答えるのです。以来、私は今年に九月二十二日、というように初めてその香を聴く日を意識して秋を迎えてきました。昨年、木犀の香を聴くころを思うと夢のようです。ダイナミックでドラマチックな一年間でした。

♥家事労働をめぐる、言い尽くされているような内容にしたいと願いましたが、いかがでしょうか。いつも、頁の少ないことが何よりつらいです。今一番欲しいものは、We の頁！


♥次号は「家庭・家族」。い原稿が届いています。ご期待下さい。(半田)

告知板

▼'82年トータルライフ・フォーラム「くらしをトータルにみんなで考える研究集会」が11月11日13.00~16.00九段の私学会館で開催される。トータルライフ研究センター所長山本松代氏の講演「毎日のくらしとライフ・スタイル」の後、パネルディスカッションで、アメリカ・ドイツ・インド・フィリピンの主婦たちがパネラーとして発言。その後、公開討論「あなたの意見、わたしの意見」。会費は2000円、問い合わせ先トータルライフ研究センター(03)200-6086。

▼家庭科の男女共修をすすめる会集会、「男女平等に関する国会レポート」講師・石本茂氏、10月16日、1.30~4.30。

夏の全国交流会の内容がパンフレットになります。今準備をすすめているところ、黄、赤、ピンク、オレンジのパンフに続く5冊目は、グリーンです。

新しい家庭科 —  発行所/(有)ウイ書房

Vol.1 No.7 1982年10月20日発行 〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
 〒500 (年間購読料 ¥5,000) ☎03(326)1380 振替東京6-59867
 編集兼発行人/半田たつ子 印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

Weの仲間になって下さい

雑誌の購入には、①直接予約購読②書店予約購読③書店での販売の三方法がありますが、本誌は、当初①の方を募り、核になっていただきます。②③については、現在下記書店で、便宜を計って下さいます。

誰でもいつでも書店でWeを購入できるようにするには、何よりもWeの仲間をふやし、実績を作ることが肝要です。あなたのお力添えをお願いします。

Weの仲間をふやして下さい

予約購読料1年間5,000円(送料含む、1部500円)ご送金は、郵便振替が最も好都合です(東京6-59867)。又は、平和相互銀行つつじが丘支店・普通預金0698412(有)ヴィ書房。

(書店各位へ一地方・小出版流通センター)に窓口を開いておりますので、ご注文の時はご利用下さい。

—Weの取り扱い店一覧— お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい

(9月20日現在)

| | | | | | |
|-------|---------------|-------|----------|--------|-----------------|
| 旭川 | 富貴堂 | <葛飾> | 宏精堂 | 福井 | じっぷじっぷ |
| 盛岡 | 東山堂 | <世田谷> | やまべ書店 | | 吉川陵文堂 |
| 仙台 | こどもの本のみせ、プーの家 | <三鷹> | 第九書房 | | 山本書店 |
| | 八重洲書店 | <小金井> | 渡辺書店 | | 春江書店 |
| | ポラン | <府中> | 国府書店 | | 品川書店 |
| | 萩書房 | <国立> | 東海書店 | 岐阜 | 宝島 |
| 泉 | ホビット館 | <小平> | 和中華書店 | 奈良 | 海老山書店 |
| 秋田 | 加賀屋書店 | <八王子> | くまざわ南口 | 大阪 | 旭屋書店本店 |
| 福島 | 岩瀬書店 | <清瀬> | マルオカ書店 | | ユーゴー書店 |
| | 西沢書店 | <高尾> | 啓文堂高尾駅前店 | | 増田書店 |
| 郡山 | 十字屋書店 大月店 | 川崎 | 北野書店 | | 西坂書店 |
| 結城 | 太陽堂 | 横浜 | 有文堂 | 京都 | 松香堂書店 |
| 水戸 | ツルヤブックセンター | | 有隣堂 | 宇治 | 大久保京都書院 |
| 浦和 | 須原屋 | 相模原 | ブックス上溝 | 神戸 | 幾久書店 |
| | 岩瀬書店 | 鎌倉 | たらば書店 | 尼崎 | 宣文堂書房 |
| 船橋 | 前原かっぱ | 相模大野 | 相模書店 | 米子 | 今井MC本店 |
| 東松山 | 比企文化社 | 藤沢 | 豊元書店 | 広島 | やまびこ書店 |
| 浦安 | 原勝書店 | 静岡 | 百町森書店 | 山口 | 白藤書店 |
| 東京 | 露書店 | 浜松 | 中田島書店 | 松山 | 去来社 |
| <千代田> | ビッピ | 一宮 | 文正堂書店 | 北九州 | 北九州書店 |
| | 日成堂 | 名古屋 | ウニタ書店 | 熊本 | 高校生協 |
| | 書肆アクセス | 江南 | 青雲堂 | | 三章文庫 |
| | 三省堂本店 | 新潟 | 栗山書店 | 紀伊國屋書店 | 札幌、新潟、新宿、 |
| <文京> | 鈴木書店 | | 白石書店 | | 渋谷、玉川、住友、吉祥寺、川 |
| <新宿> | 模索舎 | 小千谷 | 島谷書店 | | 越、船橋、梅田、岡山、広島、 |
| | ブックスミヤ | 金沢 | 白山書店 | | 松山、福岡、熊本 |
| | 三省堂新宿西口店 | | うつのみや | | |
| <杉並> | 柏木堂書店 | | セールスセンター | 大学生協 | |
| | 木風舎 | 富山 | 清明堂書店 | | 畜産大学、福島大学、新潟大学、 |
| | 信愛書店 | 岡谷 | 笠原書店 | | 群馬大学、宇都宮大学、日本女子 |
| | ブラサード書店 | 福井 | ひまわり書店 | | 大学、東京大学、愛知教育大学、 |
| | | | | | 金沢大学、立命館大学、宮崎大学 |